

粟田遺跡第二次発掘調査報告書

1992年

石川県野々市町教育委員会

栗田遺跡第二次発掘調査報告書

1992年

石川県野々市町教育委員会

例 言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町粟田5丁目地内に所在する粟田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は津田駒工業株式会社の工場建設工事に係るもので、平成2年度に野々市町教育委員会が実施した。
遺物・調査図面類の整理作業及び報告書作成については平成3年度に実施した。
- 3 発掘調査は4月2日から10月15日にかけて田村昌宏が担当し、4月から6月にかけては石川県立埋蔵文化財センターより富田和気夫、安英樹両職員に調査派遣していただいた。
- 4 出土遺物・調査図面類の整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。
- 5 遺物写真撮影は田村昌宏が担当し、富田和気夫、安英樹の補佐を得た。
- 6 本遺跡の報告に当たって、花粉分析調査を金沢大学教育学部藤則雄教授にお願いした。
- 7 本書の執筆は以下の分担で行い、編集は田村が行った。
第1章 横山貴広 (野々市町教育委員会主事)
第7章 藤則雄 (金沢大学教授)
第2～6章 田村昌宏
- 8 調査の実施にあたっては石川県教育委員会文化課、石川県立埋蔵文化財センター、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会からの御協力と御指導を得た。
- 9 本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 本書での遺構・地図等の方位は全て真北を表示し、水平基準は海拔高で(m)で表示する。
また、写真図版中の出土遺物に付された番号は挿図の出土遺物実測図中に対応する。
 - (2) 土器実測図は断面黒塗りが須恵器で、スクリーントーンを貼ったものは赤彩を意味する。
 - (3) 遺構名の略号は次のとおりである。
 竪穴建物跡(SI) 掘立柱建物跡(SB) 土坑(SK) 溝(SD)
 小穴(P)
- 10 本遺跡の出土遺物、記録資料は当町教育委員会で保管している。

目 次

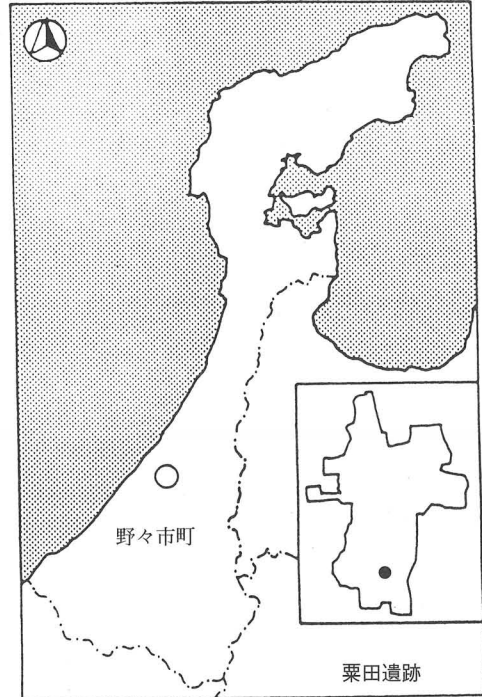
第1章	位置と環境	1
第1節	遺跡の位置と地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第2章	調査に至る経緯と経過	6
第1節	経緯と経過	6
第2節	調査区の設定	9
第3章	基本土層と旧地形	10
第4章	遺構	13
第1節	調査区の概要	13
第2節	石器製作場跡	13
第3節	竪穴住居跡	15
第4節	掘立柱建物跡	21
第5節	土坑、ピット	32
第6節	溝	34
第5章	遺物	37
第1節	土器・陶磁器	37
第2節	石製品	38
第3節	木製品	39
第6章	小結	66
第7章	栗田遺跡の花粉学的研究に基づく環境解析	70
観察表		80
写真図版		85

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

石川郡野々市町は南北に長く伸びる石川県の中央やや南寄りに位置し、町域のほとんどは手取川によって形成された広大な手取扇状地東部の平坦地上に存在する。白山連峰を源とする手取川は、鶴来町付近より流路を北から西方向へ転じ、石川郡美川町にて日本海へ注いでいる。手取扇状地はこの県下最大の河川の堆積作用により扇径約12km、展開度約110度の規模を有し、その威容を金沢平野に横たえている。町域の面積は約13.56km²で、北側から東側にかけての一带を金沢市に、西側から西南にかけての一带を松任市に、南側を鶴来町に接する。当町は古くから交通の要地・商都として開かれており、現在においても中央を横断する旧国道8号線（現305号線）に沿って巨大な商業地帯を有している。人口は約37,000人を数え、膨張著しい金沢市に南郊することによる人口及び開発の急増という問題を抱えており、県内一の2,859.14人/km²という人口密度を有している。

粟田遺跡はこの野々市町の南部、粟田・中林地区に跨って広がる集落跡で、標高33～35mを測る扇状地の扇央部北東寄りに位置し、東側には七ヶ用水の一つである富樫用水の分流、木呂川が北流する。本調査区西方では平成元・2年度に野々市町教育委員会が町スポーツ施設建設に先立ち「粟田遺跡中林地区」として発掘調査を実施しており、また遺跡の南側一帯では平成元年度より施行された野々市町南部土地区画整理事業も順調に進行しており、長閑な田園風景も近代的な都市景観へ変貌を遂げようとしている。



第1図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

粟田遺跡が存在する野々市町富奥地区は、県内でも最も早く耕地整理がおこなわれた場所であり、その着手は明治44（1911）年、完了は大正4（1915）年のことである。それ以前の人々の生活（＝農作業）の歴史は暴れ川として恐れられた手取川の治水との戦いと言っても良く、現在でも扇状地を網の目のように流れる七ヶ用水などにその苦労の跡が見て取れる。七度流路を変えたと伝えられる手取川は、その変遷の歴史の中でいくつかの中洲状になった「島状微高地」を形成しており、このことが古代以降出現する遺跡の分布に如実に反映していると思われる。昭和63年度に野々市町南部土地区画整理事業に先立ち実施された分布確認調査でも、間隙はあるものの南に位置する現在の上新庄集落からこの粟田遺跡にまで約1.5km続く大規模な集落跡が確認されており、この他、西に約1.7km離れた末松地区において知られている遺跡群の在り方や松任市に多く残る「島」の付いた地名の存在もその査証となる。

縄文時代

本遺跡周辺において、最も早く出現した人間の営みの痕跡は縄文時代後期中葉～晩期に展開した拠点的大集落跡として知られる新保本町チカモリ遺跡・御経塚遺跡である。また、若干距離はあるものの米泉遺跡も該期の拠点集落として評価されるものであり、新保本町チカモリ遺跡ともども巨大な樹木を半截した環状列木が検出されている。御経塚遺跡において大型土坑群とされた環状に巡る土坑群（昭和49年度第6次調査）も木柱痕こそ確認されていないが同様の環状列木であった可能性が高い。また、これらの他にも中屋遺跡・宮永B遺跡・福増遺跡・下福増遺跡などの集落跡が点在しているが、これらはいずれも地下水の自噴地帯として知られる標高10m前後を測る扇端部に位置しているものである。人間が生活するためには水の確保は不可欠であり、集落の選地にとって大きな比重を占めていたものと思われる。

これに対して、扇中央部において現在までに集落跡として知られているのは長竹遺跡・乾遺跡の二遺跡のみである。この他末松遺跡や清金アガトウ遺跡などでも晩期に属する土器片や打製石斧をはじめとする石器類が散発的に確認されるものの、定住生活を示す痕跡は未だ確認されていない。また、粟田遺跡においても平成元年度に（財）石川県埋蔵文化財保存協会が南側隣接地を調査した際に「打製石斧の製作場跡」と思われる状況を確認しており⁴⁾、生活様態の解明に向けて非常に興味深いものである。

弥生時代

弥生時代になると、前期から中期にかけての集落跡と確認されている遺跡は激減する様相を見せる。扇端部にあっては初期農耕の段階として知られる柴山出村式土器が御経塚遺跡と押野大塚遺跡で若干量確認されているが、集落の構造を解明するような成果は見られない。続く矢木ジワリ式土器の段階では標識遺跡となっている矢木ジワリ遺跡に加え、御経塚遺跡でも僅かではあるが確認されているに過ぎない。いかにも散発的との印象を受けるが、しばらくの空白期を挟んでの後期後半以降、北加賀地域では集落の数が爆発的と言ってもよい状況で増加する。この現象は何も手取扇状地に限った事象ではなく石川県内全域に見られることであるが、特に標高10mを測る扇状のラインに沿うようにして一塚遺跡・八田小鮎遺跡・竹松C遺跡・宮永遺跡など多くの集落跡が確認される。これらの在り方は前述の縄文時代の遺跡とほぼ等しく、農業技術の発達による生活基盤の確立と生活環境重視の選択がある一定の段階で融合した結果と考えられる。集落の増加と拡大は人口の増加を示唆し、該期に広く見られる遺跡の急増は農業経営基盤のある程度の確立を示しているものと言えよう。

これに対して扇中央部の状況は、前期から終末期をとおして先の縄文時代と同様目立った変化は見られない。前期としては上林遺跡と乾遺跡から柴山出村式土器が一定量出土しているほかは粟田遺跡において遠賀川式土器が僅かに確認されているのみである。（乾遺跡ではある程度まとまって見られるようである。）続いて弥生時代の集落跡が確認されるのは終末期を待たなければならず、木津遺跡・荒屋遺跡で数棟の竪穴住居が確認されている。また、平成元年度に野々市町教育委員会が実施した上新庄ニシウラ遺跡の発掘調査でも終末期の集落跡が確認されているが、これらはいずれも古墳時代までは存続しない短期間に営まれたものであり、特に木津遺跡に見られるような数度に渡る洪水の状況など、安定した経営基盤はもてなかったと思われる。手取川の氾濫に代表される厳しい自然環境はまだまだ容易には人々を受け入れなかったようである。

古墳時代

本遺跡周辺での古墳時代に比定される遺跡は他のどの時代よりもその存在が希薄であり、前期にあ

っては扇端部に立地し、平地に眠る大古墳群として注目を集めた御経塚シンデン古墳群と一塚遺跡、集落跡としては上荒屋遺跡が挙げられるのみである。御経塚シンデン古墳群は全長27mの前方後方墳1基を盟主とし、方墳のみから成る全13基で構成される古墳群であり⁽²⁾、直前まで営まれた集落を駆逐して造営されたものである。一方、一塚遺跡は山陰地方との関係を色濃く示す四隅突出墳墓をはじめ多くの墳墓群が確認されており、ともに現在は削られてしまっているものの他にも平野部に前期古墳群が存在する可能性を強く意識付ける成果となった。

これに対して、扇中央部においては現在までに古墳時代前期に属する遺跡は確認されていない。この地域に古墳が確認されるのは、僅かに松任市に存在し古墳時代末期の河原石積み横穴式石室を有する田地古墳と、詳細は不明であるが末松神社境内に存在する末松古墳の2基のみである。しかし、平成3年度に野々市町教育委員会が調査を実施した上林新庄遺跡では、田面下よりすでに破壊され石室最下列のみの検出となった上林古墳が確認されており、構造や出土遺物から田地古墳とほぼ同様の内容を持つものと考えられている。この時期はそれまで集落跡の空白地域であった扇中央部でも、ようやく新興開発領主層による本格的な開発が開始された時期にあたり、他にも発見されていない末期古墳が存在している可能性が高い。末松地区に残されている「塚」の付く旧地名の存在もその傍証となろう。今後の区画整理事業に伴う発掘調査により母体となる集落跡の確認も期待されると思われる。

奈良・平安時代

この時代には、扇端部では東大寺領横江庄遺跡・上荒屋遺跡・北安田遺跡といった質・量ともに他を圧倒するような遺跡が確認されており、官的視野に立てば周辺の開発もまさに成熟期を迎えたかのように見えるが、これに反して当時の一般的な集落の姿はまだ解明されているとは言い難い。本遺跡の舞台となる扇中央部でも、遅くとも7世紀初頭から始まった開発の波は一応の成果を収めたものと思われ、特に末松地区と上林・新庄を中心とした南部地区で急速に集落の拡大がおこなわれる。この内、末松ダイカン遺跡・末松遺跡は白鳳時代の建立とされる末松廢寺跡と密接な関係を持つ集落跡として位置付けられており、南部地区に連なる上新庄ニシウラ遺跡・上林新庄遺跡・上林テラダ遺跡・下新庄アラチ遺跡・下新庄タナカダ遺跡も該期の集落の在り方を理解するための情報を多く与えてくれるものと期待される。南部地区の調査については平成元年度よりその堵についたばかりであり詳細は今後の進展に譲るが、上新庄ニシウラ遺跡ではすでに大規模な掘立柱建物跡が整然と建ち並ぶ様相が確認されており、栗田遺跡までを含めた長大な島状微高地上に展開した集落跡の質の高さを予想させる。

中世

中世のこの地域において、まず注目しなければならないのは加賀武士団の棟梁林氏の存在である。加賀国衛の在庁官人として勢力を持った林氏は、一時は加賀・能登各地に分布するほどの一大勢力に成長するが、承久3年(1221)の承久の乱において上道氏と共に院方を支持しその後は没落の一途を辿ることとなる。林氏の居館伝承地としては鶴来町日御子・知気寺・野々市町中林・松任市向島などが挙げられるものの、いまだ考古学的な実証はなされていない。ただ、その支配の痕跡として今も地名に上林・中林・下林(いずれも野々市町)などの名称が残されている。

一方で、中世の野々市を考える上で富樫氏の存在にも注意を払う必要がある。承久の乱において没落した林氏・上道氏に代わって台頭した富樫氏は、北条氏一族や斯波氏・赤松氏の支配を受けるといふ苦渋の時を経て当時「野市」、「布市」と呼ばれる市が形成されていた現在の野々市町本町地区に守

護所を定めている。その形跡は幕末の森田柿園著による「石川訪古遊記」に記された当時まだ残存した土墨の痕跡と古絵図とのすり合わせや、付近に残された「御所」・「富樫館」・「長土居」・「馬場跡」・「宮地」などの関連する地名の検証からもある程度は推定可能であるが、現時点では実証できていない。

室町時代も末の頃になると、長享2年（1488）に高尾城で第14代富樫正親を滅ぼした一向一揆が歴史の表舞台に登場し、以後約100年間織田信長により崩壊させられるまで所謂「百姓の持ちたる国」として自治をおこなうこととなる。しかし、このころの遺跡としては歴史の古い野々市町ではほとんどが現在の集落と重なるものと見られ、新たな資料として町の北側に位置する長池キタバシ遺跡が知られるのみである。御経塚第二土地区画整理事業に伴う事前の分布確認調査で発見された遺跡であるが、未調査のため詳細については不明である。

《 註 》

- (1) 石川県立埋蔵文化財センター小嶋芳孝氏の御教示による。
- (2) 東側の調査区については未調査部分を残すため、今後更に増加する可能性もある。



- | | | | |
|--------------|--------------|----------------|---------------|
| 1. 栗田遺跡 | 8. 長池キタバシ遺跡 | 15. 富樫館跡 | 22. 下新庄アラチ遺跡 |
| 2. 清金アガトウ遺跡 | 9. 米泉遺跡 | 16. 扇が丘ハワイゴク遺跡 | 23. 上林新庄遺跡 |
| 3. 新保チカモリ遺跡 | 10. 押野大塚遺跡 | 17. 高尾イシナ塚古墳 | 24. 上林遺跡 |
| 4. 上荒屋遺跡 | 11. 押野タチナカ遺跡 | 18. 乾遺跡 | 25. 上新庄ニシウラ遺跡 |
| 5. 横江庄遺跡 | 12. 安養寺遺跡 | 19. 高尾城跡 | 26. 末松廢寺跡 |
| 6. 御経塚シンデン遺跡 | 13. 長坂二子塚古墳 | 20. 田地古墳 | 27. 末松遺跡 |
| 7. 御経塚遺跡 | 14. 扇が丘ゴシヨ遺跡 | 21. 額谷ドウシンダ遺跡 | |

第2図 周辺の遺跡

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 経緯と経過

粟田遺跡発掘調査は津田駒工業株式会社による野々市工業用地内工場施設建設に伴う緊急調査業務である。本遺跡の存在する野々市町粟田5丁目地内は県農業試験場の農用地のあった場所で、県農業試験場が金沢市八田町に移転するに伴って跡地が工場用地として造成され民間企業に売却されるに至った。

1988年10月から11月にかけて県立埋蔵文化財センターで試掘調査を実施したところ工場用地全面に遺跡が存在することがわかり、1989年度社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査を実施した。

この1989年の調査中、津田駒工業の方から工事予定地の北側約3,300㎡を対象とした追加工事の計画が持ち上がり、県立埋蔵文化財センターが同年7月に試掘調査したところ対象範囲全面に遺跡があることがわかった。同年11月、県商工労働部商工課、県教育委員会文化課、県立埋蔵文化財センター、県埋蔵文化財保存協会、野々市町教育委員会との間で新たな工事計画対象地における埋蔵文化財発掘調査についての協議を行った。調査必要面積は当初より300㎡多い約3,600㎡となった。協議の結果、調査期間については当該年度に調査面積を増加して実施することはできないということで、翌1990年度野々市町教育委員会が主体となって実施することになった。しかし、津田駒工業側の工事計画では町教育委員会だけで遂行することは困難なことから、県立埋蔵文化財センターが協力する体制をとって調査を行うこととした。

1990年1月に県教育委員会文化課と町教育委員会と話し合いの場をもち、次年度発掘調査において県から2名の職員を派遣してもらうことで合意した。

同年3月、津田駒工業、県商工課、町教育委員会の3者で次年度の粟田遺跡発掘調査を実施するにあたり円滑に進捗するための協議を行い、同年3月8日、3者による野々市工業用地における埋蔵文化財に関する協定書を締結した。

同年4月2日、発掘調査実施計画書に基づき、津田駒工業と町との間で委託契約を締結し、3,600㎡の対象地の発掘調査に入った。

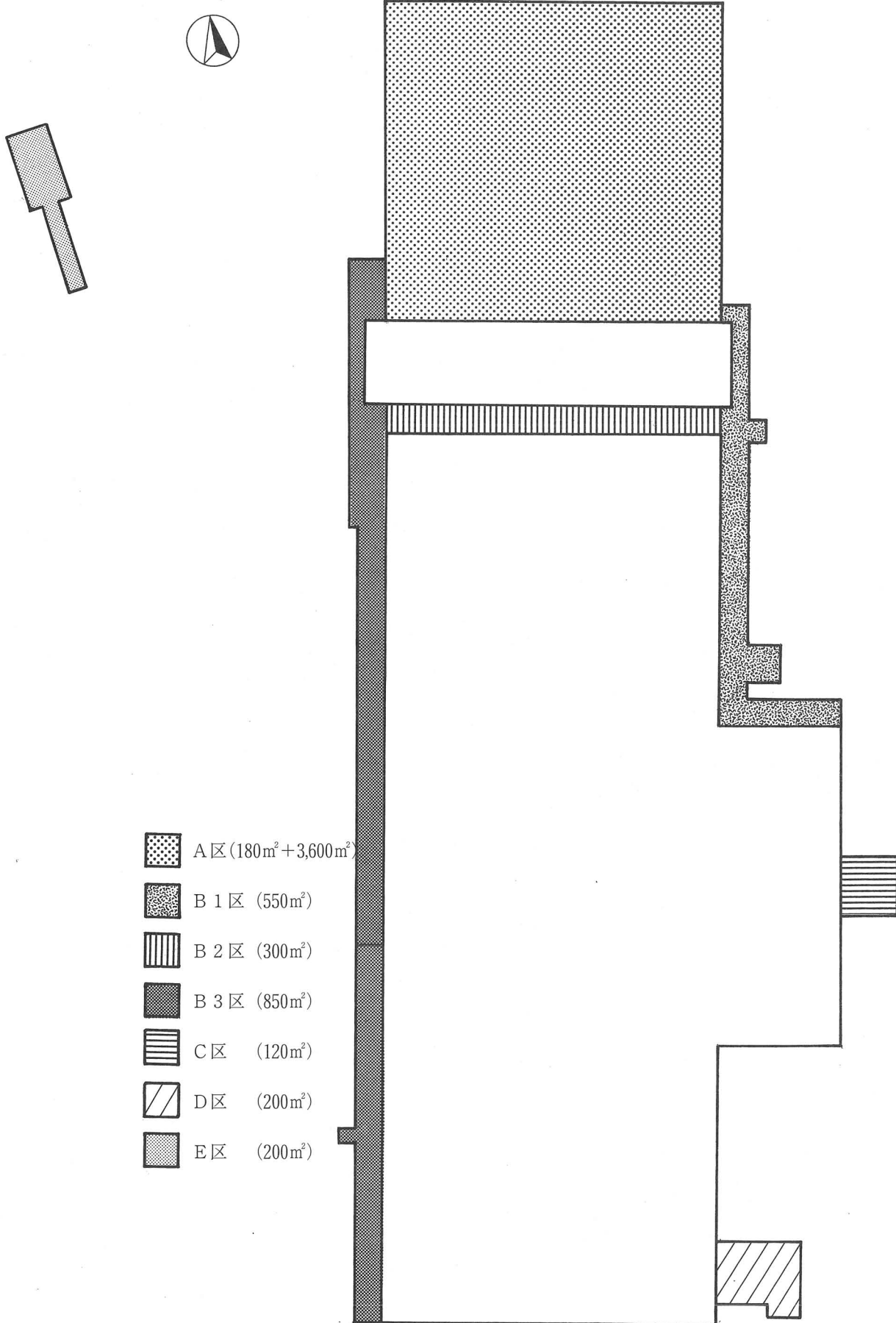
調査の期間は4月から6月末を予定しており、作業は順調に進んでいったが、5月に津田駒工業側から当初の工事予定地の範囲を変更して規模を一回り大きくするという計画が打診された。直ちに津田駒工業と町教育委員会との間で協議を行い、教育委員会の方で調整を行った。結果、当初予定していた発掘調査終了後すぐに、変更増加分の調査を行うことで合意した。増加した調査地は1989年度発掘調査を実施した工場用地の外周及び当該年度調査地の北側、工場用地と本年度調査地との間、そして当該年度調査地から西約100m進んだところの浄化槽設置箇所である。増加した調査面積は合計約2,400㎡で、同年7月10日、あらためて津田駒工業と町との間で変更契約を締結し調査を継続していった。調査は工場建設工事と併行するため周囲の状況にも目配せしなければならず、津田駒工業及び工場、工事担当者と随時打ち合わせをしながら調査を重ね、同年10月15日に終了した。

翌1991年には出土した遺物整理を実施した。遺物整理については1989年11月の協議で県埋蔵文化財保存協会に委託することになっており、1991年3月、県埋蔵文化財保存協会と町教育委員会との間で話し合いの場がもたれ4月1日に双方との間で委託契約を締結した。

遺物整理業務は当初6月で終了を予定していたが整理する遺物数量が増加したため、同年5月17日変更委託契約を締結し、同年7月31日完了した。



第3図 調査区位置図 (S=1/2500)



第4図 調査区域図



B-1区



B-3区

発掘調査風景

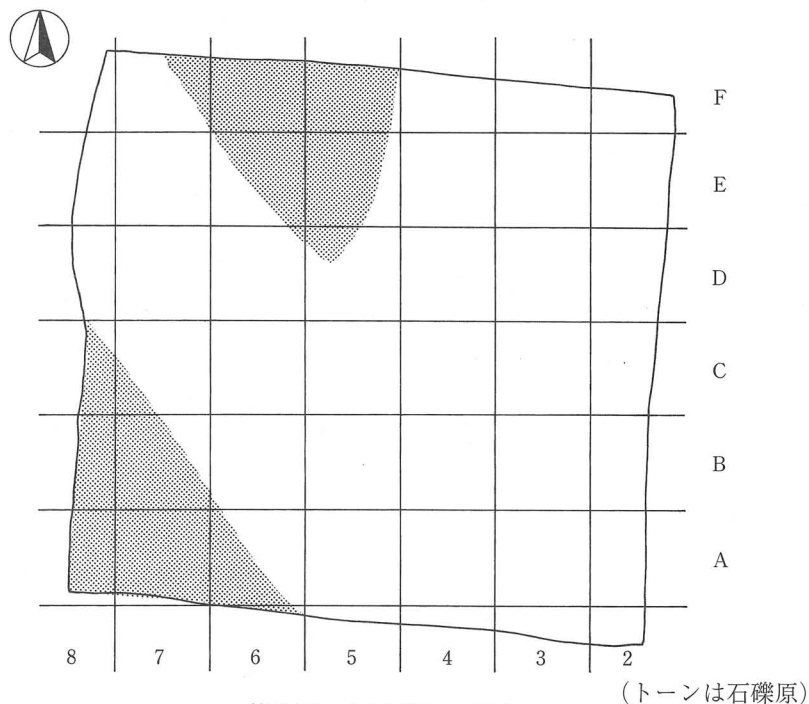
第2節 調査区の設定

調査区については当初から調査予定していた箇所と変更増加した箇所は広汎でそれぞれ離れた地点に設定しているため大きくA～E区に設定した。(第4図)

当初予定した3,600㎡の地点及びその北側約180㎡をA区とした。なお、A区については第5図のとおりに10m間隔でグリッドを設定し、遺物はグリッド別にして取り上げた。

1989年度調査地を囲んだ外周箇所及びA区と連結する地点をB区とし、その中から東に接するところをB-1区、北側に接する地点をB-2区、西側をB-3区に区分した。

1989年度調査地の中央から東へ突き出した約120㎡を対象とした地点をC区、南東隅の鉤型をした調査地点をD区、A区から西へ約100m進んだ浄化槽取り付けに伴う調査地点をE区とした。



第5図 A区グリッド図

第3章 基本土層と旧地形

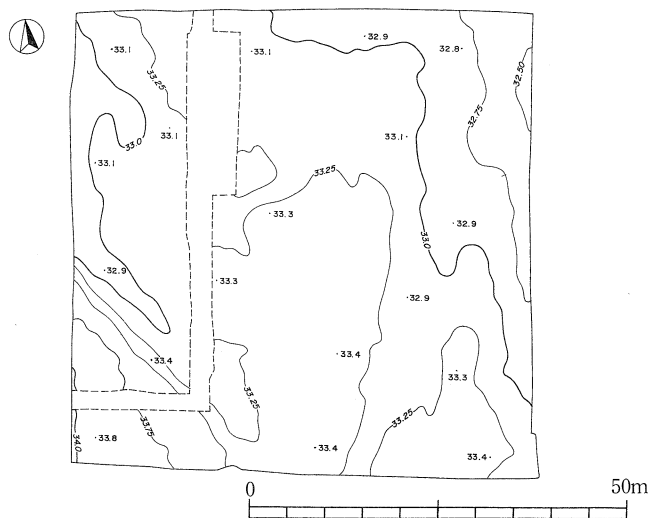
本遺跡の層位は比較的細かいが、耕作土の層が連続して堆積するため、それ以外は単純である。第7図のA区南壁面土層断面図を参照に説明していく。

耕作土は現在の水田面を含め3つの水田層を確認できた。(水田Ⅰ-1と2、水田Ⅱ-3と4、水田Ⅲ-5と6と7) 耕土の下には鉄分を有した床土が全般的に堆積している。水田Ⅰは旧県農業試験場の農用地と考えられ、調査前まで存在した耕作土である。水田Ⅱと水田Ⅲは水田Ⅰ以前に存在した耕作土で、一部途切れる箇所がある。図示はしていないがA区北壁面の土層を観察したところ、明治期頃まで存続したと思われるSD28が水田Ⅱの層から掘りこんでいることがわかった。このことから水田Ⅱは耕地整理以前の耕作土、水田Ⅲは江戸時代の耕作土と推定する。水田Ⅲより下の土層8も耕作土と思われる。南壁面を見ると非常に薄く全長6m程でなくなってしまうが、A区北壁面の層では綿々と連なっている。中世面の層にあたるかもしれない。

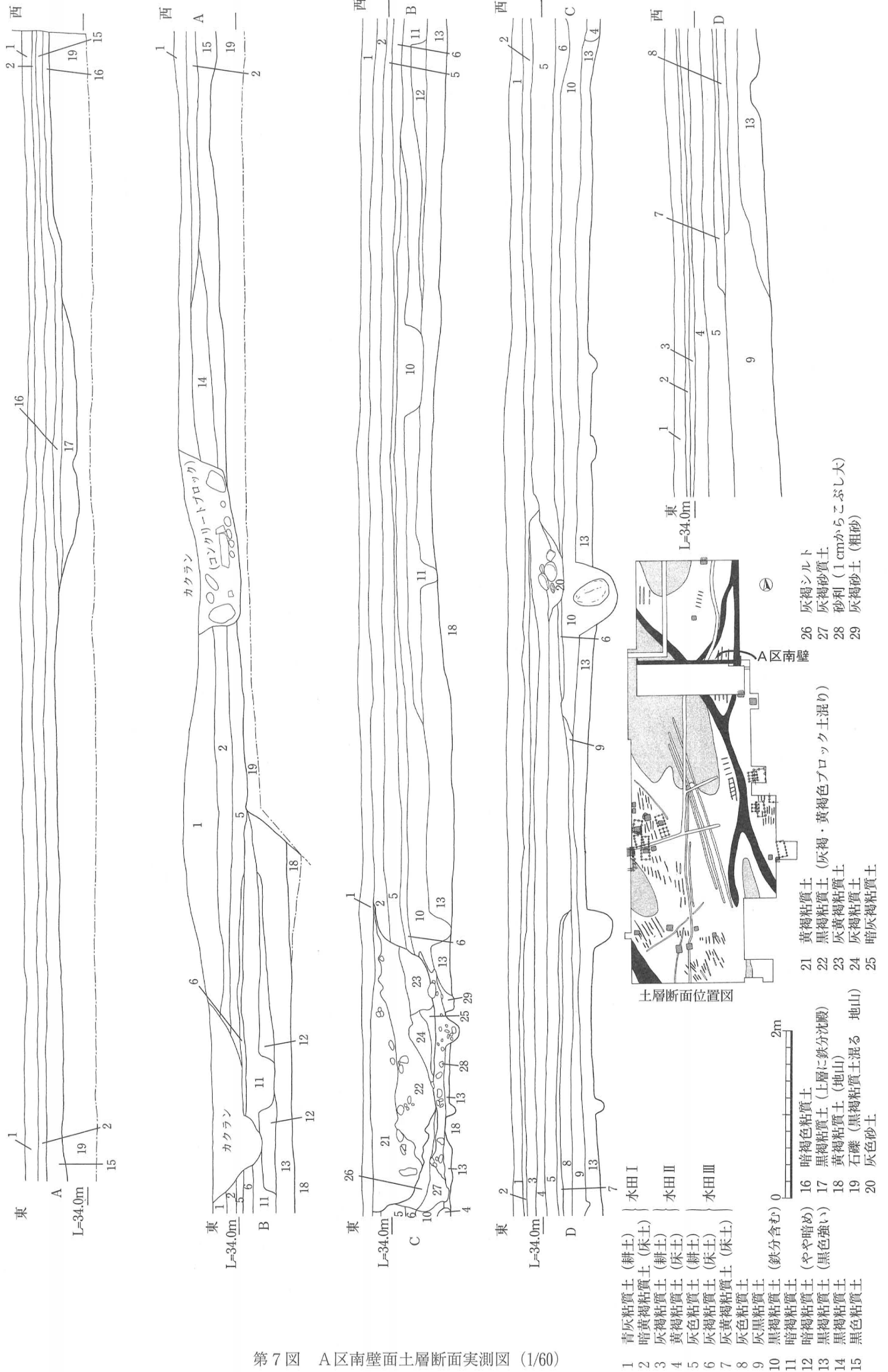
土層9から15は遺物包含層にあたる。暗褐色や黒色など土色に微妙な変化が見られるが、基本的に北加賀地域で見られる土質と同じである。A区北端のSⅠ1は土層13の黒褐色粘質土から掘り込んでおり、古代の面は地山面より20cm前後高いと推定される。

地山面は土層18と石礫層19である。南壁面を観察したところ土層18より下方に石礫層19が堆積している。この石礫層19は凹凸が激しく、西方へ進むと突然約50cm高く堆積する。この石礫は手取川が運んできた川原石の堆積層で、流れ着いた石礫の上に新たな小河川が流れ込み、島状の高まりと鞍部が形成されて島の上に石礫が残ったと考えられる。鞍部は土砂の堆積が顕著であることから土層18が堆積したと想定される。

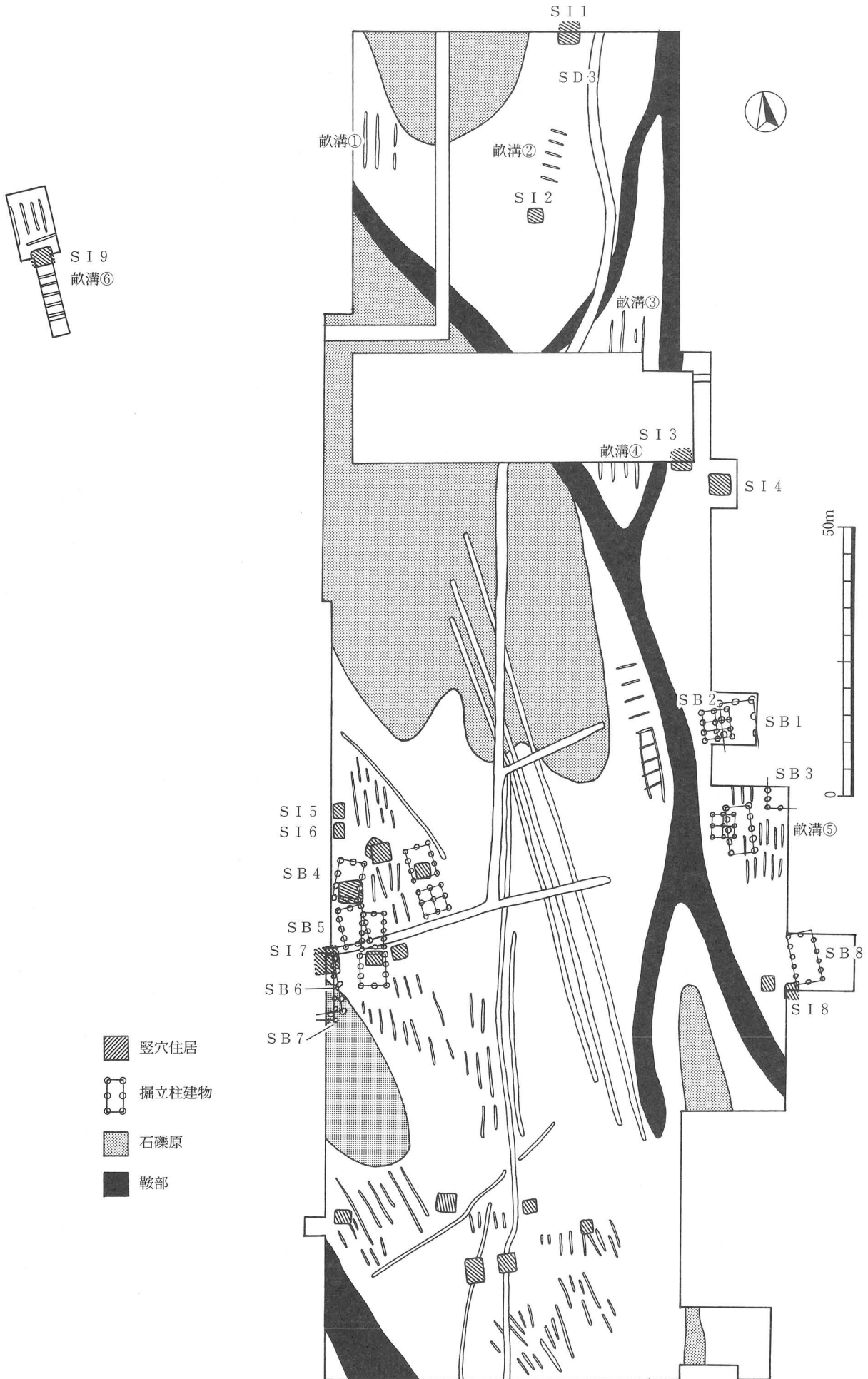
粟田遺跡の旧地形については前述したとおりアップダウンの著しい凸凹した地勢をもつ。A区の標高地は鞍部の低いところで32.5m、石礫層の高いところで34mを測り、約1.5mの高低差をもつ。前年度の県埋蔵文化財保存協会の発掘調査地を含めて見ていくと、鞍部は東南から北西へ向かって下っている。鞍部は途中で二股に分かれたり分流したものが1本に合流したりと流路を変えながら走る。鞍部と鞍部間の微高地上の地山面は石礫の層と黄褐粘質土の層があり、ほとんど同じ高さである。ただし、後世の耕作土により石礫の面が大きく削平されているため、当時の地形は調査時の風景よりも大きな高低差があったと思われる。



第6図 A区旧地形測量図 (S=1/1000)



第7図 A区南壁面土層断面実測図 (1/60)



第8図 全体遺構略測図 (S=1/1000)

第4章 遺構

第1節 調査区の概要（第4図、第8図）

A区

石礫原1が北西側一帯に、石礫原2が南西側にあり、その間には1989年度県埋協の調査区で検出した鞍部の延長部が存在する。鞍部は調査区東方に枝分かれしたり、別の鞍部と合流したりして、微高地を形成している。微高地にはS I 1、S I 2が確認でき、周囲には耕作畝溝が石礫原を避けるようにして掘られている。近代溝S D 3が調査区真ん中を南北方向に蛇行しながら流れる。

B-1区

A区と1989年度調査区とを連結する幅の狭い調査区では特筆すべき遺構・遺物は確認していない。1989年度調査区と接する箇所では鞍部の東岸にあたり、調査区北東隅からS I 3やS I 4、S I 3・4から南へ40m離れたところからS B 1～S B 3を確認している。

B-2区

1989年度調査区の北端に位置し、東側には枝分かれする鞍部やその間にまたがって形成する畝溝があり、西側は石礫原2が広く展開する。A区S D 3の延長が調査区中央を流れる。

B-3区

1989年度調査区の西側一帯を示す。北側は石礫原2が広がっている。南へ下り、ほぼ中央付近では竪穴住居跡（S I 5～S I 7）や掘立柱建物（S B 4～S B 7）群が密集する。近代溝S D 3の延長が建物密集域を分断するように横切っている。これより南は石礫原1や2よりもやや小振りの石が埋積する石礫原が存在する。南端は北西―南東ラインの大きな鞍部が存在する。

C区

B-1区南端から南へ40m離れた調査区である。調査区全体にピットが錯綜しており、その中にS I 8やS B 8が確認された。調査区外にも竪穴等の建物が存在する可能性があり、建物群が周囲に展開しているかもしれない。

D区

1989年度調査区の東南隅に位置する。遺構検出面の標高地が高く、耕土直下で地山面を確認した。ピットが多く検出されたが、大きさや深さは不揃いで、遺物もほとんど出土しなかったことから、集落と集落の間の空闲地であったと思われる。

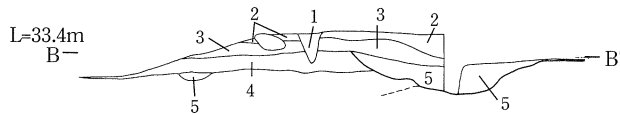
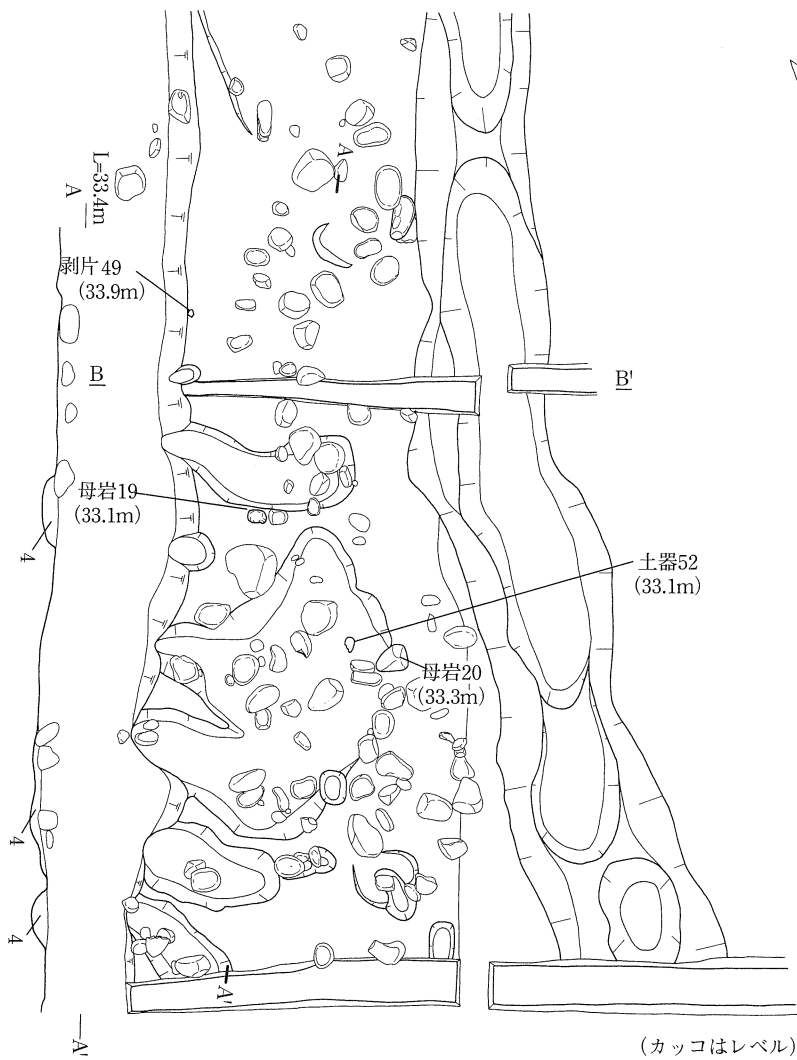
E区

A区から西へ約100m進んだところに位置する。調査区の中央にS I 9があり、そこから北側には南北の畝溝、南側には東西の畝溝が走り、竪穴を中心とした土地利用がなされていた模様である。

第2節 石器製作場跡

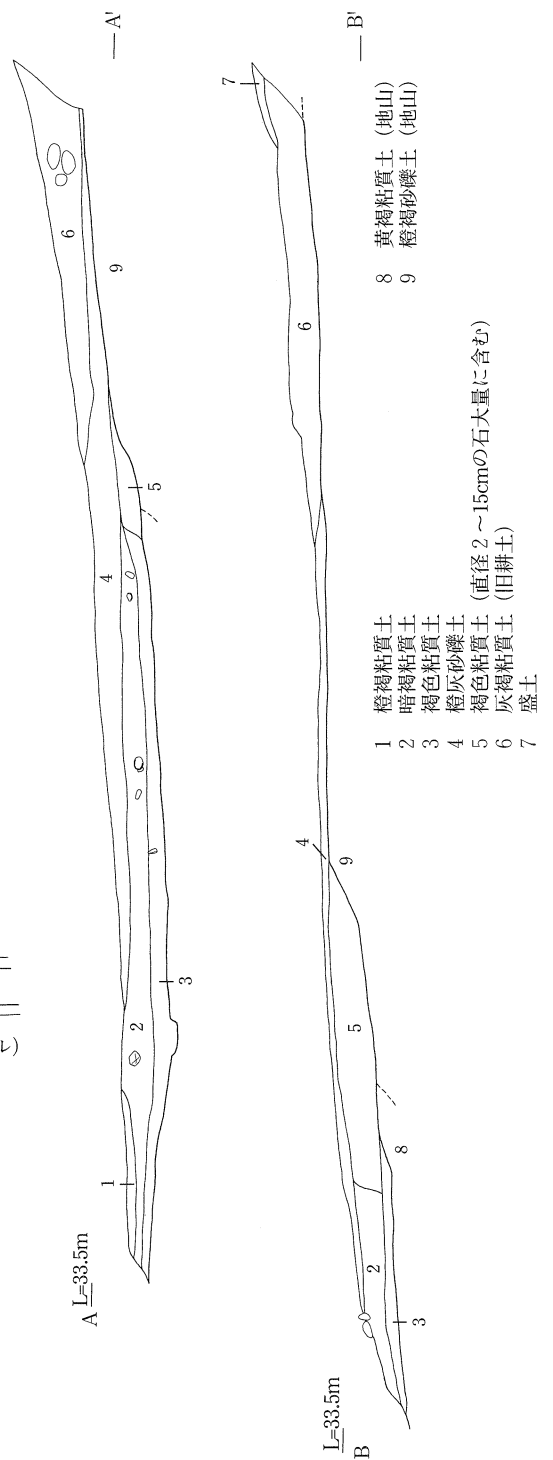
石礫原1（第9図）

A区の北西側に展開する石礫群である。東西の最大長30m、南北最大長25mの大きさを持ち、北方調査区外にのびていく。明治から大正期にかけての耕地整理以降に掘られた幅3.5～6.5mの用水が南北に流れ分断している。（用水はA区中央で東西にクランクする。）標高地は33.0～33.4mで起伏はなく、



- 1 暗灰褐粘質土 (樹木痕に上層の土が入り込む)
- 2 灰黄褐粘質土
- 3 暗黄褐粘質土
- 4 黒褐粘質土
- 5 暗褐粘質土

第9図 A区石礫原1 西側おちこみ
平面図・土層断面図 (S=1/60)



- 1 橙褐粘質土
- 2 暗褐粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 橙灰砂礫土
- 5 褐色粘質土 (直径2~15cmの石大量を含む)
- 6 灰褐粘質土 (旧耕土)
- 7 盛土
- 8 黄褐粘質土 (地山)
- 9 橙褐砂礫土 (地山)

第10図 A区石礫原2 土層断面図 (S=1/60)
(付図 遺構全体図参照)



周囲の地山の高さとの差違はあまりない。石は拳大から人頭大と様々で、打製石斧をつくる上では十分な大きさをもっている。しかし、ここで石を割った痕跡をもつものは非常に少なく、後述する石礫原2の地点から出土した母岩や剥片の数と大きな隔りがある。この石礫原の西隣には南北ラインの溝状の落ち込みがある。形状は不定形で石礫原から粘質の地山土に移行する箇所で見られることから自然状の落ち込みと考えられる。全長は約8m、幅0.8～1.3m、深さは15cm前後で、周囲の黒色粘質土中から母岩19、20や剥片49などを検出している。

石礫原2（第10図）

A区南西側からB-2区の西、B-3区の北側にかけての範囲をもっている。1989年度県埋蔵文化財保存協会の調査で確認した石礫原の延長部にあたる。方向は南東—北西ラインで、1989年度調査分を含めての規模は北東—南西間で約50m、南東—北西間は約100mでさらに北西方向に調査区外へのびていく。標高は34.0～34.3mと石礫原1よりも約1mほど高い。A区での表土掘削の際、一部遺構面を削りってしまったが、その他の石礫面や石礫面と黄褐色の地山土の接するところからは定量の石器製作工程の石片を検出することができた。

第3節 竪穴住居跡

S I 1（第11図）

A区中央北端に位置する竪穴で、向きはN—5°—Eで、東西4.2m、南北1.6m以上の隅丸方形プランである。床面には黄褐色土の貼床が見られる。南東隅は東西約1m、南北約50cmの膨らみもち本来の方形プランを異とする。北側半分は調査区外となるため全体の面積など様相はつかめない。南西隅には約1m四方の歪んだ方形をしたピットが掘られている。竪穴内にはこの他に直径30～50cmのピットが4個確認しているが、いずれも10～25cmの深さしかもたず柱穴とは考えにくい。竪穴の南外には直径30cmと50cmの穴があるが、これらもこの竪穴に付く穴かどうかは判断できない。

竪穴内東側には南北に長い焼土塊を検出した。カマドの一部と考えられるが、詳細な構造は判然としない。

S I 2（第12図）

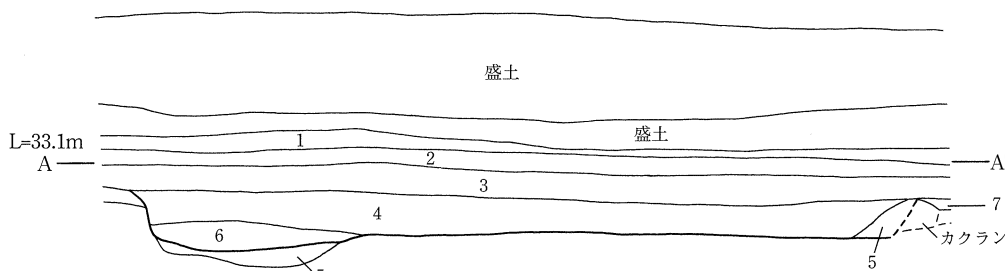
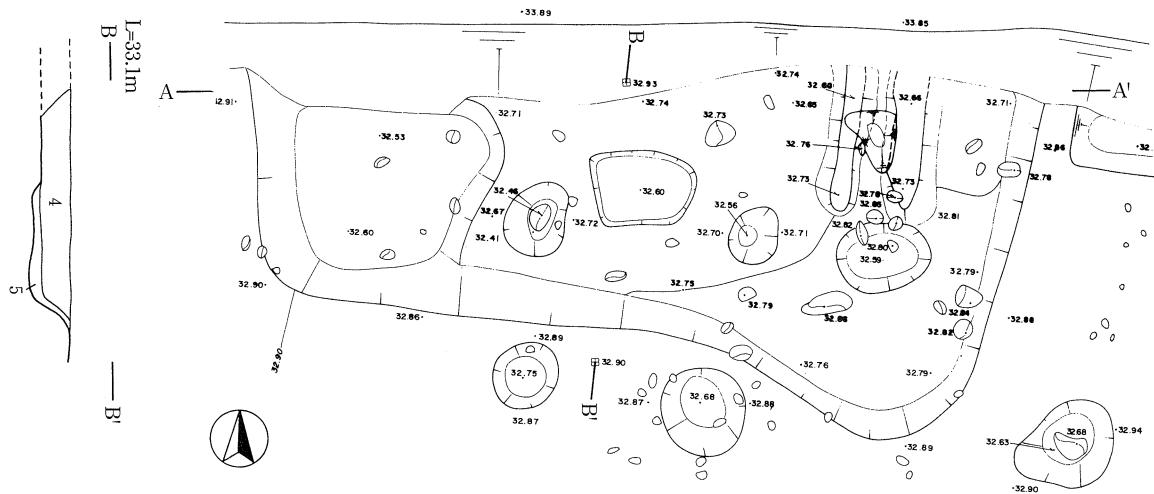
A区中央のやや東南寄りにある。方向はN—7°—E、一辺2m弱の小さな竪穴である。プランは隅丸方形で、深さ約20cmとしっかりした掘方をもつ。貼床は検出できなかった。内部には直径約20cmのピットが3個存在するが、柱穴とは考えにくい。カマドは存在せず、周囲も関連するような遺構は見られない。中から須恵器や土師器が竪穴の規模に反して意外に多く出土している。

S I 3（第13図）

B-1区とB-2区の間にある竪穴で、ほとんどは調査区外となる。方向はN—10°—Eで、東西3.5m、南北95cm以上の隅丸方形である。深さは平均10cm程と比較的浅く、貼床やカマドはもたない。内部には直径10～20cm、深さ5～10cmの穴が数個存在する。

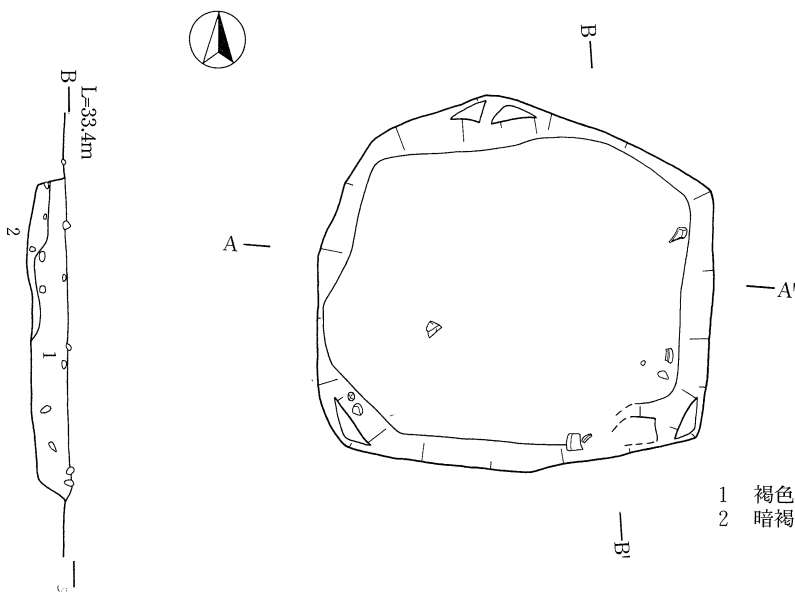
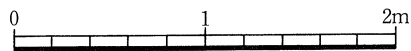
S I 4（第14図）

B-1区の北方にある竪穴で、4m四方の方形プランである。当初西側一部のみしか検出できな



- 1 灰褐粘質土 (旧耕土)
- 2 暗褐粘質土 (鉄分含)
- 3 黒褐粘質土 (包含層)
- 4 暗褐粘質土
- 5 暗灰粘質土
- 6 黒灰粘質土
- 7 黒褐粘質土 (石礫多量に含む)

第11図 A区S I 1実測図 (S=1/40)

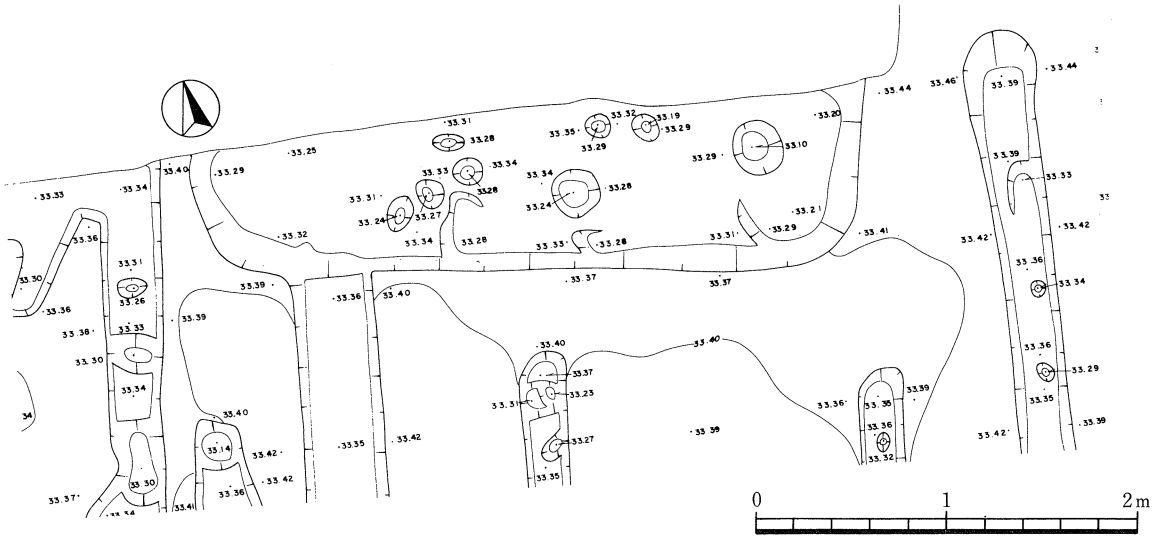


- 1 褐色粘質土
- 2 暗褐粘質土

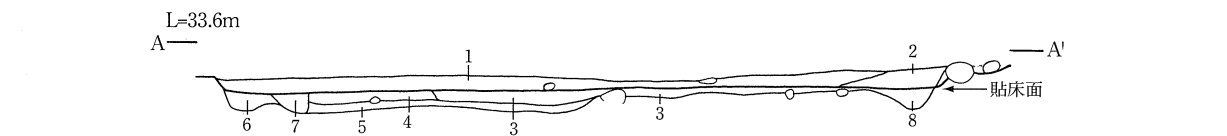
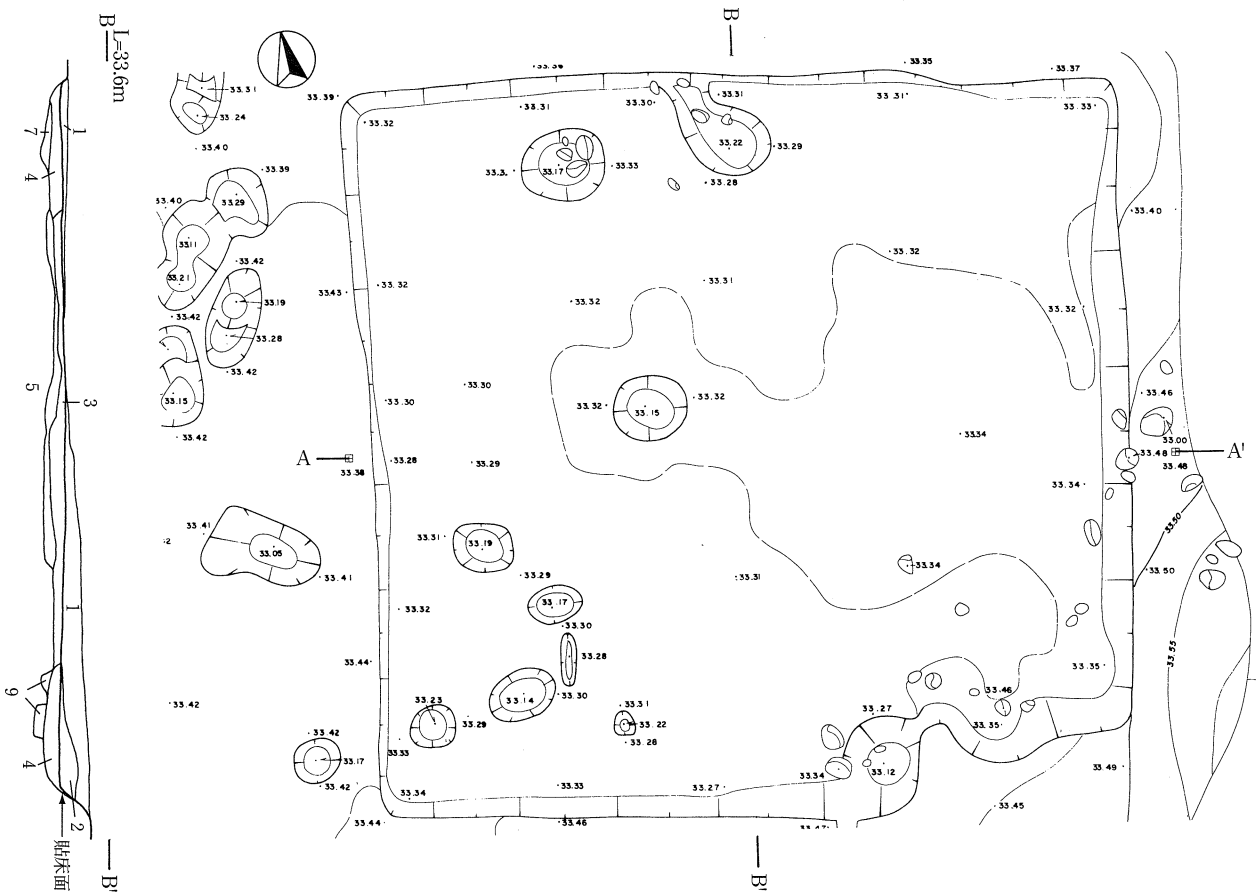


第12図 A区S I 2実測図 (S=1/40)





第13図 B-1区S I 3実測図 (S=1/40)



- | | |
|-----------------|-----------|
| 1 褐色粘質土 | 6 黄灰砂質土 |
| 2 暗褐粘質土 | 7 暗灰黄褐砂質土 |
| 3 明黄褐砂質土 (貼床) | 8 暗褐砂質土 |
| 4 暗灰褐砂質土 | 9 灰褐砂質土 |
| (明黄褐ブロック土混り、貼床) | |
| 5 暗灰褐砂質土 | |

第14図 B-1区S I 4実測図 (S=1/40)

ったため、拡張して全容を明らかにした。方角はN-1°-Eでほぼ真北にちかい。内部の西側一帯には直径30cmのピットを数個確認できたが、柱穴になるかは判断しがたい。床面は黄褐色土の貼床が張っている。深さは地山面から5~10cmしかないため遺物はあまり多く出土していない。南西隅にカマドがあり、その周辺には土師器の破片が散乱していた。カマドは袖の付け根が一部残るだけで明確なプランは見えない。意図的に壊した可能性もある。

S I 5 (第15図)

B-3区のほぼ中央に位置し、N-9°-Wの方角をもつ堅穴である。西側半分は調査区外となり全体の構造はわからない。東西2m以上、南北2.5mの不定型な形をしている。床面までの深さは5~10cmと非常に浅く、貼床はもたない。覆土は黒灰色粘質土の単層である。調査区西壁面に接する箇所から第34図14の有台坏が半分にわれた状態で発見された。堅穴内部には切り合いをもつ溝や性格不明のピットが散在している。また、ピットの中やその周りには拳大の自然石が黒灰色の覆土といっしょに混じって見ついている。

S I 6 (第15図)

B-3区のS I 5の南隣に存在する。方角はN-2°-Wでほぼ真北を向く。東西、南北ともに2.3mの長さをもち本来は方形プランと思われるが、周辺を含むピット群が錯綜しているため歪な形態に見える。深さは5~10cm、覆土は黒灰色粘質土の単層、床面に貼床はもたないなどS I 5と基本的な構造は変わらない。錯綜している穴は直径30~50cm、深さ10~25cmの様々な形をもつが、柱穴と想定されるものは確認していない。

S I 7 (第16図)

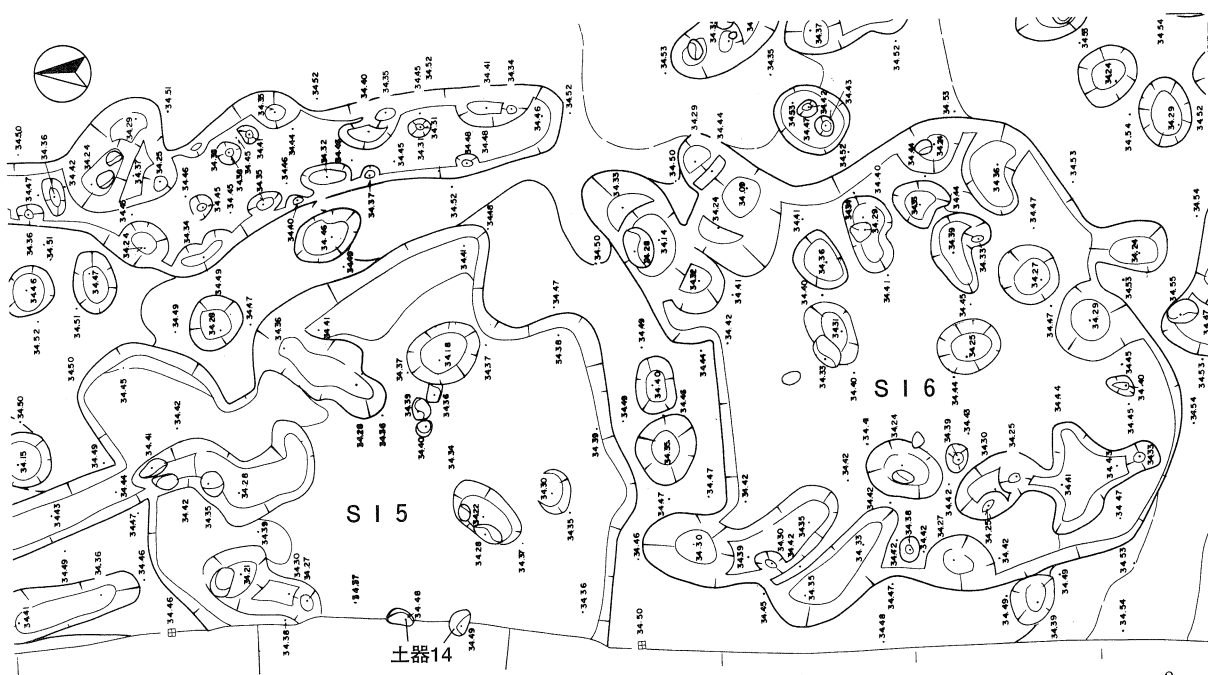
B-3区のS I 6から南へ30m進んだところにある。東西3m以上、南北3m以上の方形プランで、ほぼ真北の方向をとる。西側は調査区外、北側は東西に走る近代溝SD3に切れ、内部においてはSB6、7の柱穴が掘られ細かい構造はよくわからない。床面までの深さは平均20cm前後、黄褐色の覆土をした貼床をもっている。調査区西壁面に接して見つかった一辺50cm、深さ25cmのピットがこの堅穴の柱穴の可能性をもつ。南東隅にはカマドが設けられている。SB6、7の柱穴などで一部破壊を受けているが、片側袖部を検出することができた。袖部は長さ1m、幅20cmの地山土の黄褐色粘質土を使用し、内側は赤く焼けていた。煙道は幅50cmの溝状になっているが、これは後に掘り返された可能性がある。切り合いから堅穴廃絶後SB6、7が建てられたようである。

S I 8 (第17図)

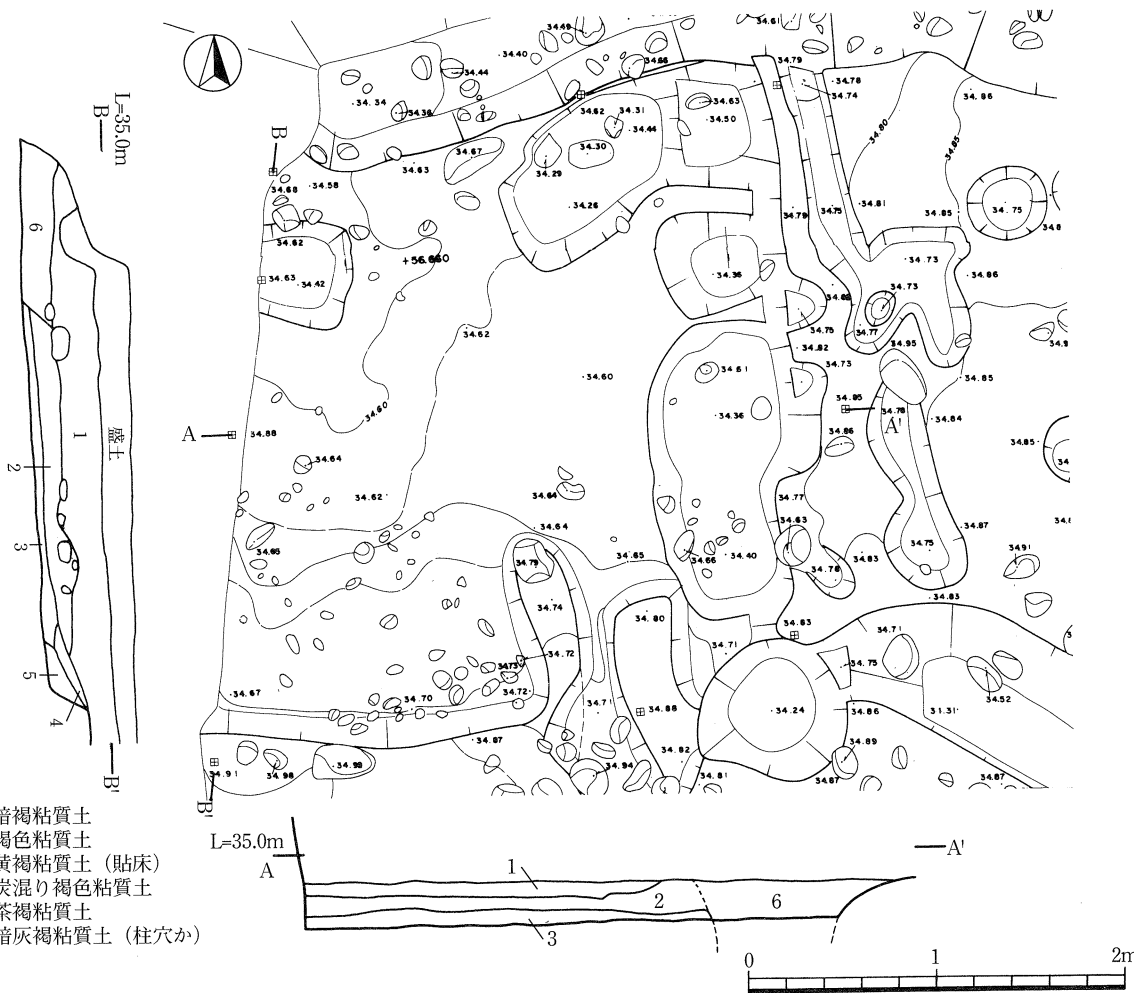
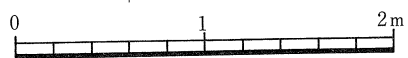
C区南西隅で見つかった堅穴である。方向はS I 7と同様ほぼ真北である。西と南側は調査区外となり検出できなかった。確認できた範囲で見ると東西1.5m以上、南北1.3m以上の方形プランとなる。南壁面際に大きなピットが存在するが、柱穴になるかは検討を要する。床面は貼床をもち、掘方は15cm程の深さである。内部には直径約40cmの焼土塊を確認した。堅穴の北西隅には直径50cm、深さ30cmのピットが掘られている。この辺りにカマドが存在したかもしれない。

S I 9 (第18図)

E区中央に位置する堅穴で、真北に近い方角をとる。東西4.6m、南北4.0mの方形プランであるが、



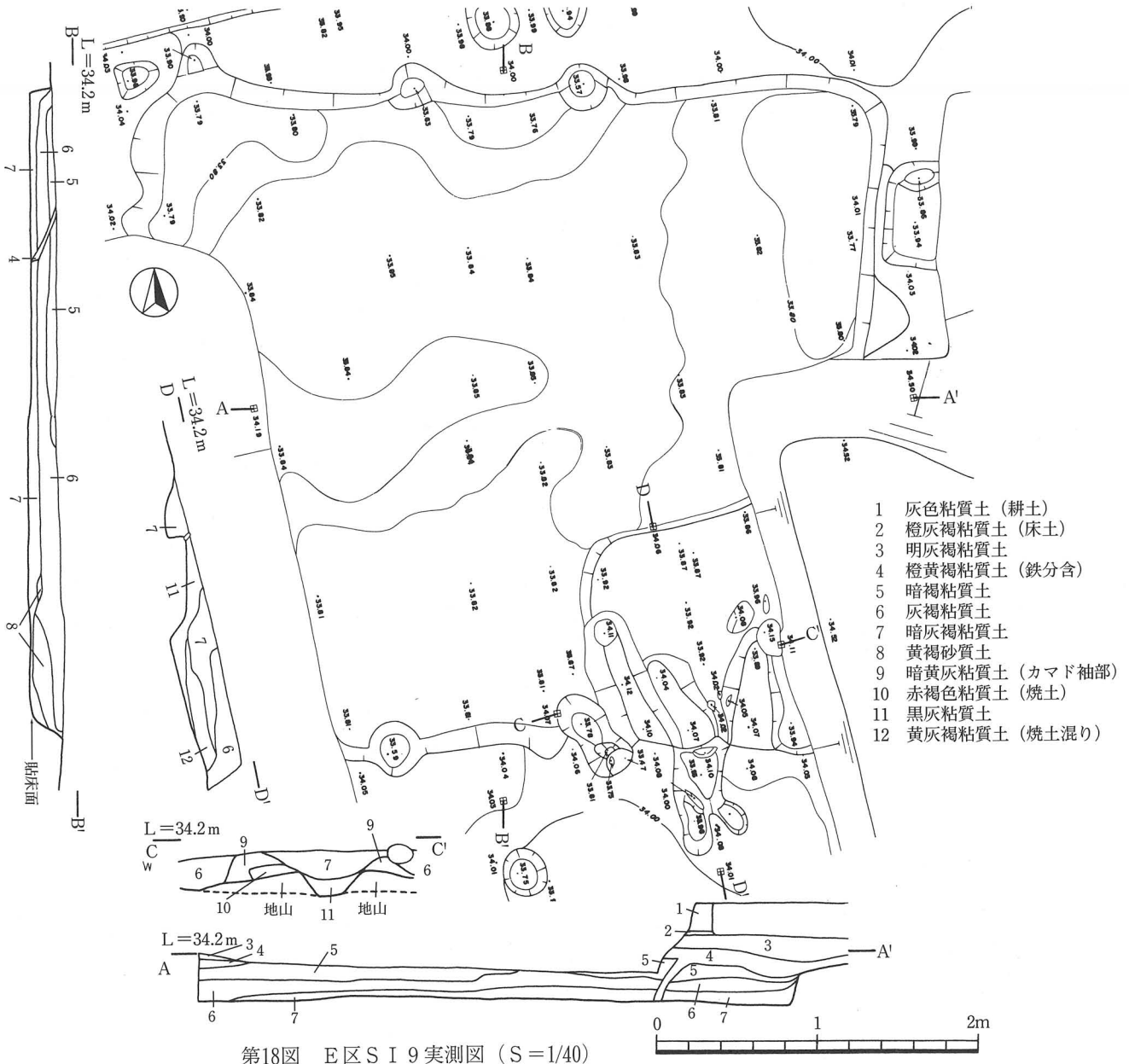
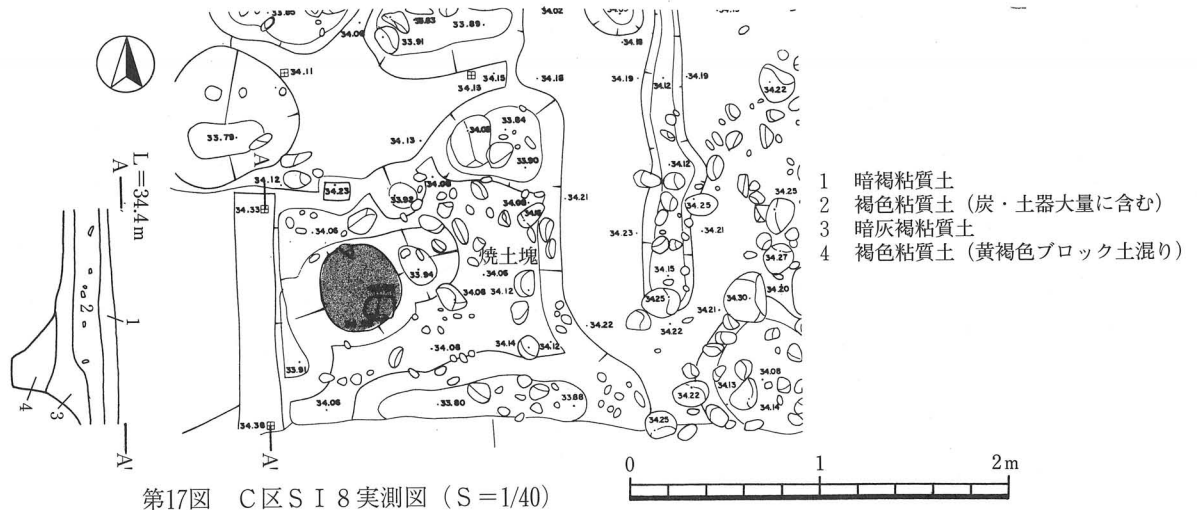
第15図 B-3区SI 5・SI 6実測図 (S=1/40)



第16図 B-3区SI 7実測図 (S=1/40)

- 1 暗褐粘質土
- 2 褐色粘質土
- 3 黄褐粘質土 (貼床)
- 4 炭混り褐色粘質土
- 5 茶褐粘質土
- 6 暗灰褐粘質土 (柱穴か)





東西両サイドは調査区から外れており全容を見ることはできない。床面まで15cmの深さを持ち、全面に黄褐色土の貼床が敷いてある。内部には柱穴は見られないが、北と南の壁際にはそれぞれピットが2基確認できる。これらの穴は直径30cm、深さ地山から40～60cmで、穴の底が竪穴中央に向いていることから、竪穴に対する柱穴と認められる。このような穴は東西面にも存在すると思われるが、調査区から外れているため確認できない。

南東隅にはカマドが存在する。東西1.1m、南北0.9mの大きさを持ち、周囲は厚みをもった貼床が張られている。両側には地山土を利用した黄褐色粘質土の袖部が竪穴内部に向かって開口する。袖部は西側が全長80cm、幅30cmで、東側は全長75cm、幅35cm、両者の袖部先端には拳大の自然石が置かれている。袖部の内側及び焚き口付近は赤褐色の焼土が広がる。遺物は長胴甕片を中心にこの辺りから集中して出土した。煙道は長さ60cm、幅30cmの溝状のものが南方にのび、先端は二方向に分かれる。覆土は黒色粘質土で、炭が大量に出土した。

他で確認したカマドよりも極めて残りがよく、竪穴廃絶時にそのまま放置されたと思われる。

第4節 掘立柱建物跡

SB1 (第19図)

B-1区南側の一部拡張したブロックの一角に位置する。建物は2間×3間以上の南北棟でN-5°-Wの方角をもつ。規模は東西5.5m、南北5.8m以上で、1間分の距離は桁行(南北)は0.8～1.3m、梁行(東西)は1.4mを測る。柱穴は0.6～1.0mを一辺にもつ方形プランで、とくに梁行の穴は一辺1m近くの大きな規模をもつ。深さは地山から35～55cmで、柱穴a、b、dの底には柱痕跡と思われる直径12～30cmの小穴が存在する。

SB2 (第20図)

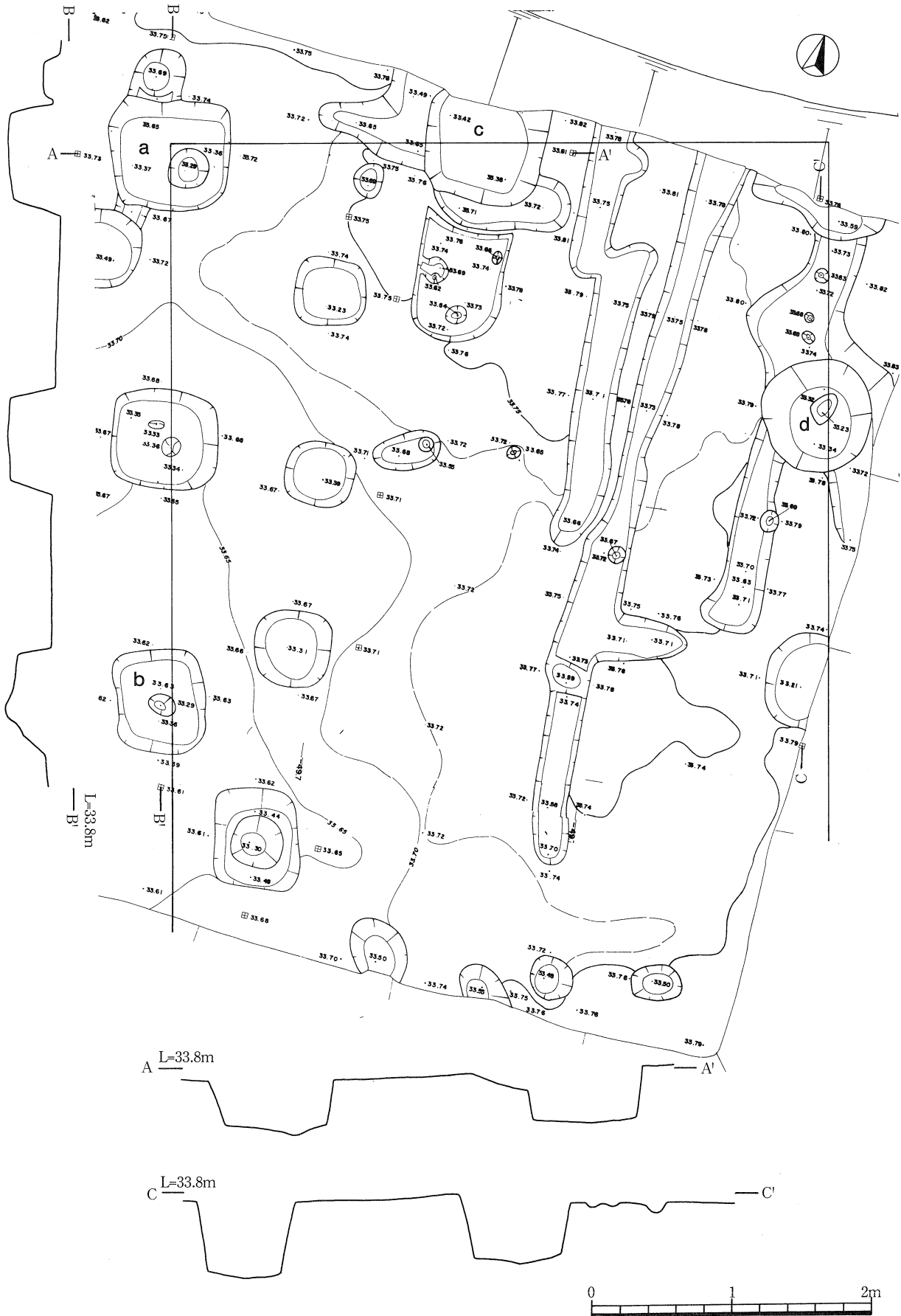
B-1区のSB1の中に接し、N-2°-Wの方向をもつ南北建物である。規模は東西4.1m、南北4.7mの正方形に近く、2間×3間の総柱構造である。桁行の柱間は0.4～1mで、真ん中の柱穴間の長さが短くなる。梁行の柱間は1.2m前後である。柱穴は隅丸方形、楕円形など様々で、直径40～90cmと大きさも大小存在するが、SB1と比較すると全体的に規模は小さい。深さは20cm～50cmで、側柱は40cm以上のものが目立つが、中央のものは20cm前後と浅目のものが多い。

SB3 (第21図)

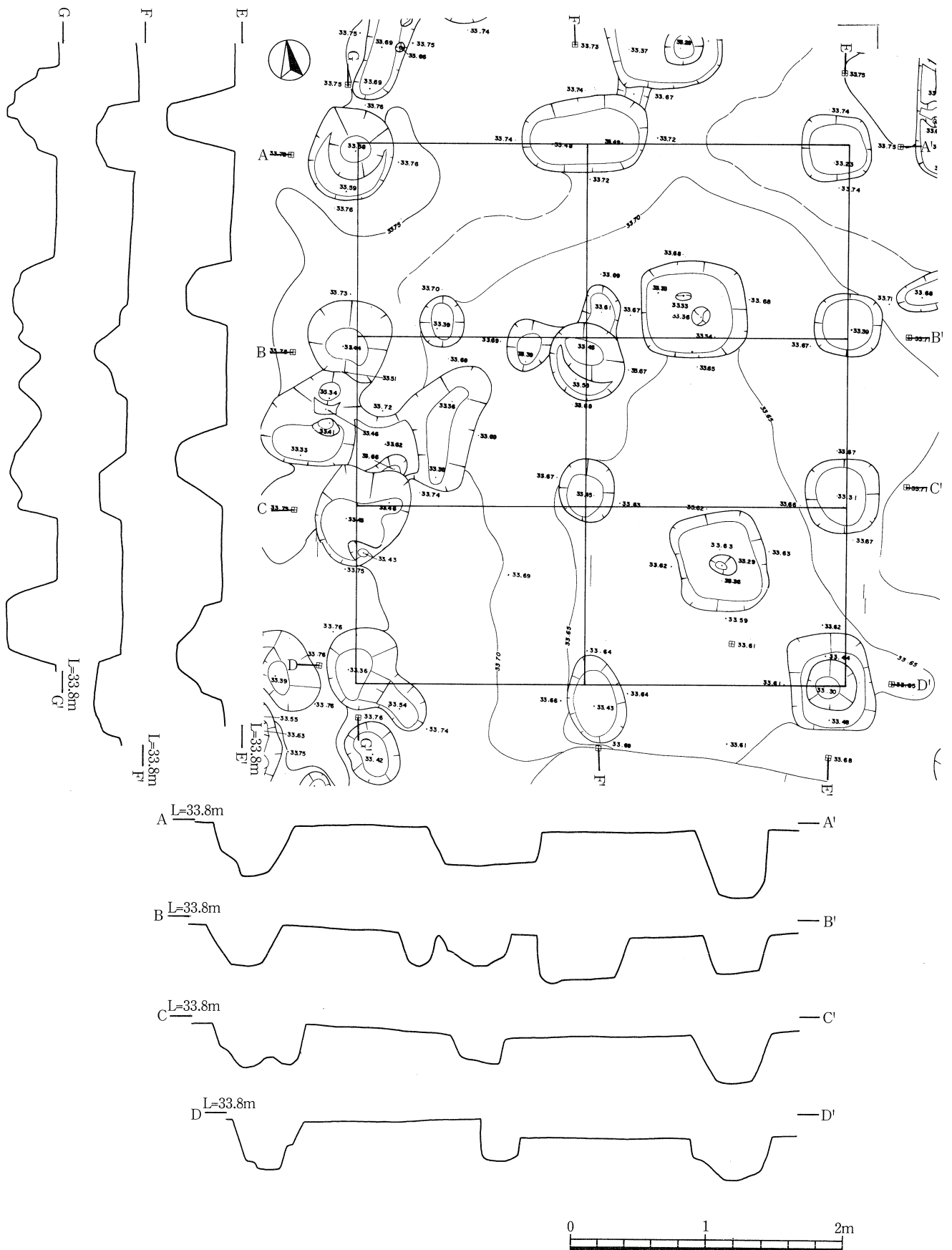
B-1区南端の東に飛び出た調査区に位置する。建物は東西2間以上、南北3間以上で、北方及び東方は調査区から外れるため規模等はわからないが、おそらく南北に長い建物になると考えられる。方角はN-4°-Eである。柱間は南北が1.5～2.0m、東西が2.0mを測る。柱穴は方形プランを基本とし、一辺60～70cm、深さ約40cmの掘方となる。

SB4 (第22図・第25図)

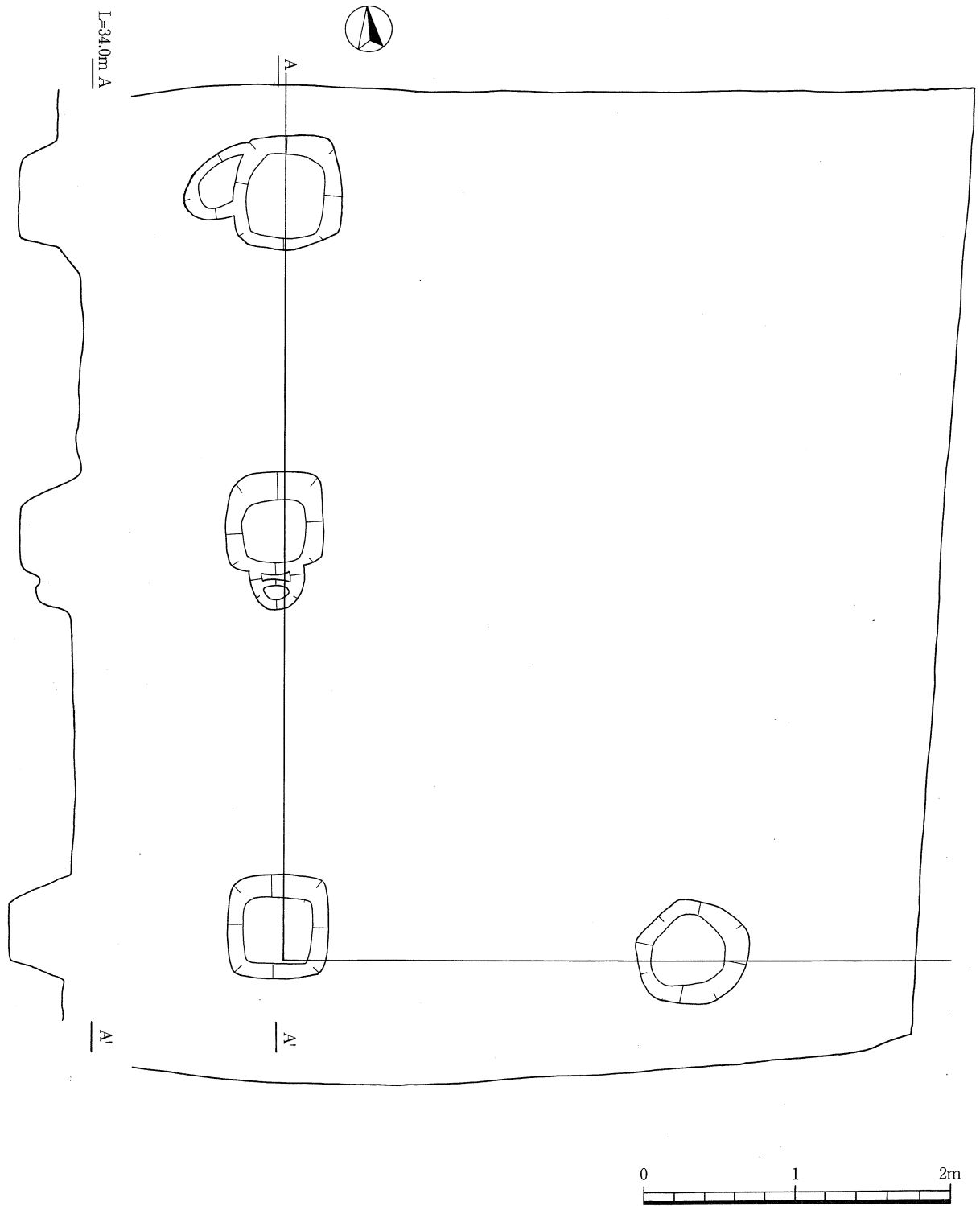
B-3区のほぼ中央に位置する。東西6.0m、南北7.0mの規模をもつ2間×3間の南北棟である。N-5°-Eの方角を向く。建物の東半分は1989年度県埋蔵文化財保存協会によって調査し報告済である。(県埋協1991 C区1号掘立柱建物) 柱間は桁行が1.0～1.3m、梁行が2m前後である。柱穴は直径0.7～1.0mの大きさを持ち、深さは40～55cmとやや深めに掘られている。周囲には小穴や溝が錯綜し



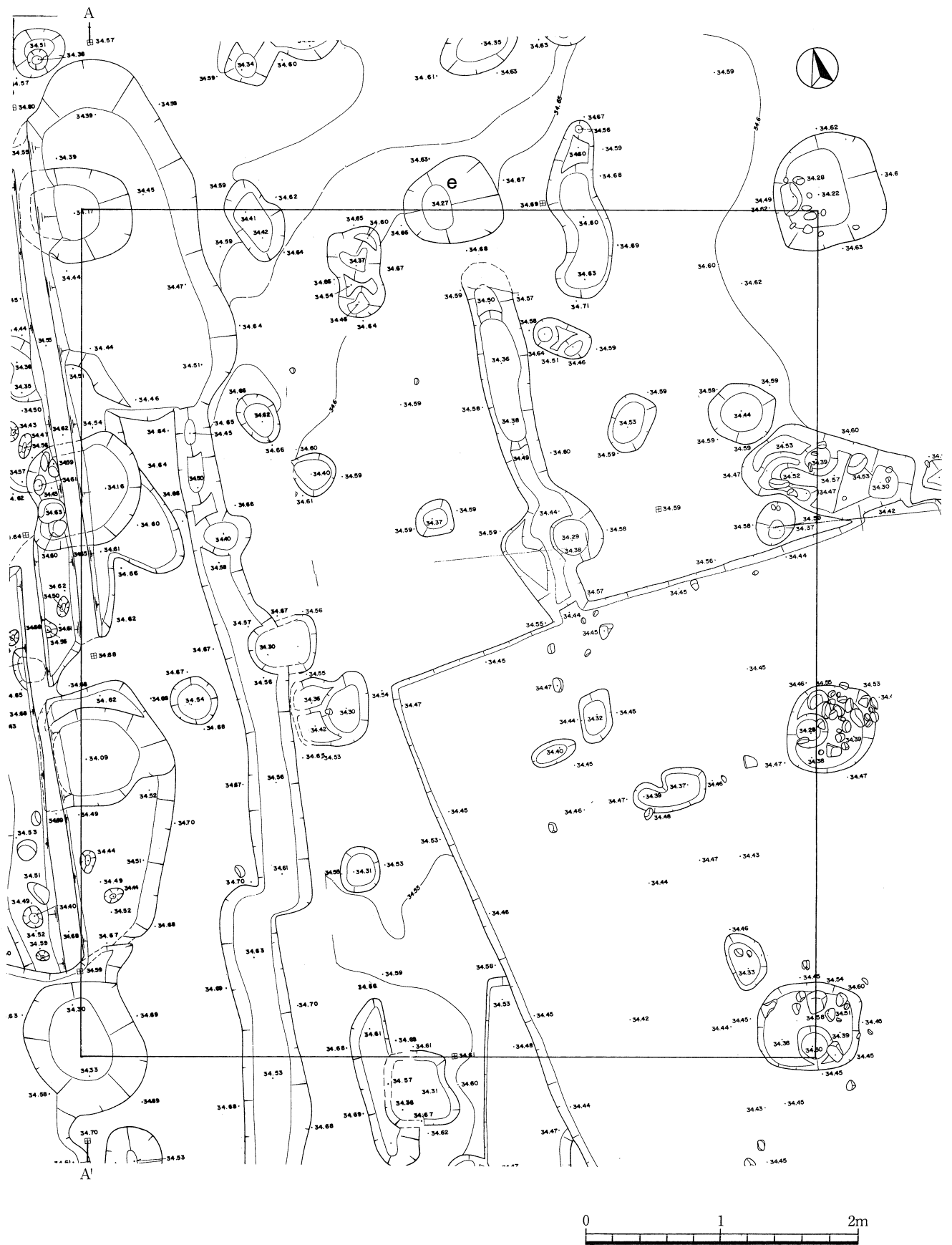
第19图 B-1区SB1实测图 (S=1/40)



第20图 B-1区SB2实测图 (S=1/40)



第21图 B-1区SB3实测图 (1/40)



第22図 B-3区SB4実測図 (S=1/40)

ており、土層断面からこれらの遺構より後に建てられたことがわかった。

S B 5 (第23図・第25図)

B-3区S B 4の南隣に建てられた建物である。規模は東西6.0m、南北8.6mで、2間×4間の南北棟である。方向はN-14°-Wである。建物の東半分はS B 4と同様1989年度の県埋蔵文化財保存協会によって調査・報告されている。(県埋協1991 C区2号掘立柱建物) 柱間は桁行が0.9~1.2m、梁行が1.2m前後を測る。柱穴は円形及びやや崩れた楕円形を呈しており、掘方は直径0.6~1.2m、深さ50~80cmと非常に大きい規模をもつ。

柱穴fの最深部からは43の土師器壺が出土した。

S B 6 (第24図・第25図)

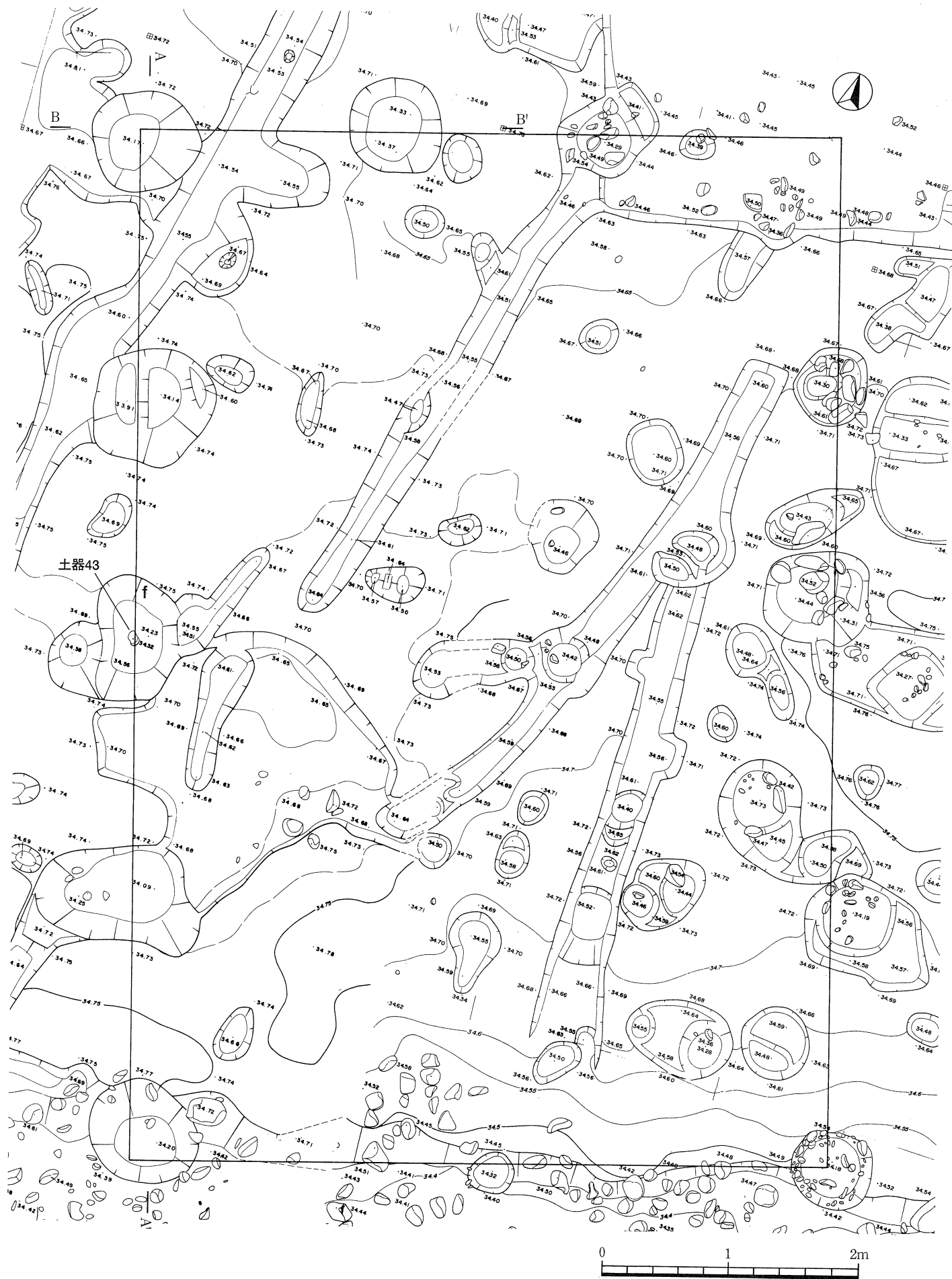
B-3区S B 4から南へ約10m進んだところにある建物である。東西4.6m以上、南北9.1m以上の規模をもつ南北棟で、N-9°-Wの方向へ向く。北側と西側が調査区外となるため桁行4間以上、梁行2間以上の構造しかわからない。桁行の柱間は1.0~1.4m、梁行は1.7mを測る。柱穴は方形、歪な楕円形と様々で、S I 7や後述するS B 7と切り合っている。切り合い関係からS I 7が廃絶してS B 6がつくられ、S B 6の後にS B 7が建てられていることがわかった。掘方は直径0.6~1.2m、深さ50~70cmと周りの建物柱穴よりひとまわり規模が大きい。

S B 7 (第26図)

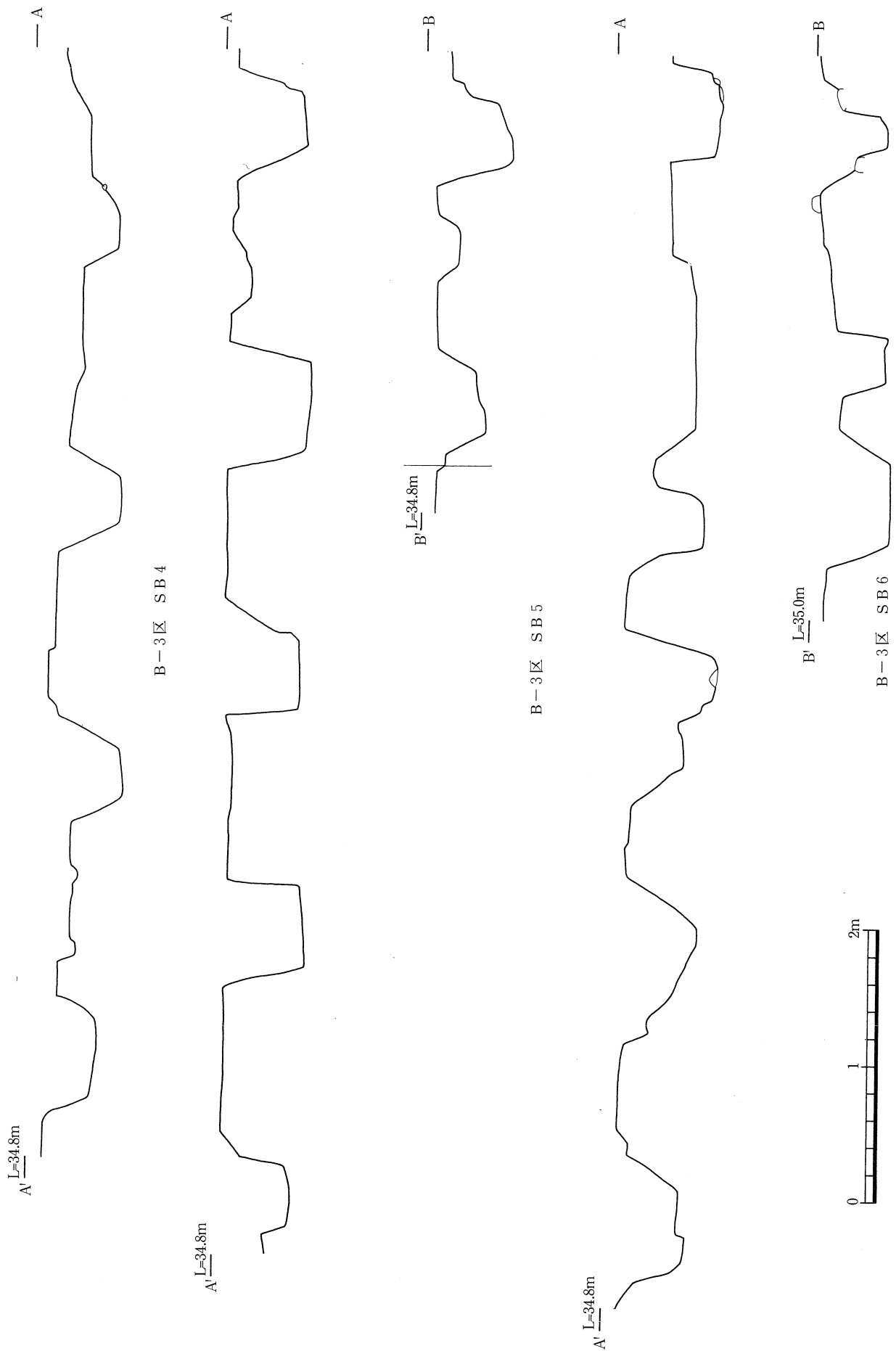
B-3区S B 6と接する南北建物である。方向はN-4°-Eである。北側と西側は調査区外となり、東西3.3m、南北10.6mまでの規模しかわからない。桁行6間、梁行2間まで確認でき、両方向とも柱穴はさらにのびると思われる。桁行の柱間は0.7~1.0m、梁行の柱間は2.1mを測る。柱穴の掘方は歪な円形が多く直径50~80cm、深さは40~50cmが主体となるが、一部70cm近く掘り下げた深い穴も存在する。

S B 8 (第27図)

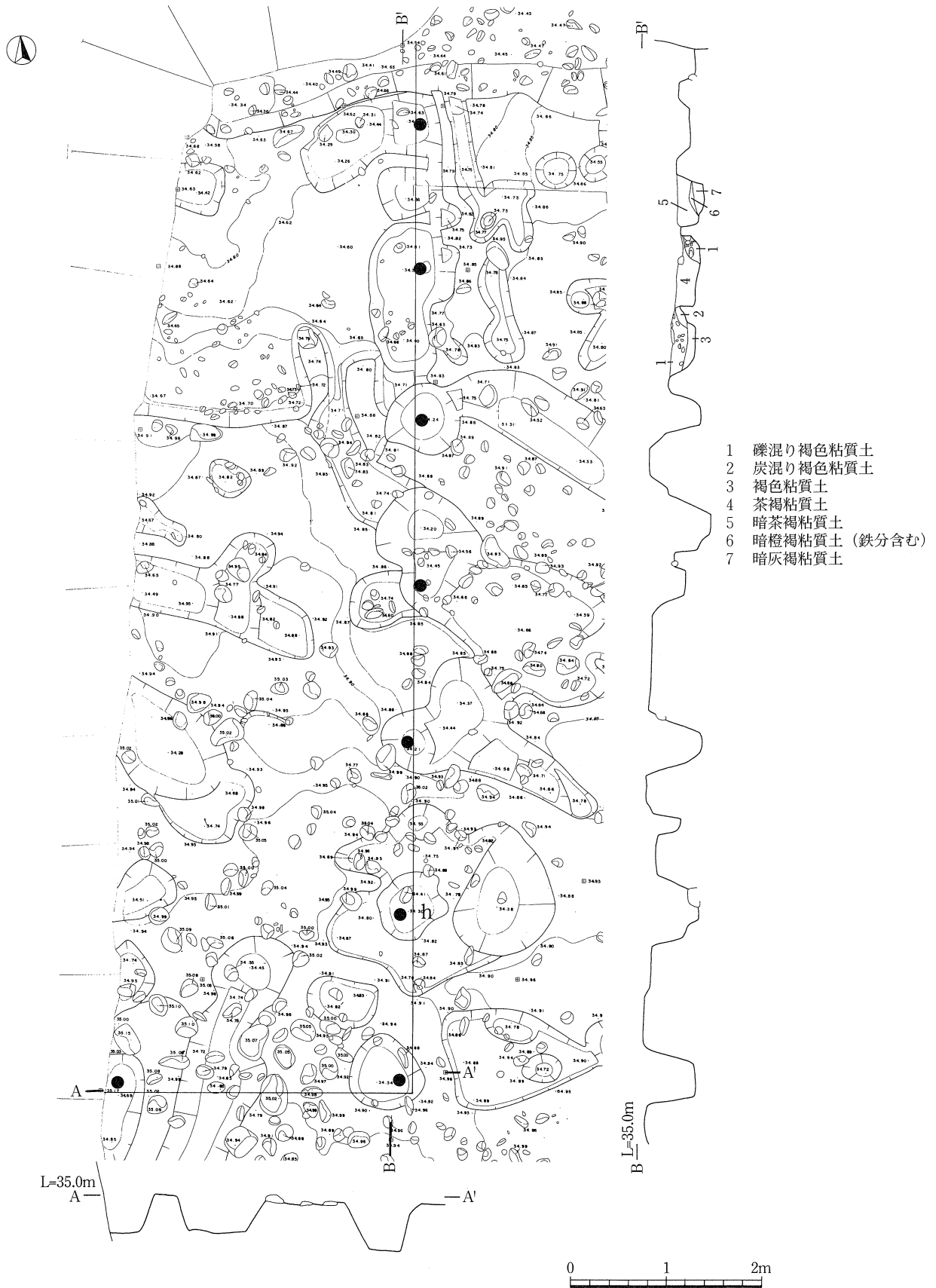
C区西寄りに位置する南北建物である。プランは桁行5間、梁行2間で、方角はN-5°-Wを向く。東西5.6m、南北8.2mの規模をもち、北東隅の一部は調査区から外れてしまい北東端の柱穴は確認できない。柱間は桁行が1.0~1.2m、梁間が2.0m前後である。柱穴は平均直径約40cm、平均深さ35cmとこれまで報告してきた建物柱穴に比べてやや小さい印象をもつ。建物の周りには同じ大きさをもった穴が錯綜しており、別の建物が存在するかもしれない。



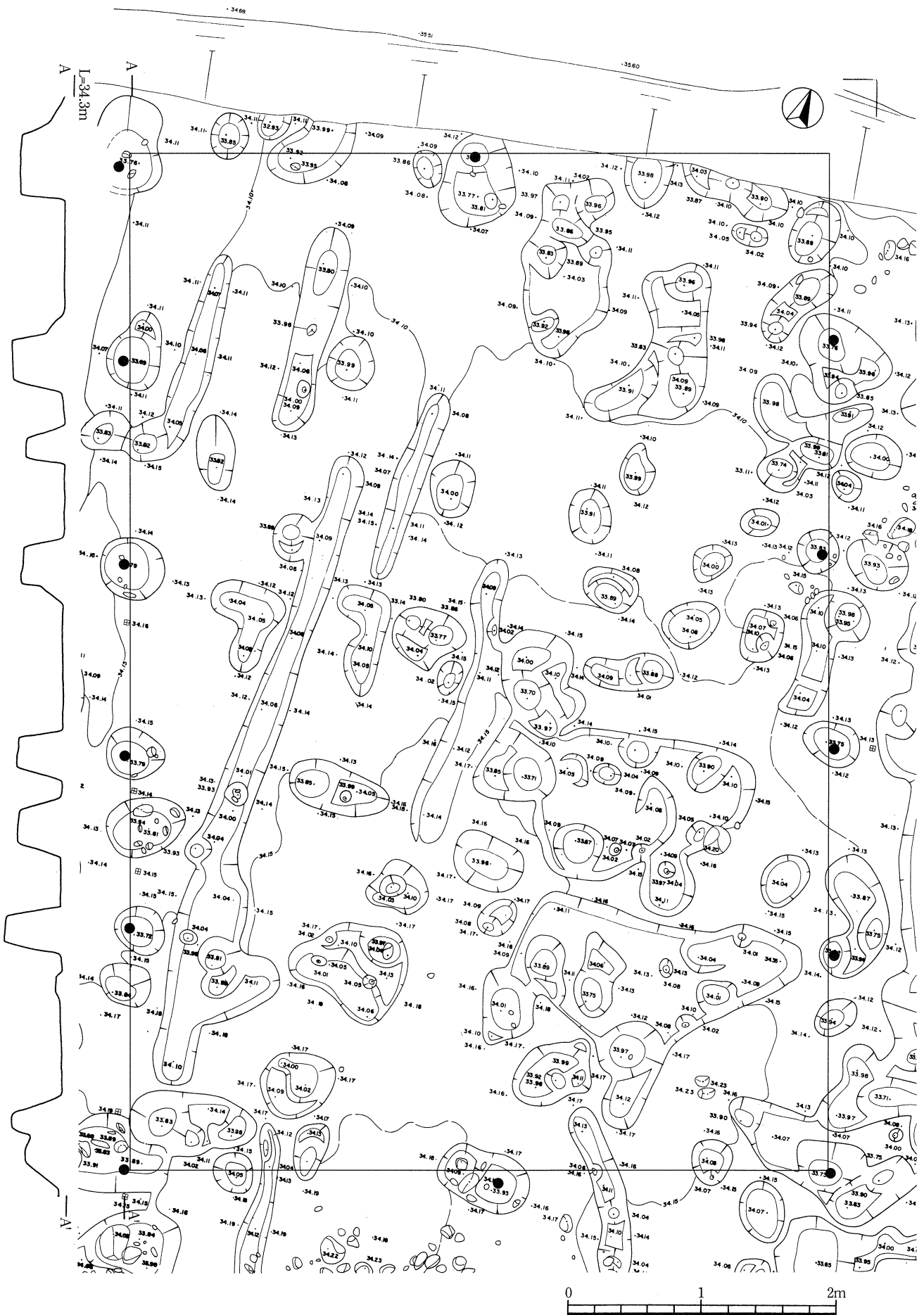
第23图 B-3区SB5实测图 (S=1/40)



第25図 B-3区SB4、SB5、SB6エレベーション (S=1/40)



第26図 B-3区SB7実測図 (S=1/60)



第27图 C区SB 8实测图 (S=1/40)

第5節 土坑・ピット

本節では主要な土坑・ピットを抽出して報告する。なお、掘立柱建物の柱穴については第4節で紹介しているので本節では取り上げない。

SK 2 (第28図)

B-3区のSB 4北西端に位置し、SB 4の柱穴を囲い込んでいる。南北に細長い楕円形プランで、規模は長軸2.7m、短軸1.3m、深さ約10cmである。西側にはいびつな方形の土坑が接しており、切り合い関係をもつが、前後関係はわからない。

SK 3 (第29図)

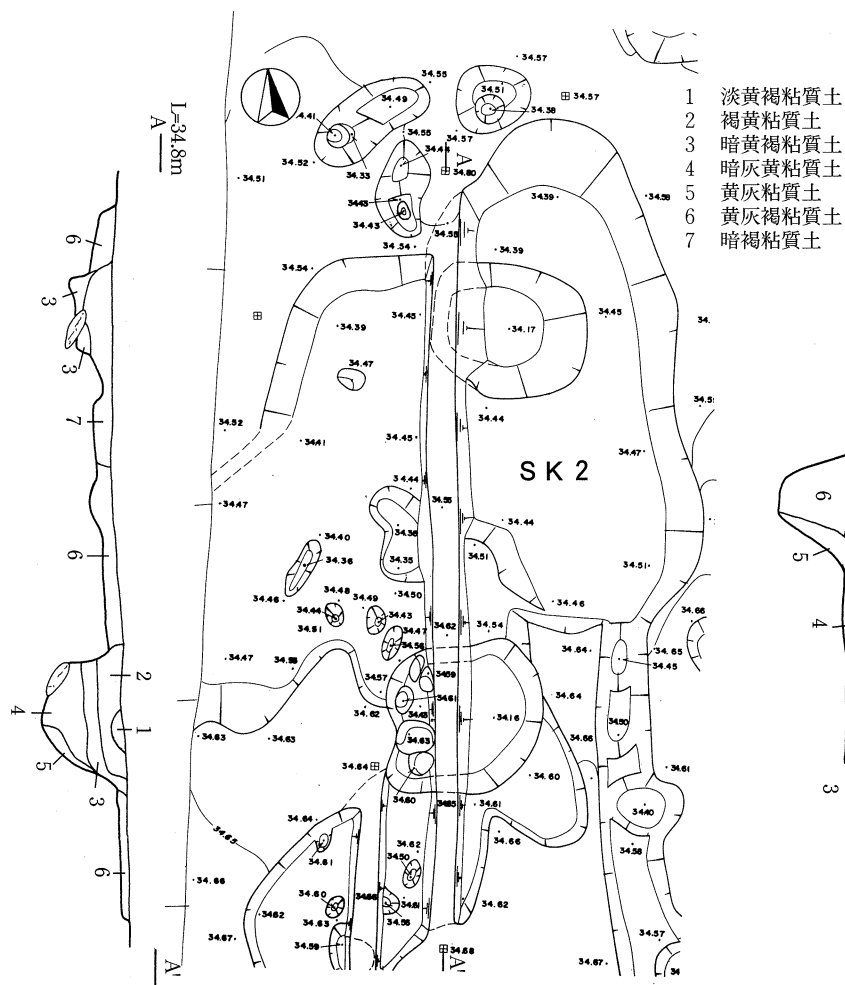
B-3区SK 2の南隣にある土坑で、SB 4の柱穴と切り合う。南北に長い楕円形で、北側にSB 4の柱穴が存在する。土層断面からSK 3の後にSB 4を建てたことがわかった。規模は長軸2.2m、短軸1.2m、10～15cmの深さをもち、内部には直径10～15cmの小ピットが4基存在する。

SK 4 (第30図)

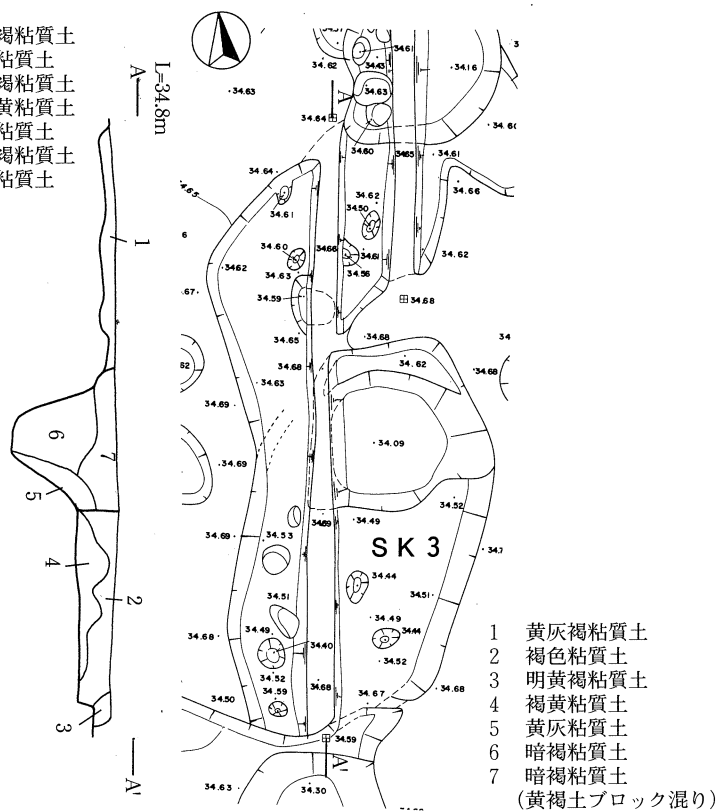
B-3区SB 5の内部に位置する。本来正方形の形をしていたと思われるが、別の穴が切り合い不定形な形に見える。規模は一辺1.7m、深さ5cmで、内部に長軸1.3m、短軸20cm、深さ5cmの細長い穴が存在する。西端で一部SB 5の柱穴と切り合うが、前後関係はわからない。

P 3 (第31図)

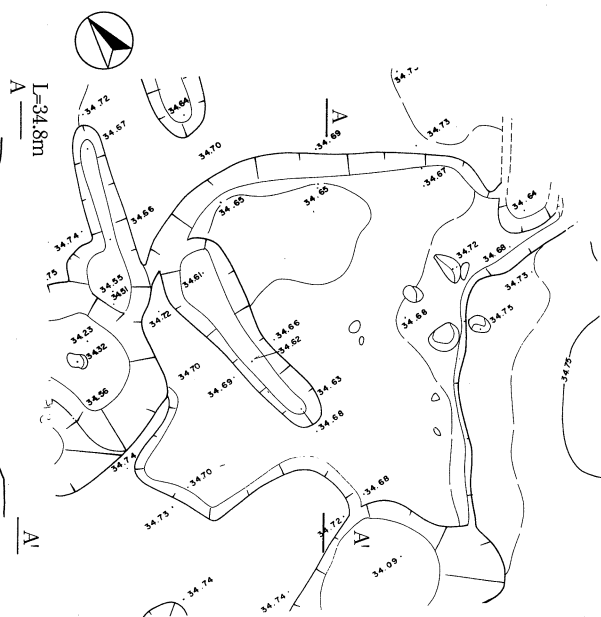
A区のグリッドC-7北方に位置する。長軸68cm、短軸48cmの楕円形をしている。深さは地山面から21cmを測る。底から第58図106の木札が出土した。木札は墨書のある面を表にして置いたような状態で見つかった。覆土は灰色粘質土の単層で、現在の水田層の土と同じことから時期は近代以降と思われる。



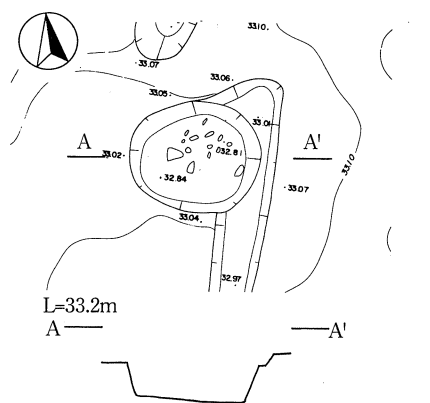
第28図 B-3区SK 2実測図 (1/40)



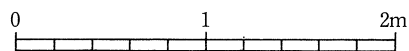
第29図 B-3区SK 3実測図 (1/40)



第30図 B-3区SK 4実測図 (1/40)



第31図 A区P 1実測図 (1/40)



第6節 溝

SD1 (付図 遺構全体図)

A区のグリッドD-7、E-7をまたいで南北に走る溝で、全長10.5m、幅50~75cm、深さ5~10cm測る。埋土から拳大の自然石や須恵器が出土している。方向はN-2°-Eで真北にちかい。

SD2 (付図 遺構全体図)

SD1から5m東に移動したところにある南北溝である。全長7m、幅25~90cm、深さ15~30cmで、ピットや別の溝と複合している可能性がある、方向はSD1と同じである。第36図の須恵器55~60が出土している。

SD3 (第32図)

A区東側のグリッドA-4からF-4の間を南北に走る溝で、緩やかに蛇行している。溝はA区から南方上流を進むとB-2区のほぼ中央で確認でき、1989年度調査で検出した溝(県埋協1991 SD80)にぶつかる。南北に走る1989年度調査のSD80は、途中西に移動しB-3区SD3とつながる。B-3区のSD3は東西ラインで、SI7を切るようにして調査区から離れる。B-3区で確認したSD3は両岸に人頭大の自然石を利用した護岸が2~3段積まれている。

溝幅は1.1~2.0m、深さは調査区壁面からの観察で約80cmを測る。しかし、調査遺構面からは最下部20~30cmまでしか検出できなかった。覆土は底の方では灰褐砂土や橙褐礫土など砂礫土が混じりながら堆積しており水が断続的に流れていたようである。上層には耕土と思われる粘質土が深く堆積しており、短期間のなか意図的に埋めた形跡をもっている。

出土遺物は最下層の砂礫土から大量の古代土器から中・近世陶磁器、ガラス片、骨などが出土した。陶磁器は中世のものも含むが、近世が圧倒的に多く、近代と思われるものも定量見つかっている。

土層断面からこの溝は耕地整理前の水田面から掘り込んでいることを確認した。遺跡のある富奥地区では耕地整理事業は明治40年に上林村から始まり、当地に比定される粟田新保村では明治44年から大正4年にかけて実施された。⁴⁾ 遺物や土層断面などから、この溝は耕地整理前の明治末期まで機能していた水田用水と推定される。

なお、骨はA区から約100点近く見つかっている。骨は人骨と思われ、全て焼いた痕跡がある。ひび割れや細片のものがほとんどのためこれらがどこの部位にあたるかはわからない。骨は火葬したものと思われ、骨拾い後に必要としなくなった骨を意図的に捨てたのであろうか。いずれにせよ、近世から近代にかけての葬送儀礼を考えるうえで興味深い事例である。

畝溝 (付図 遺構全体図)

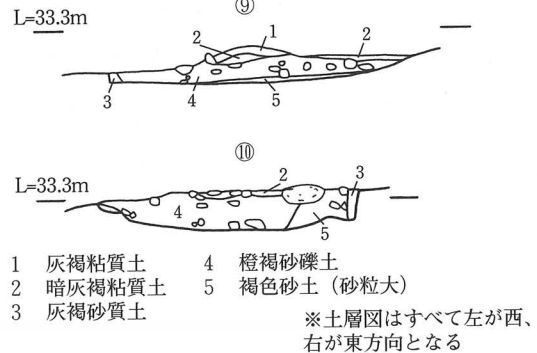
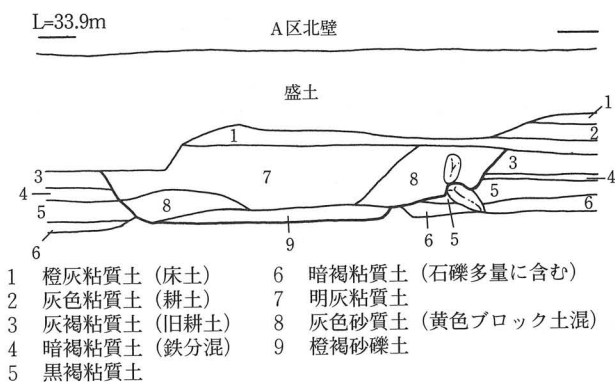
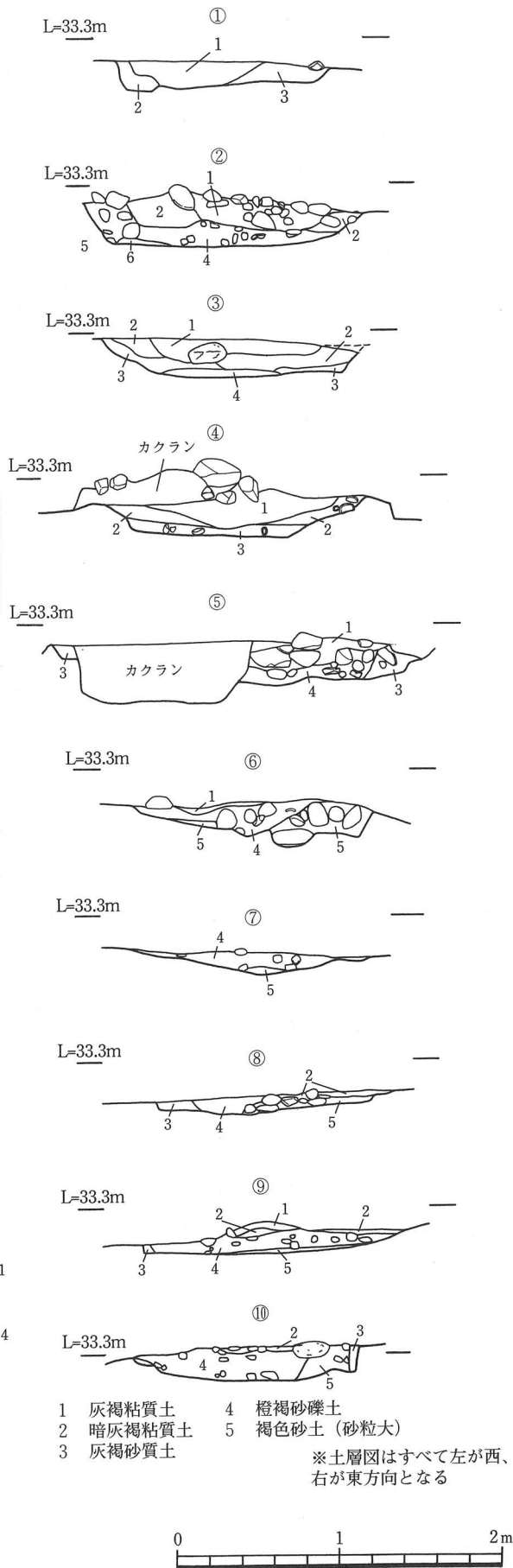
各調査区で検出した畝溝については方向や長さ、範囲などを中心に概要を説明していきたい。

畝溝①

A区グリッドD-7、E-7にあり、前述したSD1やSD2を含んだ溝群である。方向は真北にちかいN-2°-Eで、東西8m、南北12mの広さをもつ。西側調査区外に広がる可能性がある。



A区SD3平面図 (S=1/400)



第32図 A区SD3土層断面実測図 (S=1/40)

畝溝②

A区グリッドD-4、E-4で確認した溝群である。溝は8条検出し、長さ2～4m、幅30cm、深さ10cm前後で、N-62°-Wを向いている。溝と溝の間は約1mである。溝の長さは短く、地形の制約をうけている状態が伺える。

畝溝③

A区グリッドA-3、A-4に存在する。溝は最長で約8m、幅約30cm、深さは5～9cmで10条確認できる。方向はN-12°-Eで、溝間は50～80cmを測る。溝群は東西13m、南北8mの範囲に密集し、中央には溝を区画するかのようピット群が南北に連なって混在している。

畝溝④

B-2区の東よりに所在する。最長10m以上で、すぐ南側は1989年度県埋蔵文化財保存協会の調査区となるが、そこでは確認されていない。北側は調査区外にのびる。方向はN-8°-Eで、調査区北方を延長すると畝溝③にぶつかり同群になるかもしれない。溝は16条検出し、幅25～40cm、深さ4～7cmを測る。溝と溝の間は50cm～2mと均等にはならず、時期的に畑地の作りかえが行われたかもしれない。

畝溝⑤

B-1区のSB3付近にある溝群である。最長10m、幅50cm前後、深さ5～8cmを測り、確認した溝は17条で、西側に集中する溝はほぼ真北、東側に集中する溝はN-18°-Eを向く。真北を向く溝は調査区内で途切れるが、18°傾いている溝は南方の1989年度県埋蔵文化財保存協会の調査区にのびている。畝溝⑤の南に位置する県埋文協会の調査区からは同じ方向の畝溝が確認されており、畝溝の範囲は東西12m以上、南北24m以上と広大な規模もっている。

畝溝⑥

E区SI9を挟んだ北と南側それぞれに存在する。SI9より北側で確認した溝群は南北ラインで、N-14°-Wである。溝は10条検出し、最長のもので6.5m、幅20～30cm、深さ5cm前後、溝と溝の間は1.2mを測る。

一方、SI9より南側は東西ラインとなり、N-80°-Eの傾きをもつ。溝数は6条、溝と溝の間は1.5～1.8mである。溝の幅は30cm前後で深さは5～6cmを測る。

SI9と北側及び南側の溝との軸はやや合わない傾向にあるが、北側と南側の溝はほぼ90°にちかい角度を有し、竪穴を中心として周囲に耕作地を設ける構成であったことが推察される。

第5章 遺物

第1節 土器・陶磁器

1～39は竪穴住居跡から出土した。1は小型甕である。外面の体部下半から底部は被熱により調整はよくわからない。3は製塩土器の底部である。4は堦で剥離が目立つ。5の坏は転用硯であったようである。内面底部の一部には墨痕が見え、使用痕で滑らかになっている。13はカマド内でみかした甕体部でカマドの構築材に使用されたものと思われる。14は有台坏でS I 5の覆土から真二つに割れた状態で見つかった。意図的に割った可能性がある。15の坏の外底面には1本の線刻が入ったヘラ記号が入っている。19の甕の体部は被熱で一部剥離している箇所があり、ススが全体的に付着している。20の甕底部も被熱による剥離が著しい。22は製塩土器の口縁部である。28は小型甕の口縁部で、全般に被熱を受けている。内面口縁部に炭化物が付着する。30と31は底部で、30は回転糸切り、31は静止糸切りである。32は内面黒色の椀で、高台は外れている。33は台付き椀で、内面底部の表面が剥落している。36の甕は丁寧につくられ、外面頸部から体部にかけて一部ススが付いている。39は堦で、外面の全体にススが付着し、被熱のためか所々もろくなっている。

40～45は掘立柱建物跡柱穴内から見つかったのものである。42の坏は外底面に1本の直線上のヘラ記号が存在する。43は土師質の壺で、体部には一部ススが見える。44は剥離が目立つ底部である。

46～50は土坑、51～54はピットから見つかった土器である。小片が多く実測できるものは少量であった。

55～101は溝から出土したものである。55と59は外底面に墨書がある。いずれも墨痕が薄く読みづらい。55は「三〇」、59は「山」という字に見える。76は長胴甕の体部で、外面下部にはススが付着している。

S D 3の出土遺物は近世陶磁器を中心に須恵器など古代の土器や近代のガラスや人骨などが混在して見つかっている。出土地点は砂礫土内からが多く、ほとんどが上流から流れてきたものと思われる。遺物は水流によって摩耗しており、遺存状態はあまり良くない。

67は坏の底部である。体部は意図的に取り除いたような形状をし、硯に転用した可能性がある。70は67と同様体部を人為的に打ち欠いており、内面底部が平滑することから転用硯と考えられる。75は近世以降の壺片である。77は17世紀前半の唐津の皿で、内面底部には砂目が存在する。体部は意図的に割った形跡があり、円盤状にしている。78も唐津で焼かれた17世紀前半の胎土目皿である。79は肥前灰釉陶器碗で、17世紀前半のものである。80は肥前京焼風の陶器碗である。外面底部には印刻が施されている。81は唐津のハケ目碗で18世紀前半の所産である。82は肥前陶胎染付碗底部で、18世紀中頃のものである。83は19世紀代の土瓶と思われる底部である。内面に暗褐色の釉薬がかかっている。84は近世後半の銅緑釉の鉢である。85は15世紀後半～16世紀前半の瀬戸灰釉皿底部で、内面には印花文が捺されている。86はミニチュア土製品の蓋である。87は17世紀後半～末にかけての肥前色絵磁器である。図示していないが、草花文の名残が外面体部に見え、柿右衛門様式の系譜にあたる。88は17世紀末の肥前、89は19世紀半ばの瀬戸美濃の染付碗である。90は碗底部、91は瀬戸もしくは九谷の湯飲み碗で、いずれも近代まで下る可能性がある。92は肥前白磁の紅皿である。釉薬が内面の全体から外面の口縁部にかけてかかっている。93は肥前染付の仏飯器の台である。時期は不詳。94は肥前、95は草花文の色絵が入った蓋である。赤褐色を基本とした草花文が描かれている。96は18世紀末の肥前

磁器で仏飯器にあたる。97は肥前波佐見で焼かれた染付皿で、外面には細い線で描いた文様が見られる。98も肥前波佐見の染付皿で、17世紀末～18世紀前半の所産である。内面底部には蛇の目釉はぎが見られる。99は近代の角鉢で、底部に花をあしらった文様がある。体部には底部と同じ文様の入ったスタンプが捺されている。100は壺で、外面頸部に刺突状の刻みが入る。

102～144は包含層、表土からの土器・陶磁器である。102～105は布留甕である。106は口縁が内湾したくの字甕で、外面に一部剥離が見られる。109は坏底部で意図的に体部を割ったと思われ、転用硯の可能性をもつ。112も坏で被熱を受けており灰黄褐色に変色している。114は墨書土器である。外底面に書かれており判読はできない。117は内外面赤彩があり、外面底部には黒斑が見える。119は瓶の頸部で外面にはヘラによる線刻が施されている。122は67や70と同様体部を打ち欠き、内面底部が平滑なことから転用硯と考えられる。123の坏は胎土が甘く、剥離が目立つ。137は甕と思われる底部で、外底面には回転糸切り痕が見られる。139は内外面に赤彩の入った塊で、内面底部にモミ圧痕が見られる。140は15世紀後半～16世紀前半の瓦質の火鉢口縁部で、外面には巴文が連なっている。141は17世紀前半の唐津碗、142は17世紀後半～18世紀前半の肥前銅緑釉の皿、143は19世紀の灰釉鉄絵碗である。144は19世紀代の土瓶か壺の底部で、内外面に釉薬がかかっている。外底面にはススが付着している。

第2節 石製品

母岩

母岩は重機掘削時や排土中からの検出を含めて34点確認した。検出した場所はA区の石礫原に集中し全体の70パーセントを占める。このA区内でも石礫原から外れた鞍部（石礫原1の西側・グリッドE-6 F-7、石礫原2の東側・グリッドC-7 C-8）に集中し、85パーセントの割合をもつ。

母岩の重量は未測定のものもあるが、1,620 g～15,700 gの間で、平均約6,500 gとなる。大人が両手で持ち上げるには十分な重さである。但し、例外として第43図12の58,500 gや第47図28の28,500 gといったトドのような巨大な石を使用することもある。

技法としては1989年度県埋蔵文化財保存協会が調査した際、岡本恭一氏による詳細な報告があるので、本稿もこれに準拠する。⁽²⁾（県埋協 1991）岡本氏による技法は第一から第三までである。第一技法は選択した礫の縁辺の全周もしくは半周近くに何回も打撃を加えて剥離する方法である。剥離の際、石の目を利用したものが多く、リングやフィッシャーを見ることは非常に難しい。第二の技法は礫の側縁に対して平行方向に加撃する方法、第三の技法は礫の側縁に対して垂直方向に加撃する方法である。（第59図）

母岩のほとんどは多方向からの打撃痕がみられ、あたかも全てが第一技法のように思えてしまうが、打撃痕の中には一撃してリングやフィッシャーが残る母岩が存在する。これらは第二、第三技法によるものとして捉えた。なお、第二技法と第三技法については各技法の細かい特徴を見いだすことができなかつたため、個別の分類は行っていない。

第一技法は第44図の17、第46図27、第47図30・31、第48図33があてはまる。残りのほとんどは第二、第三技法である。

また、第47図28のように打撃を行っても素材を得ることができず放棄したものも存在する。

剥片

剥片は母岩が打撃によって砕かれた破片を指す。この作り出された剥片が石器の素材となり、二次加工を経て製品化する。本調査で確認できる剥片は様々な打撃法で取り出されるもので、規則性は無

く失敗することも多々あったようである。そのため、剥片も大小様々なものが存在する。

第48図35～第49図47は剥片の中でも15～30cmの大きめなもの、第50図48～第55図85は約5～15cmの小さめものを抽出した。

大きめの石は自身そのまま石器の素材となったり、この石を更に加撃して求める大きさに分割したものと考えられる。小さめなものは二次加工の少ない石器の素材品となるものか、打撃したとき失敗して剥がれた小片のどちらかである。出土地点については大小の大きさに関係なくA区の石礫原1と2の間を走る鞍部に多く見つかっており、母岩の出土地点と大きく関係するようである。

岡本氏の報告によれば、第二、第三の技法で剥がれた剥片は加撃の力が均等に伝わり蛤状やツルハシ状になりやすいそうである。このタイプの剥片は二次加工前に形が決まってしまう難点があるが、ほとんど加工しなくても刀部ができあがっており製品化しやすい利点をもつ。蛤状のものは第50図49・50・51、第51図57～63、第52図66～70、第54図77、第55図81・83・84で、うち50・51・58・62・63・70などは5cm前後の長さしかなく、加撃を施すとき失敗してできた小片と思われる。ツルハシ状は第48図37、第49図39、40で、あまり多く見られない。

また、母岩23と剥片43は同一個体で接合することが判明した。

打製石斧

第56図、第57図86～95までの10点のうち88は未製品にあたるかもしれない。完形品は86、89、92、93、95である。大きさは89、93、95にあたる17～18cmの大型、86、87、92にあたる12～13cmの小型に分かれる。形状については87が撥型で、残る86、89、91、92、93、94、95が分銅型と圧倒的に分銅型が比重を占める。

刀部の形態については山本直人氏の分類を当てはめると⁽³⁾、86はA d類、87はB c類、89はA a類、92はB d類、93はA d類、95はB a類と偏りはほとんど見られない。打製石斧の機能は一般的に土掘り具とされているが、これだけタイプにばらつきがあるのは様々な作業内容によって使い分けされていたからかもしれない。

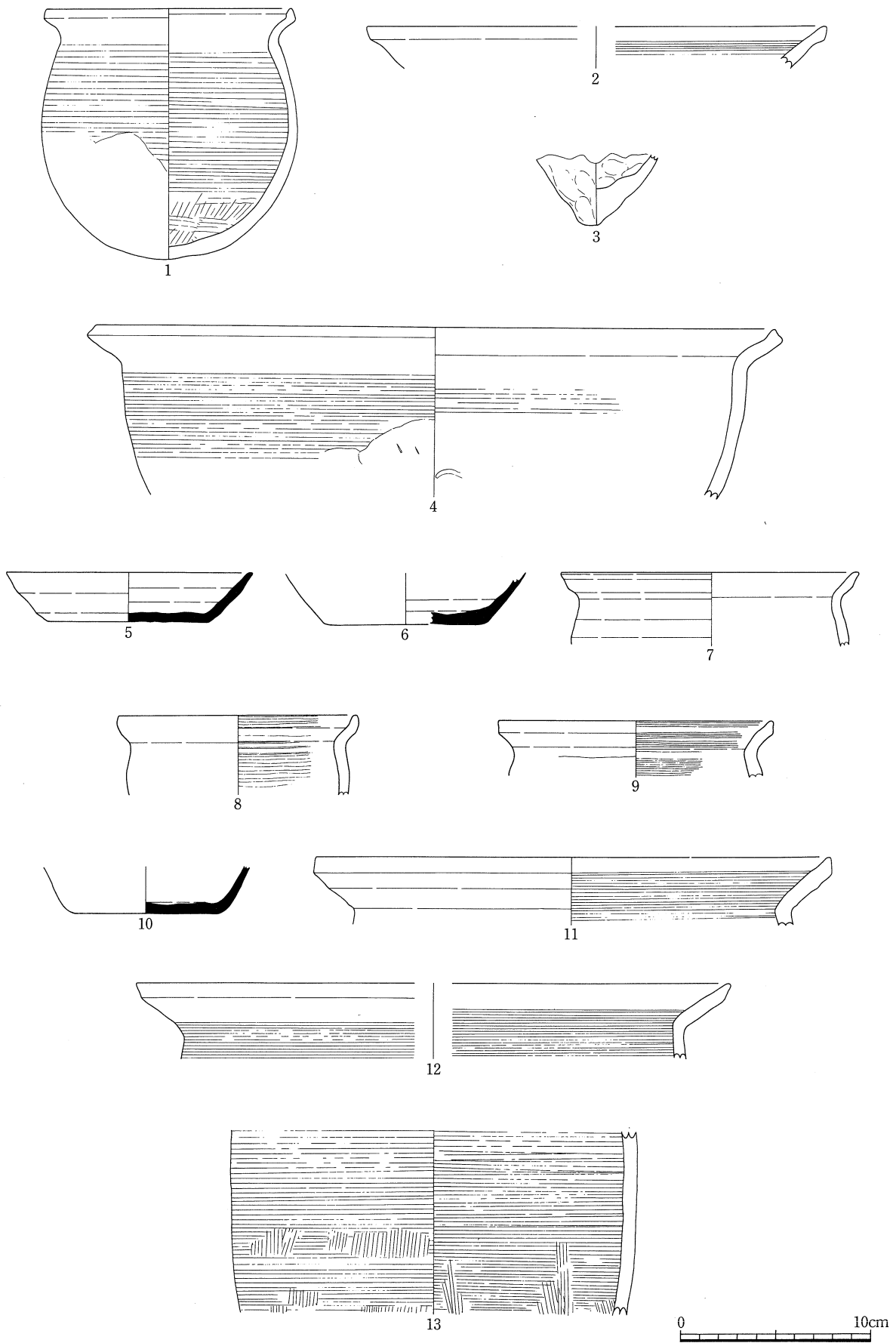
カマド石等

古代の竪穴住居跡に設置しているカマドの袖に備え付けてある石である。3基の竪穴から4点出土した。いずれも近くの川原石を使用しており、ほとんどのものは被熱を受け一部赤褐色に変色している。99は上部と下部が面取りされ、砥石状に磨いている。100は石の縁辺部に叩打痕を残しており、人為的な手が加わっている。101は人の手が加わっていないようである。102は剥離された箇所があり、母岩の可能性もある。103はB-3区S B 7の柱穴h最深部から発見された石で、面のあるところが底になるよう置いた状態で見つかったことから、柱を据える礎石のような土台石と考えられる。大きな剥離が見えることから母岩を利用したかもしれない。

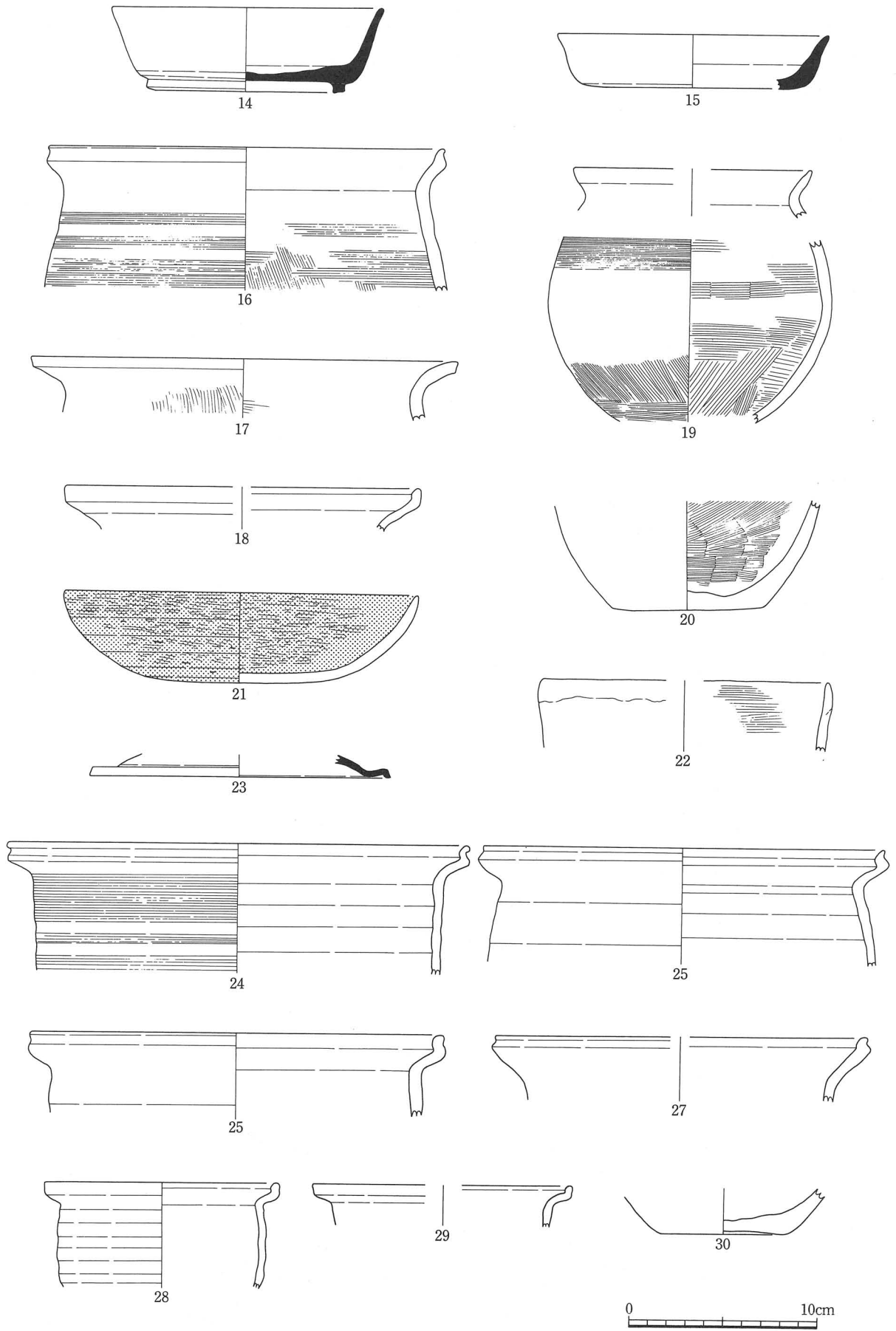
第3節 木製品

木札

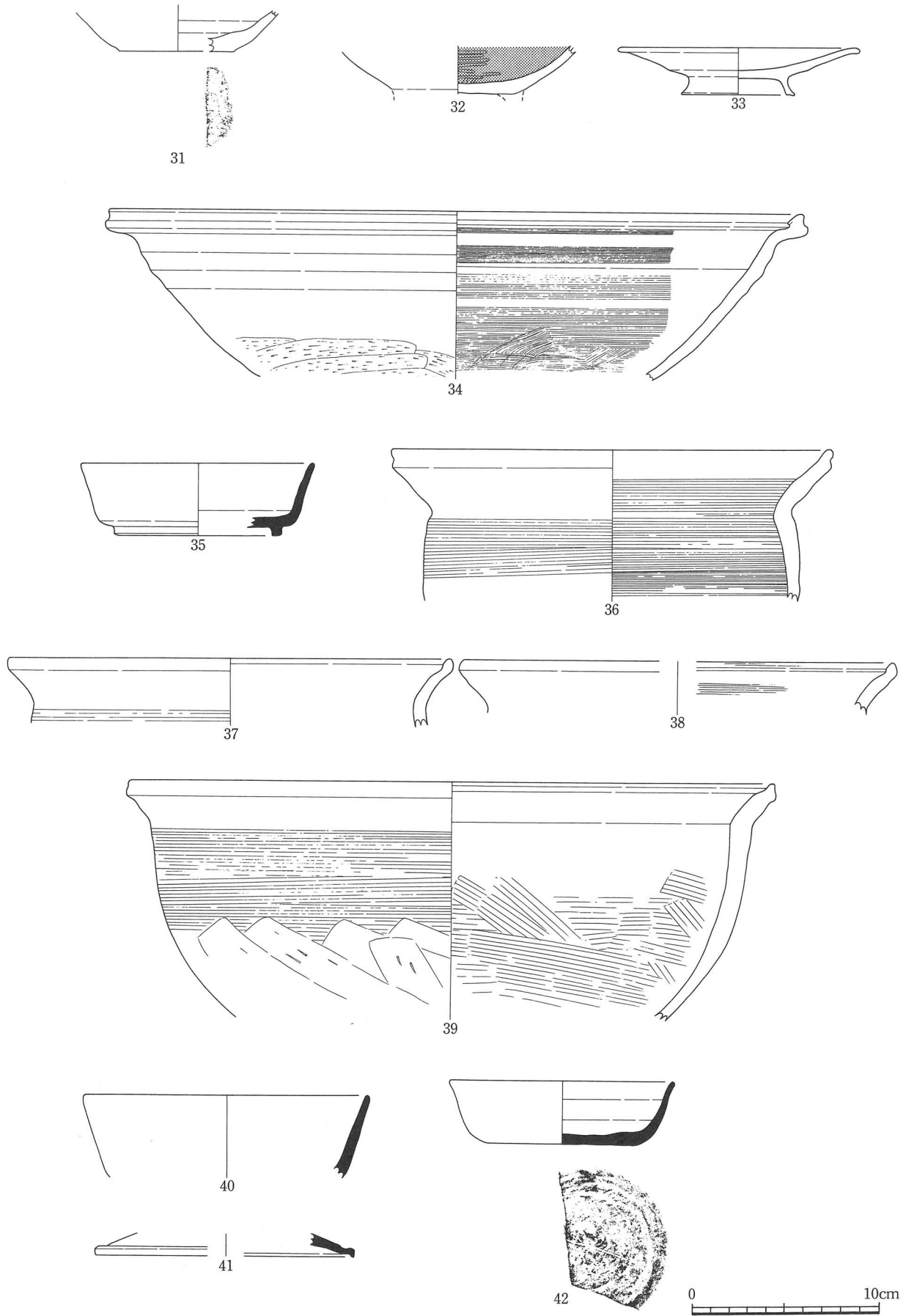
A区P 3内の底から出土した。長さ10.8cm、幅5.3cm、厚さ0.9cmの板状をしており、中央には直径3mmの釘のようなもので穴を開けた痕跡がある。片面には「一一六一号 六五 一口 一月二十日」と墨で書かれており、穴を避けるように文字が書かれていることから文字が見えるようにして何かに打ちつけたと思われる。ピットは現耕作土の土が埋まっており、墨書の文字も古い形態と思えず、時期は近代以降と考えたい。



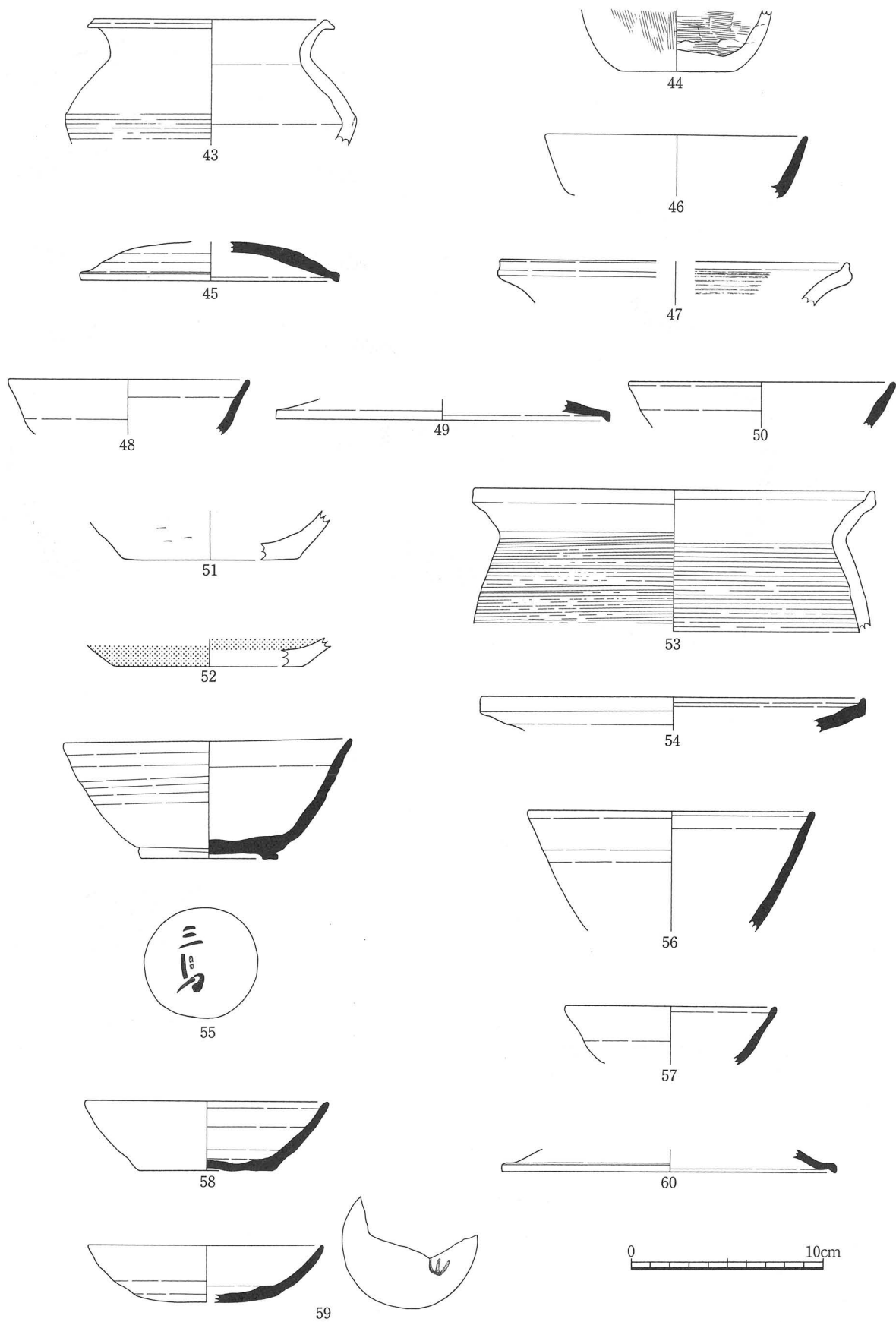
第33图 土器実測図 (S=1/3) 1~4 (S I 1)、5~7 (S I 2)、8~9 (S I 3)、10~13 (S I 4)



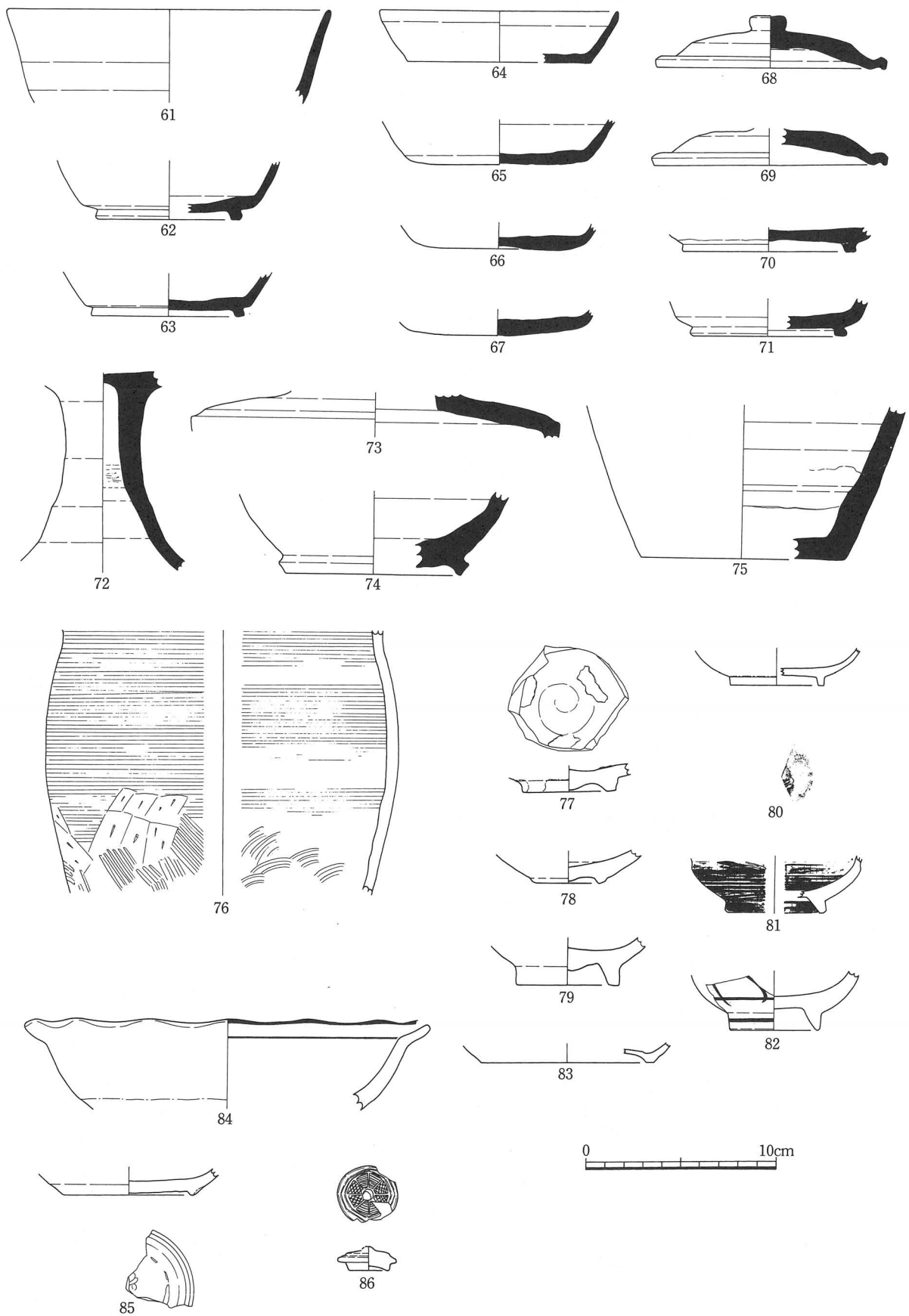
第34図 土器実測図 (S=1/3) 14 (S I 5)、15 (S I 6)、16~22 (S I 7)、23~30 (S I 8)



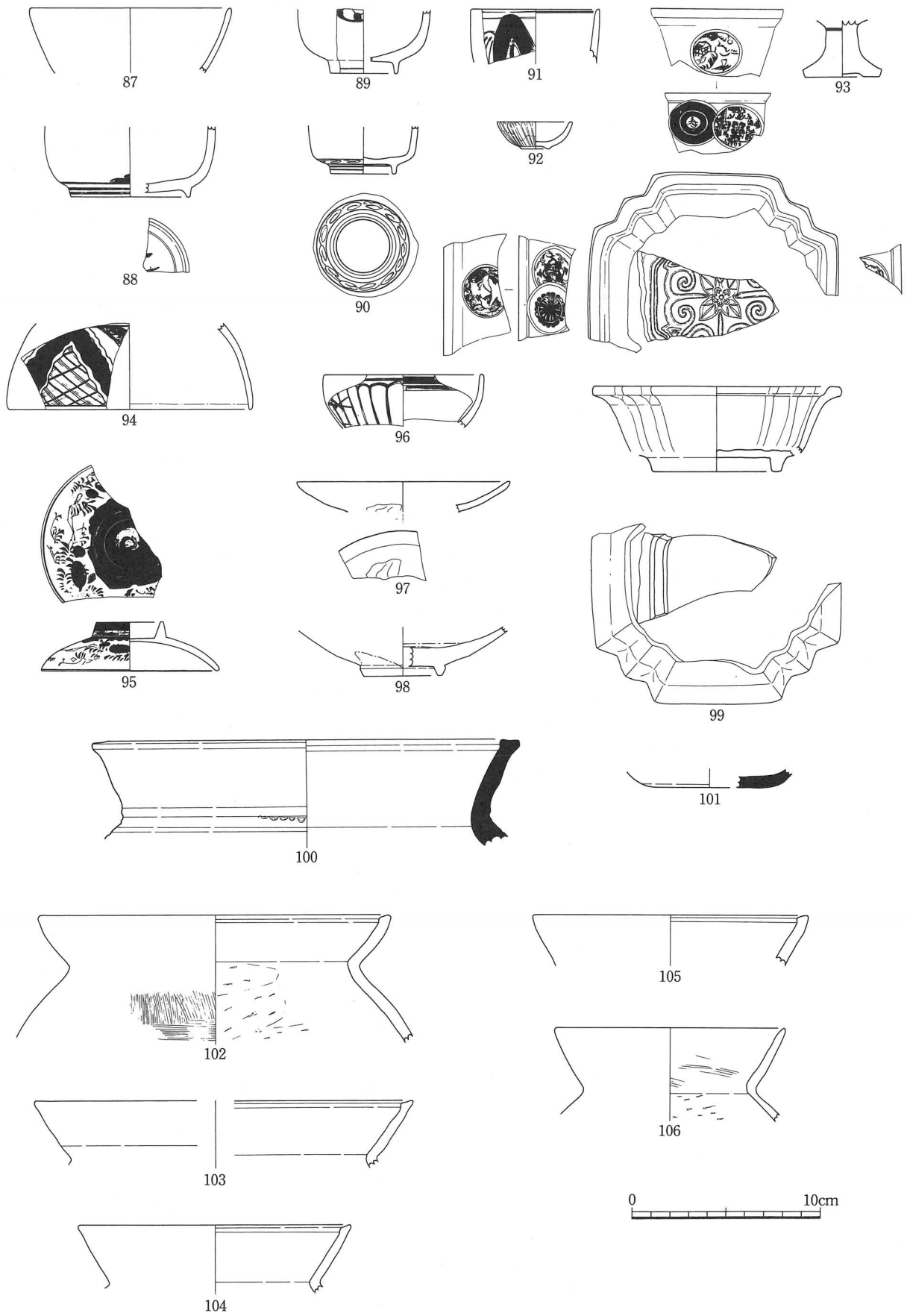
第35図 土器実測図 (S=1/3) 31~34 (S I 8)、35~39 (S I 9)、40~41 (S B 1)、42 (S B 4)



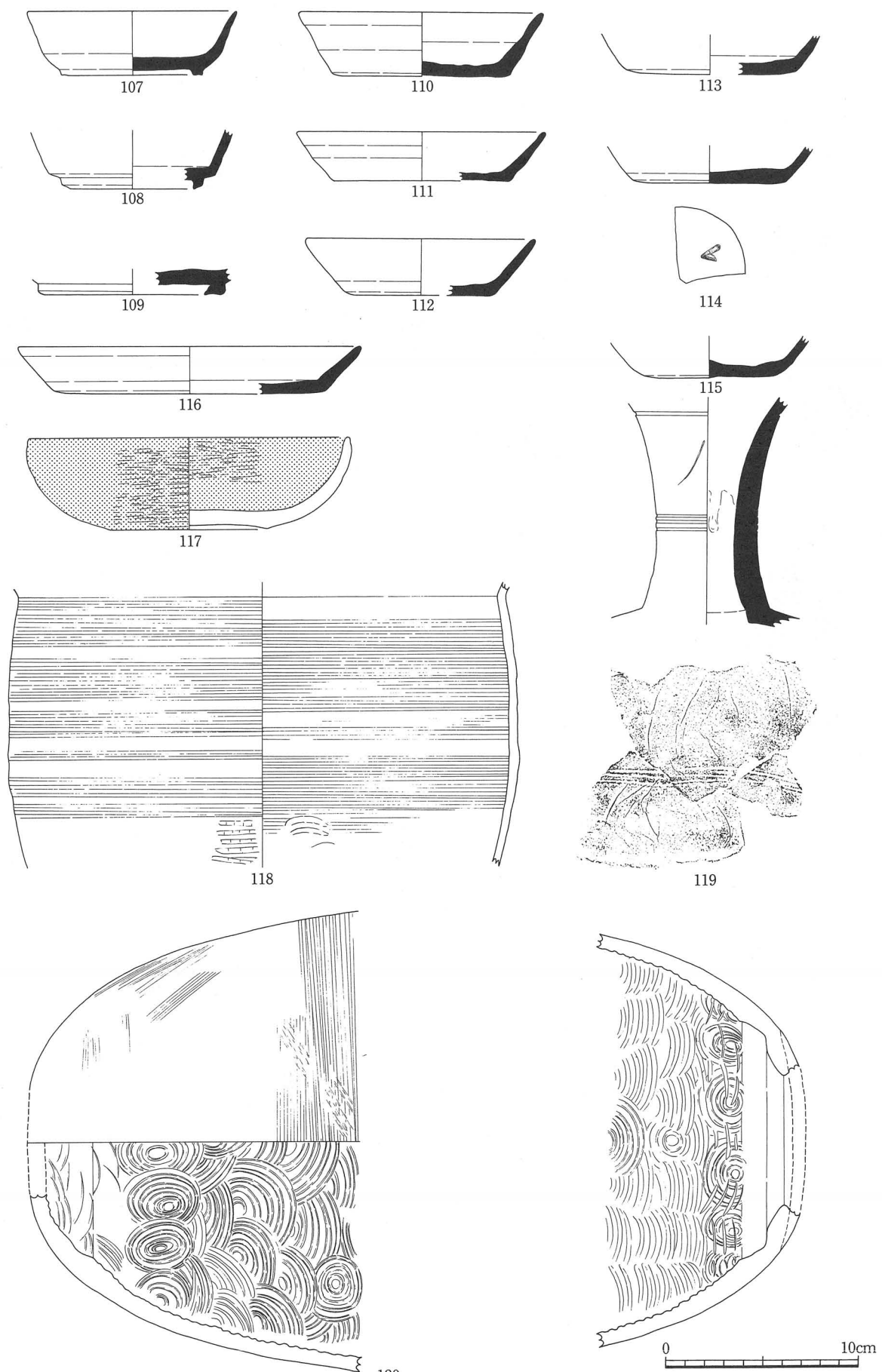
第36图 土器実測図 (S=1/3) 43 (SB 5)、44 (SB 6)、45 (SB 7)、46 (SK 1)、47 (SK 2)
 48~49 (SK 3)、50 (SK 4)、51 (P 1)、52 (P 2)、53 (P 4)、54 (P 5)、55~60 (SD 2)



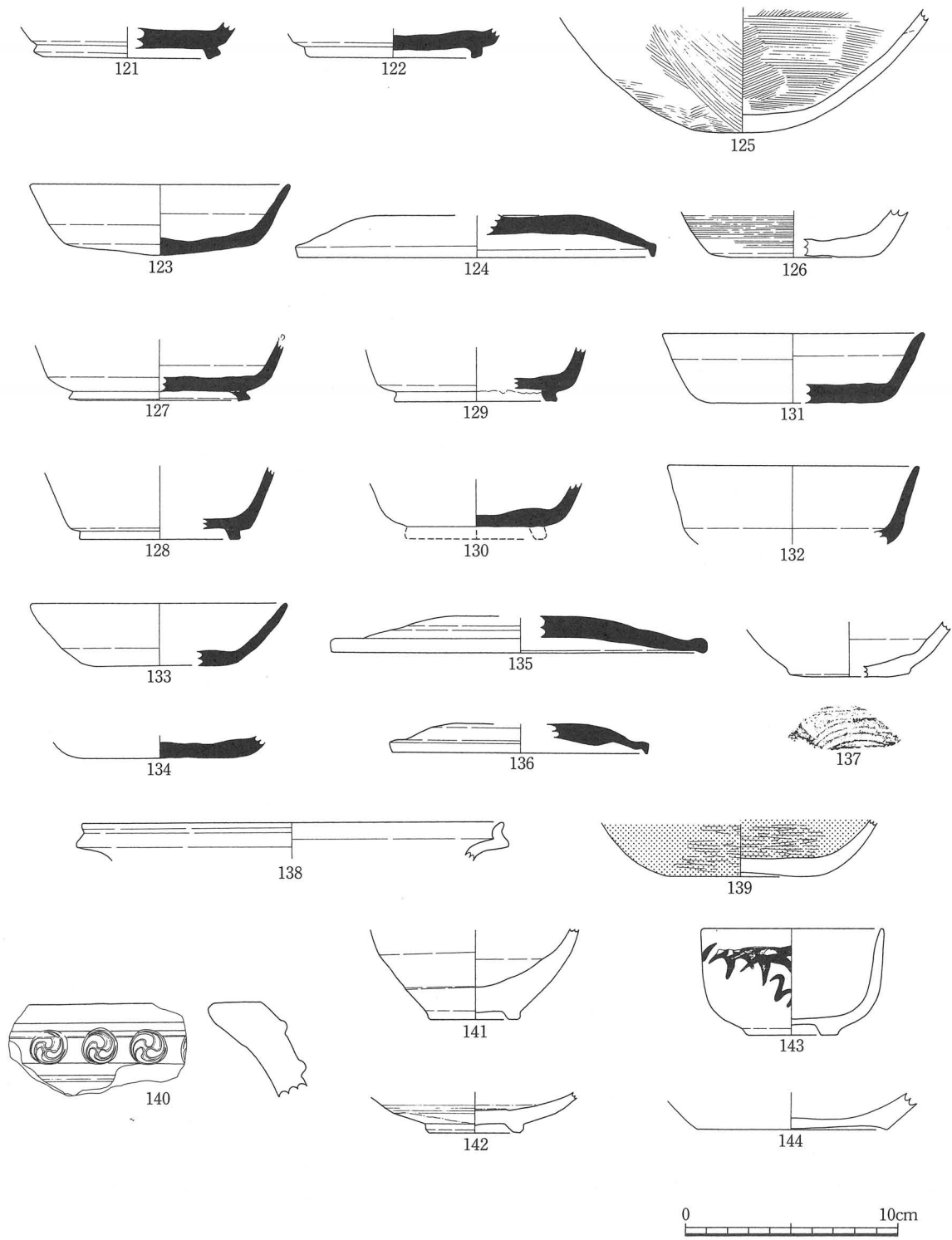
第37图 土器、陶磁器 实测图 (S=1/3) 61~86 (SD 3)



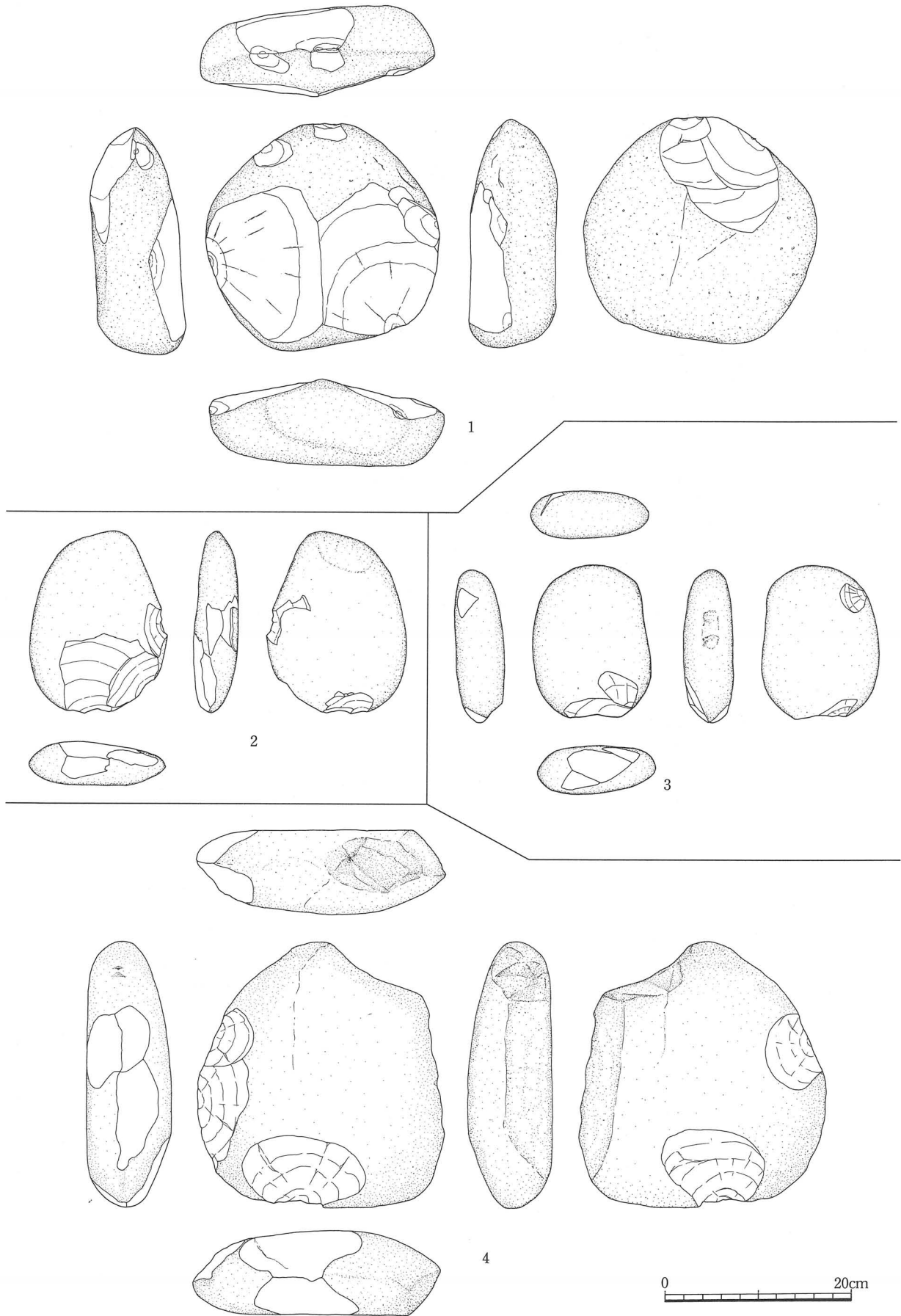
第38图 土器、陶磁器 实测图 (S=1/3) 87~99 (SD 3)、100 (SD 4)、101 (SD 5)、102 (A区包含層)



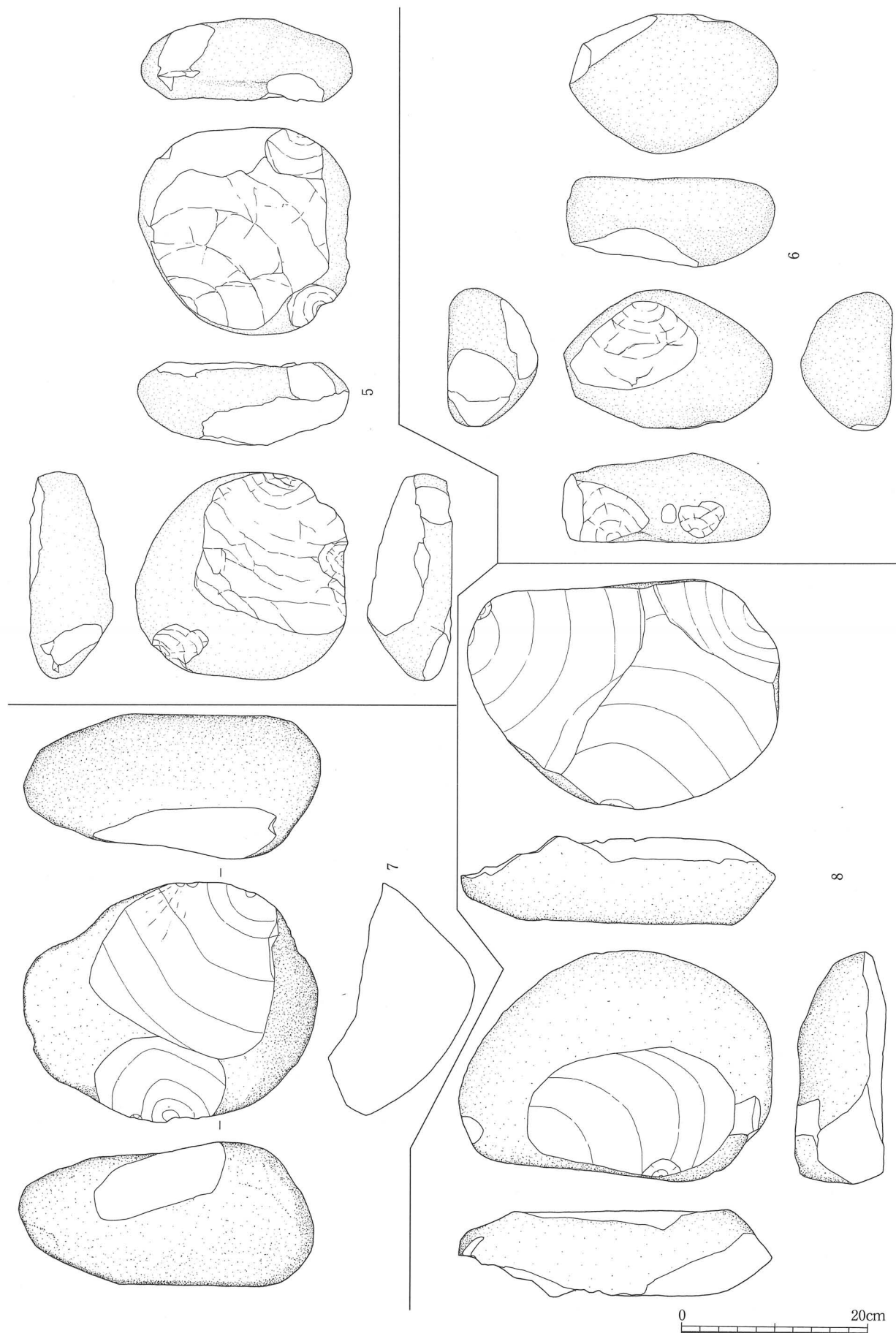
第39图 土器実測図 (S=1/3) 107~119 (A区包含層)、120 (B-3区包含層)



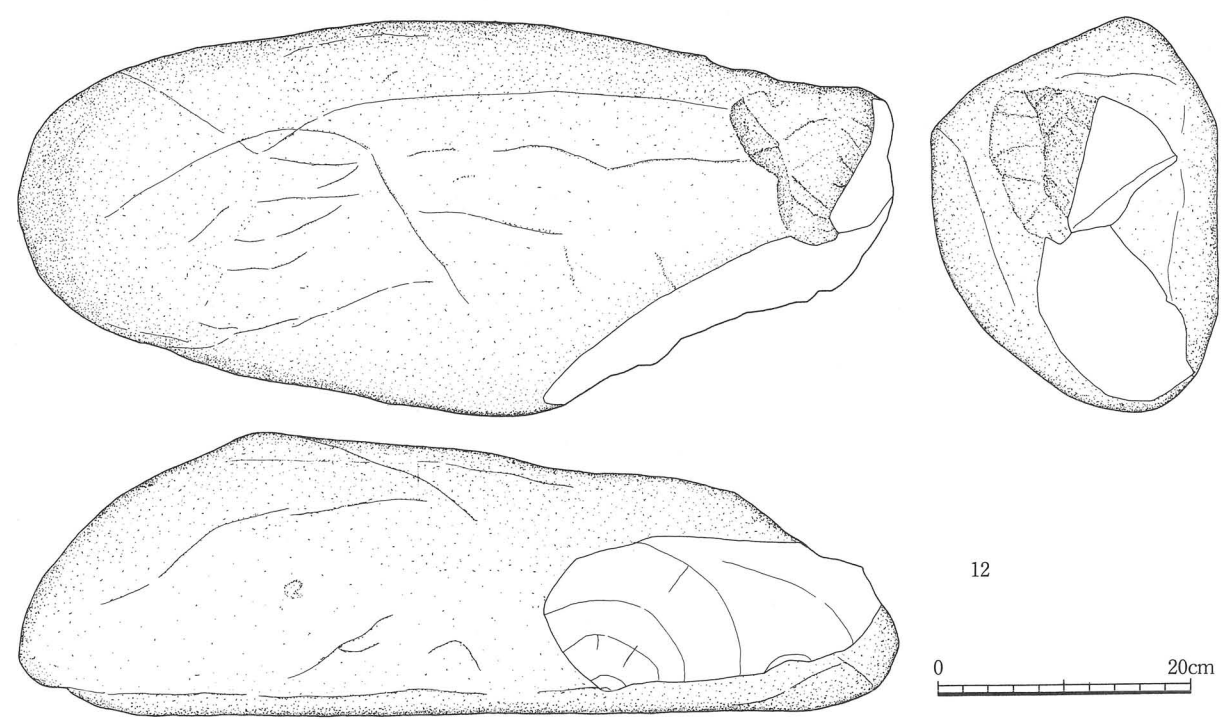
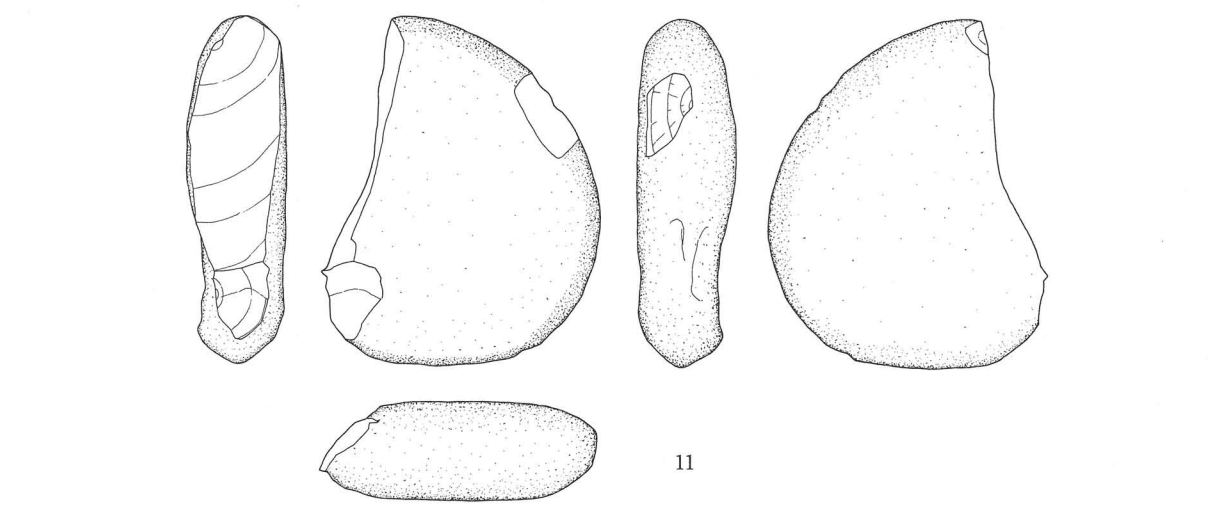
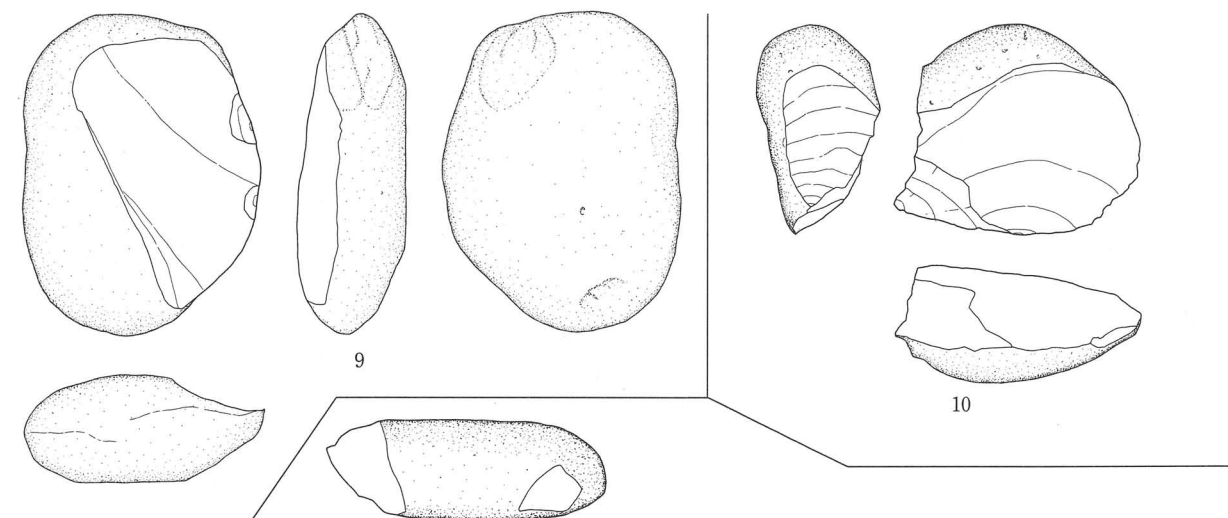
第40图 土器、陶磁器 实测图 (S=1/3) 121~126 (B-3区包含層)、
127~140 (C区包含層)、141~143 (A区表土)、144 (A区包含層)



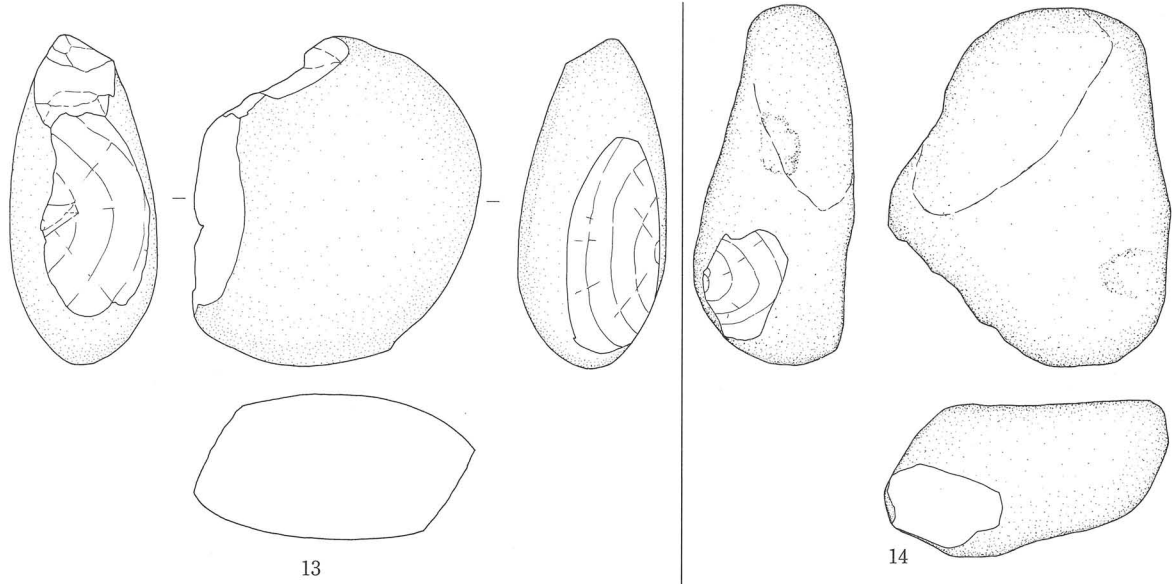
第41図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩



第42図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩

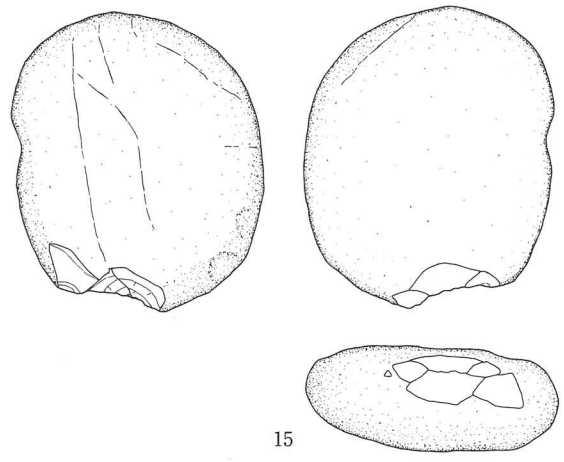


第43図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩

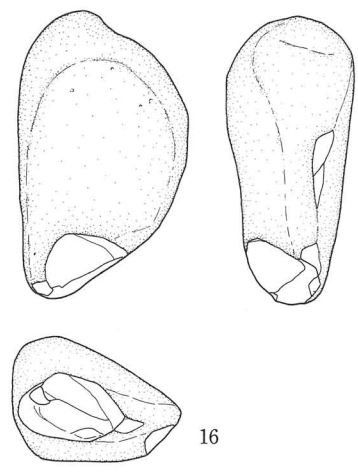


13

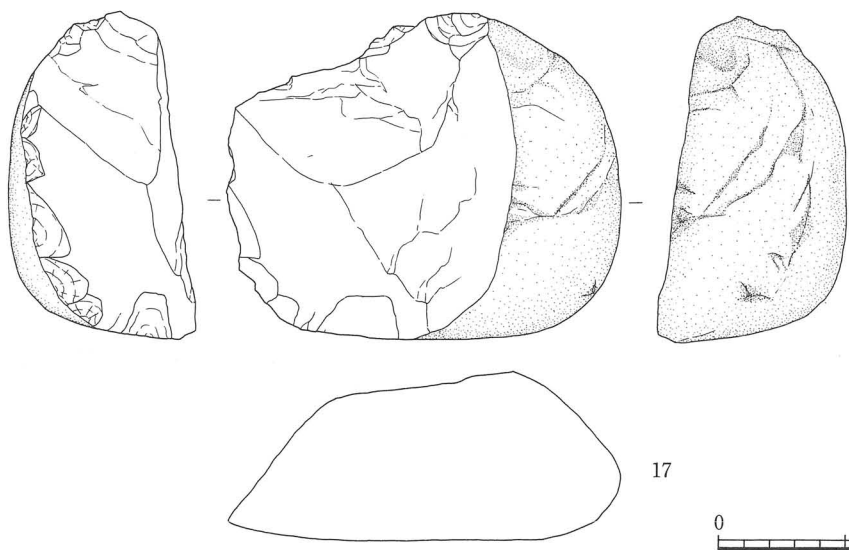
14



15



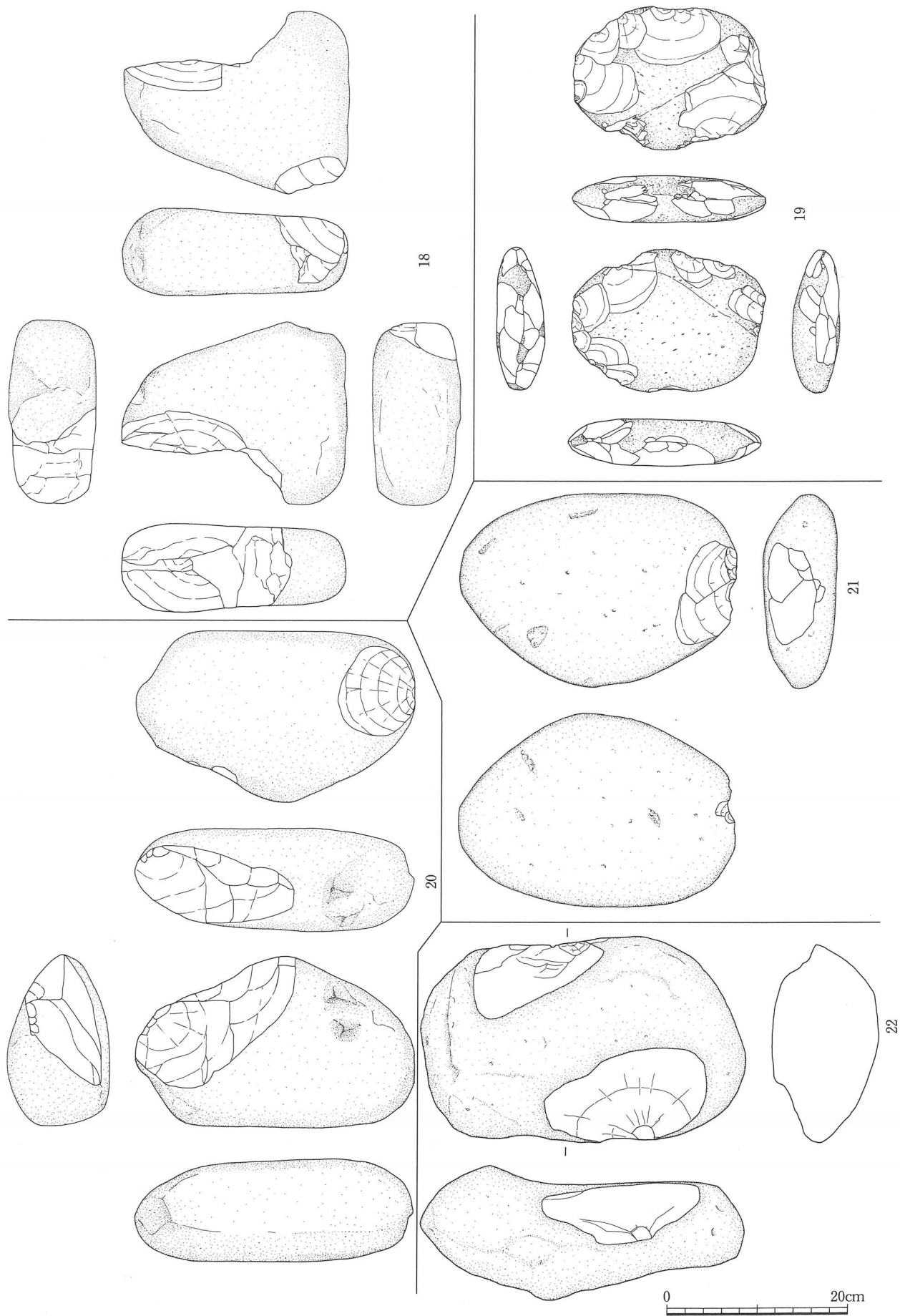
16



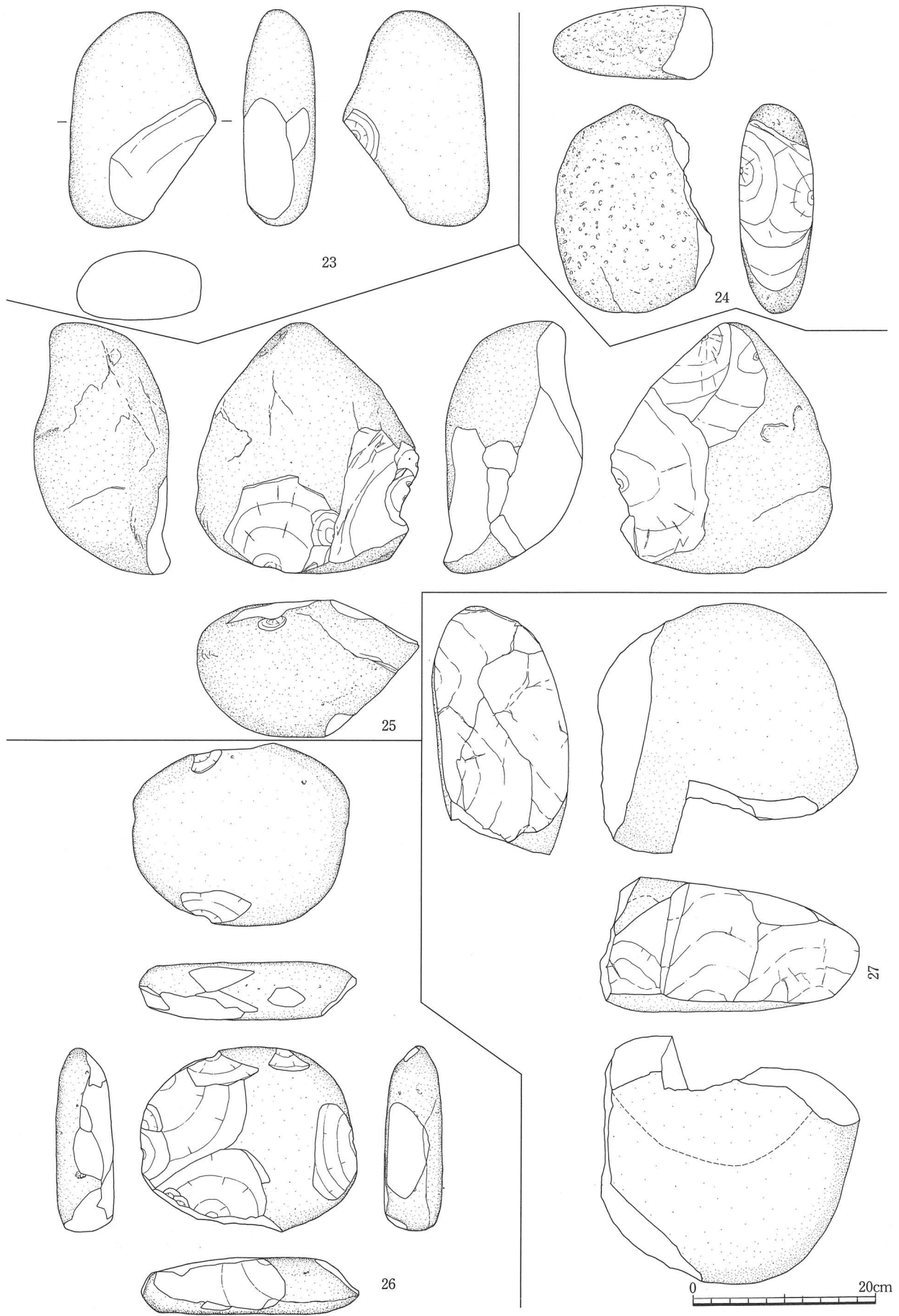
17



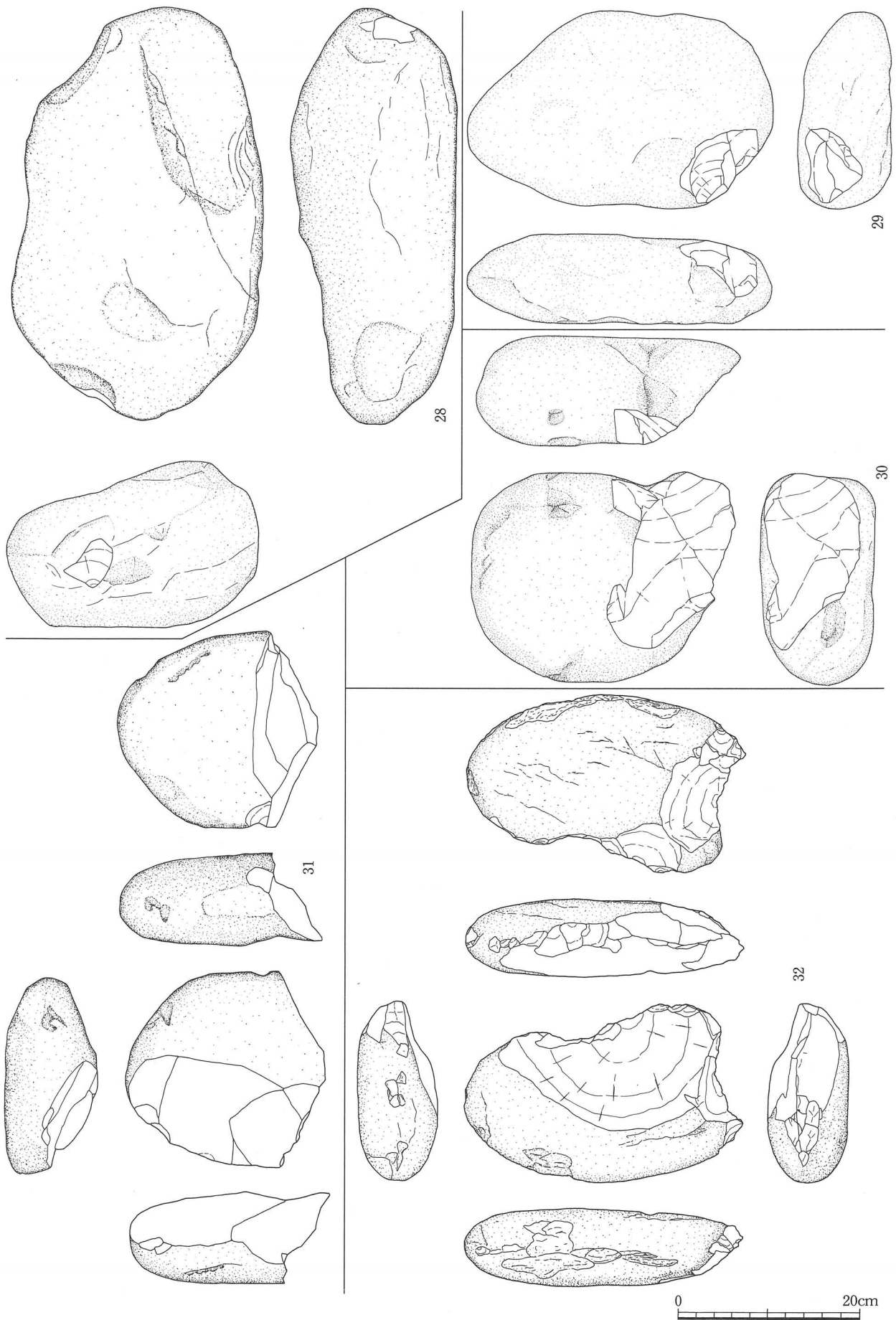
第44図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩



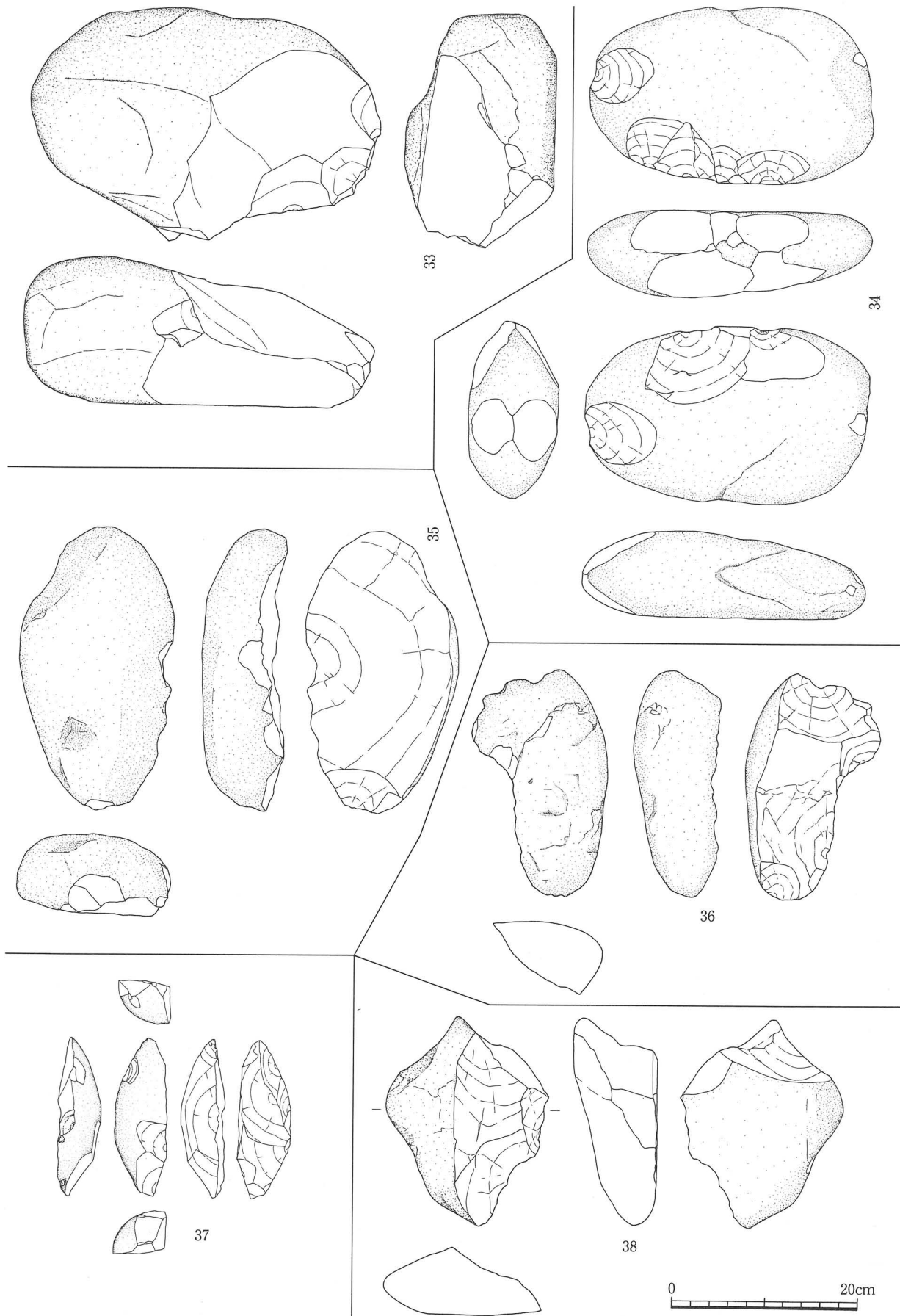
第45図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩



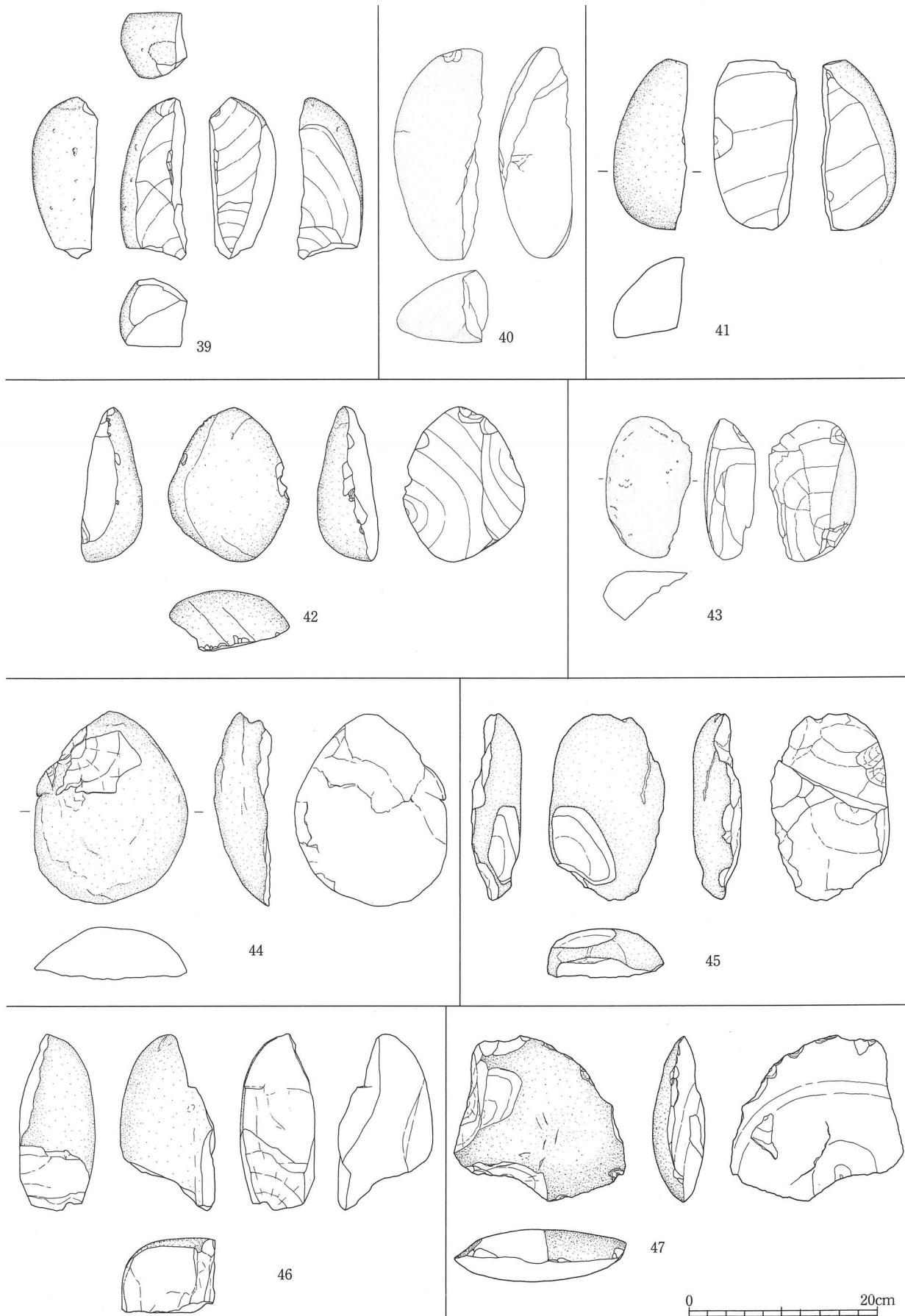
第46図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩



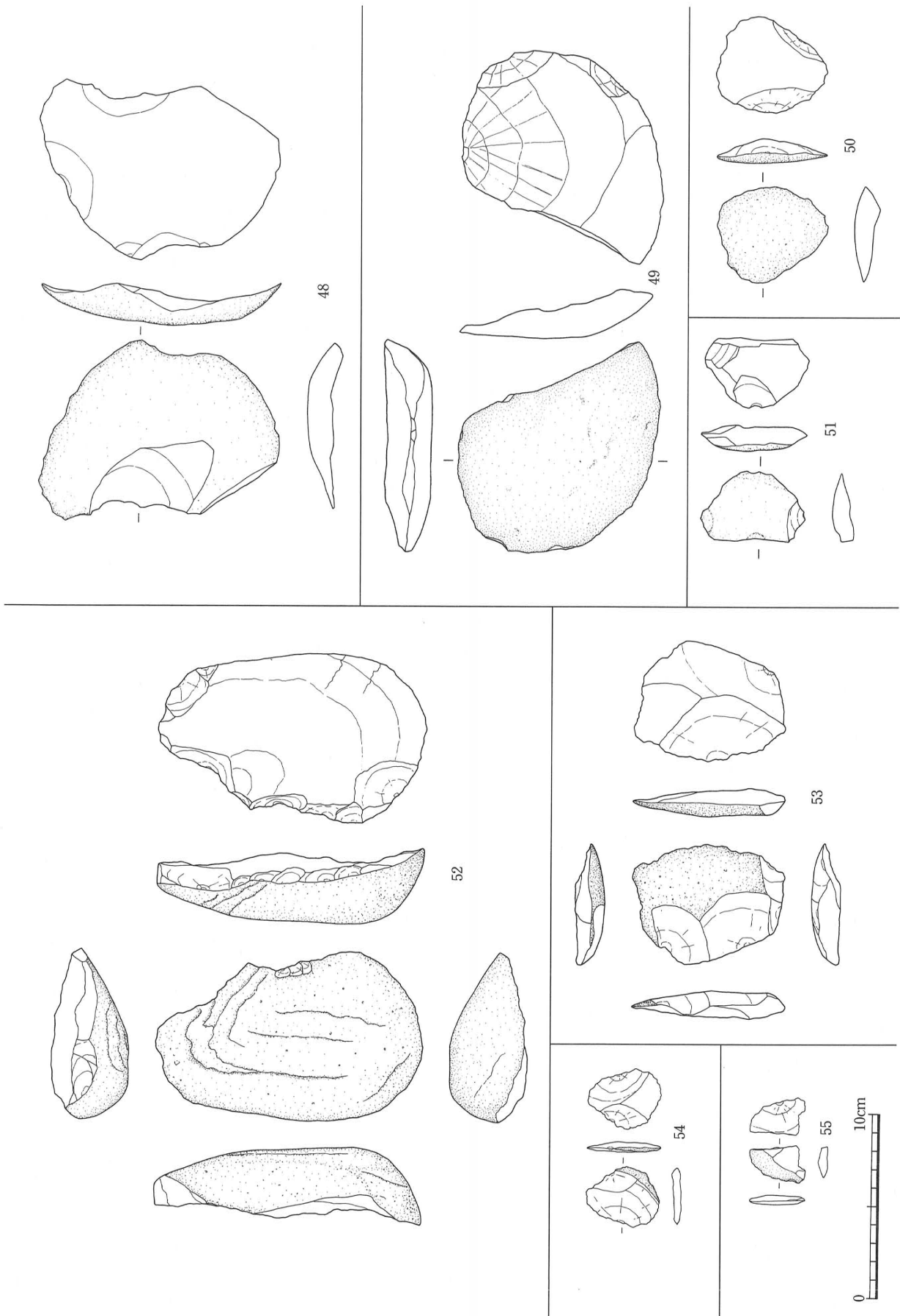
第47図 石製品実測図 (S=1/6) 母岩



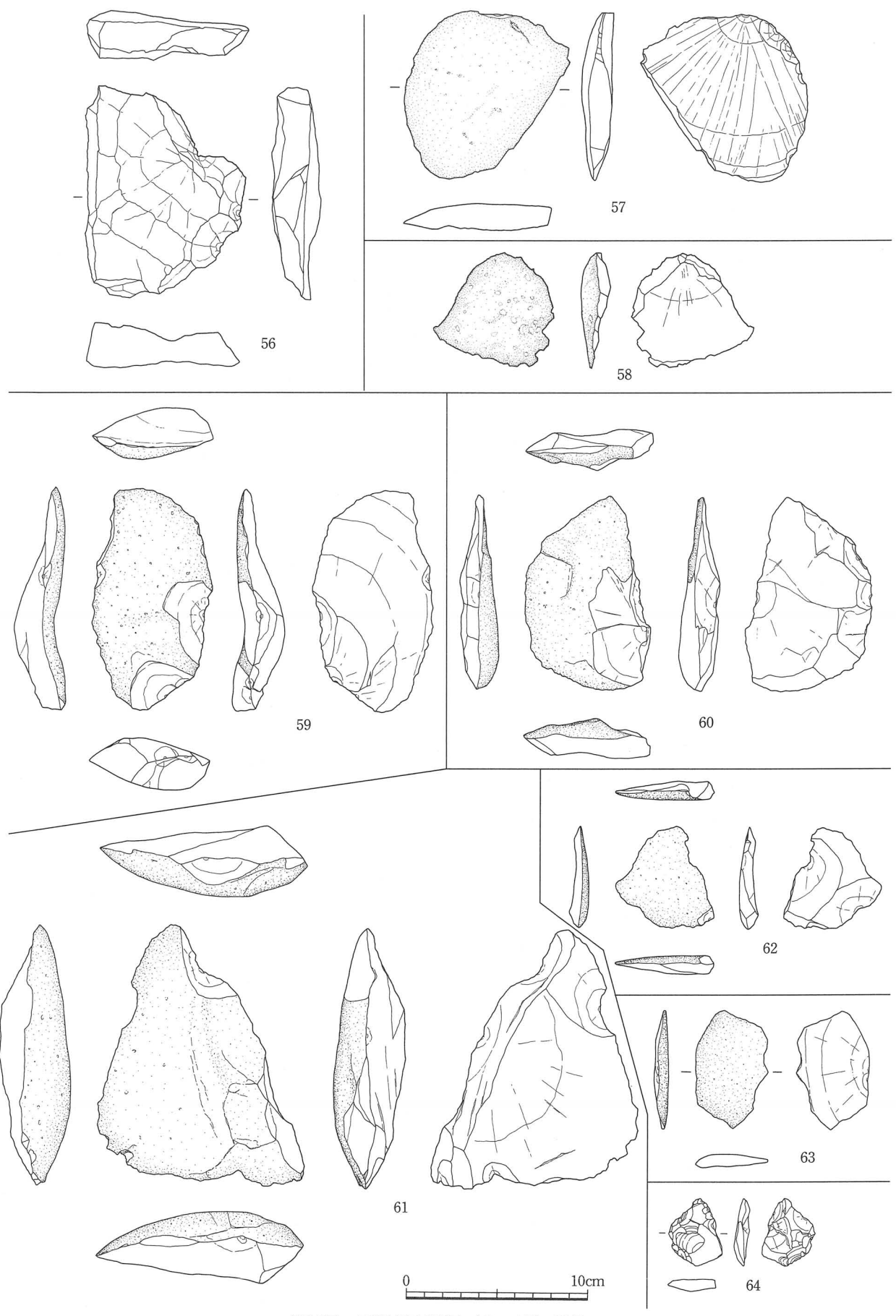
第48図 石製品実測図 (S=1/6) 33~34 (母岩)、35~38 (剥片)



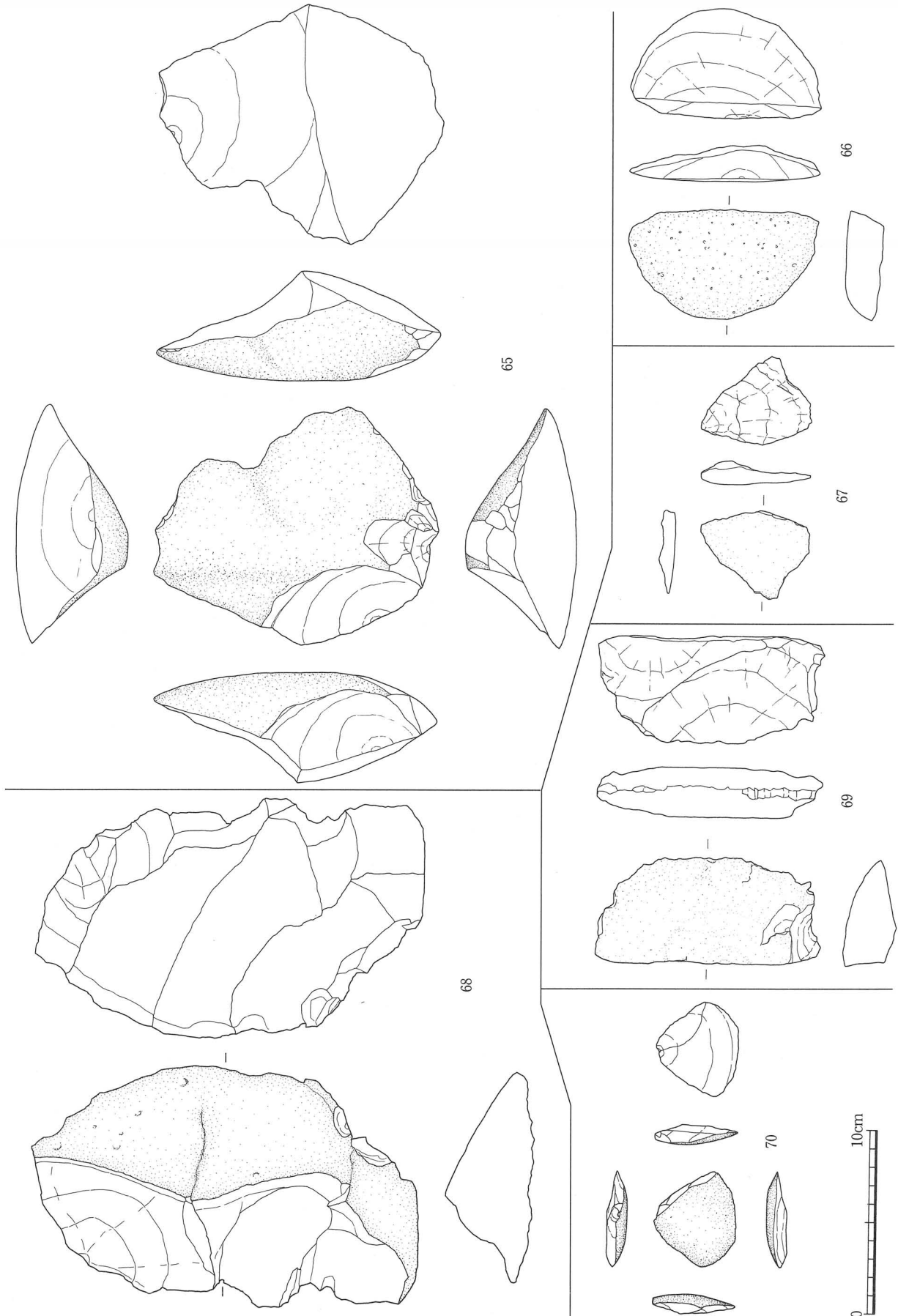
第49図 石製品実測図 (S=1/6) 剥片



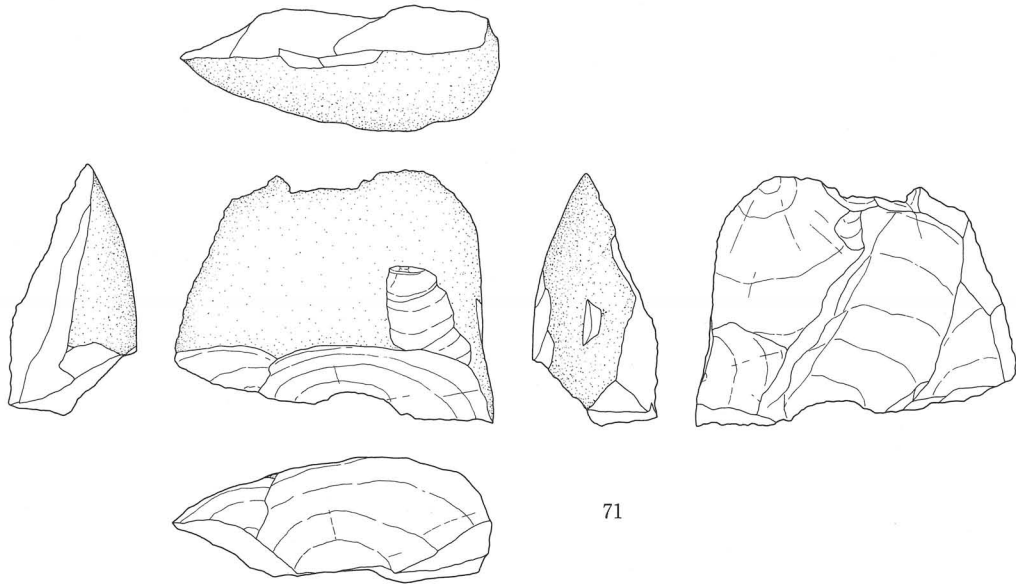
第50図 石製品実測図 (S=1/3) 剥片



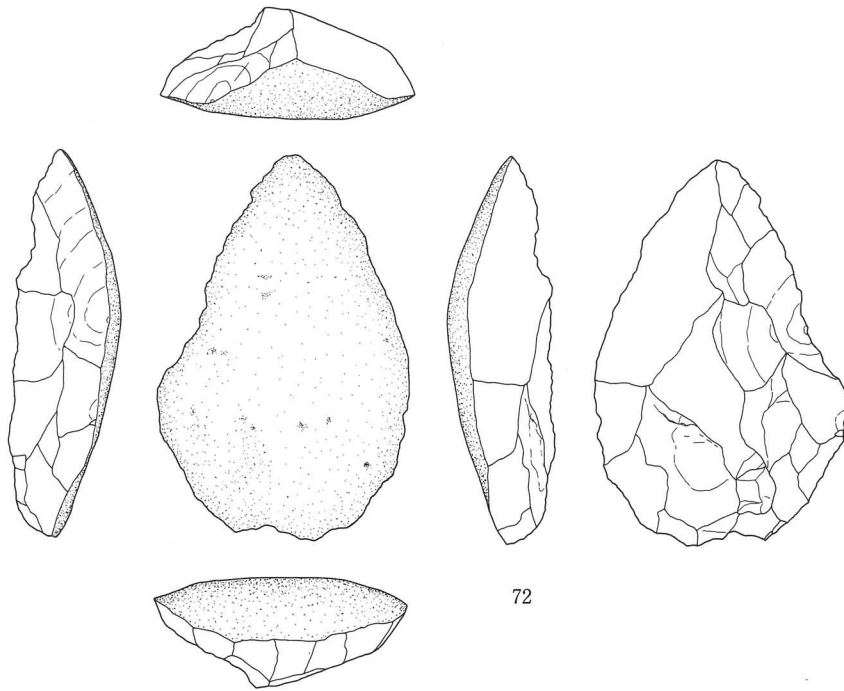
第51図 石製品実測図 (S=1/3) 剥片



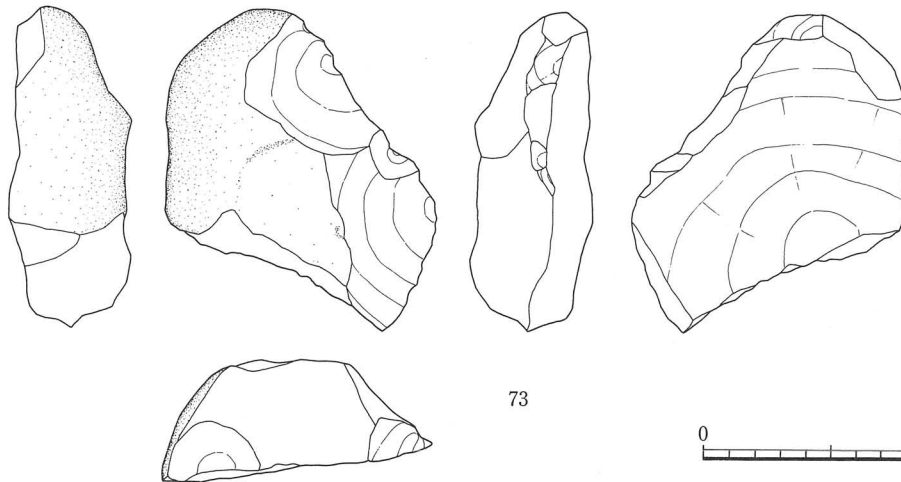
第52図 石製品実測図 (S=1/3) 剥片



71



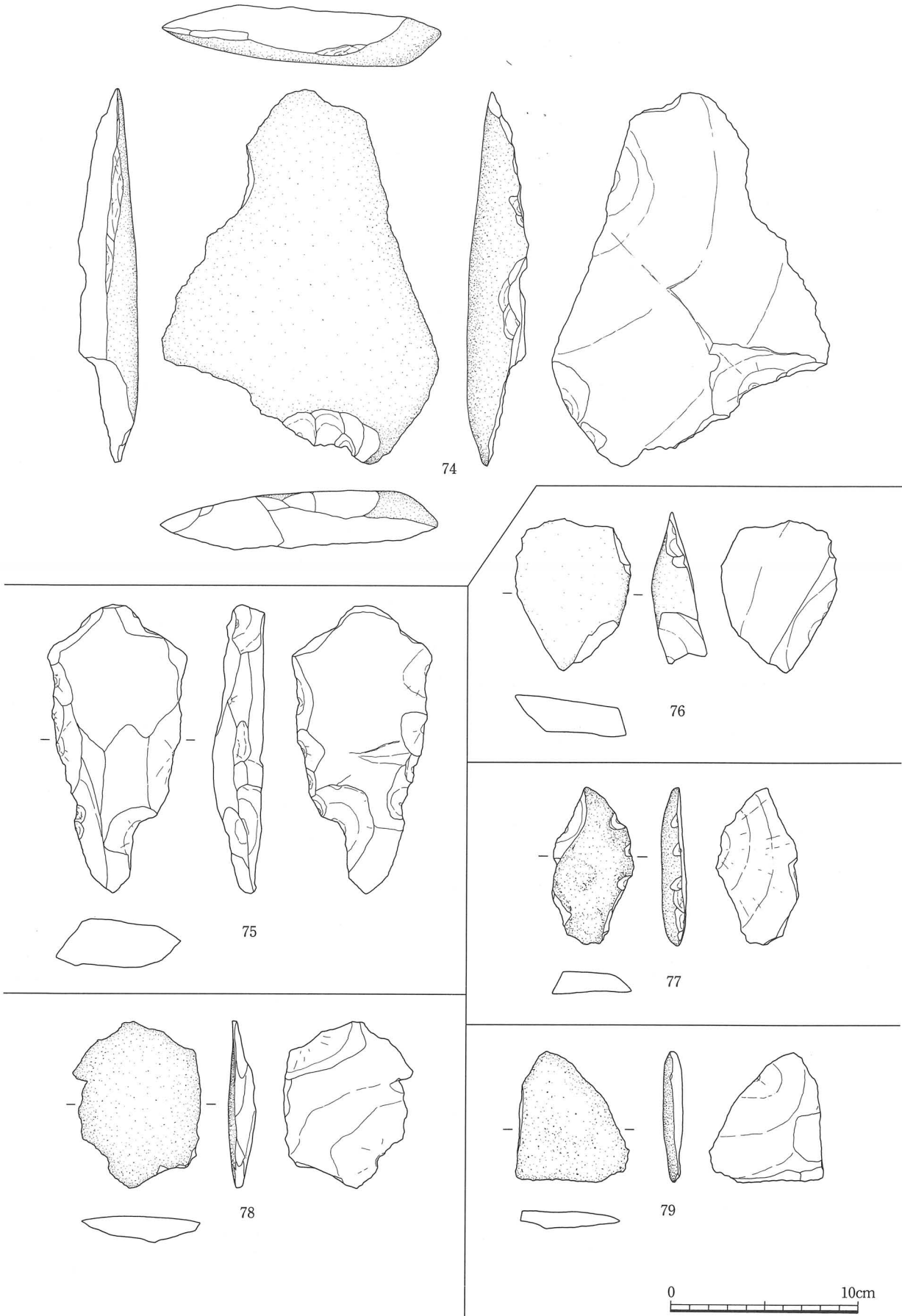
72



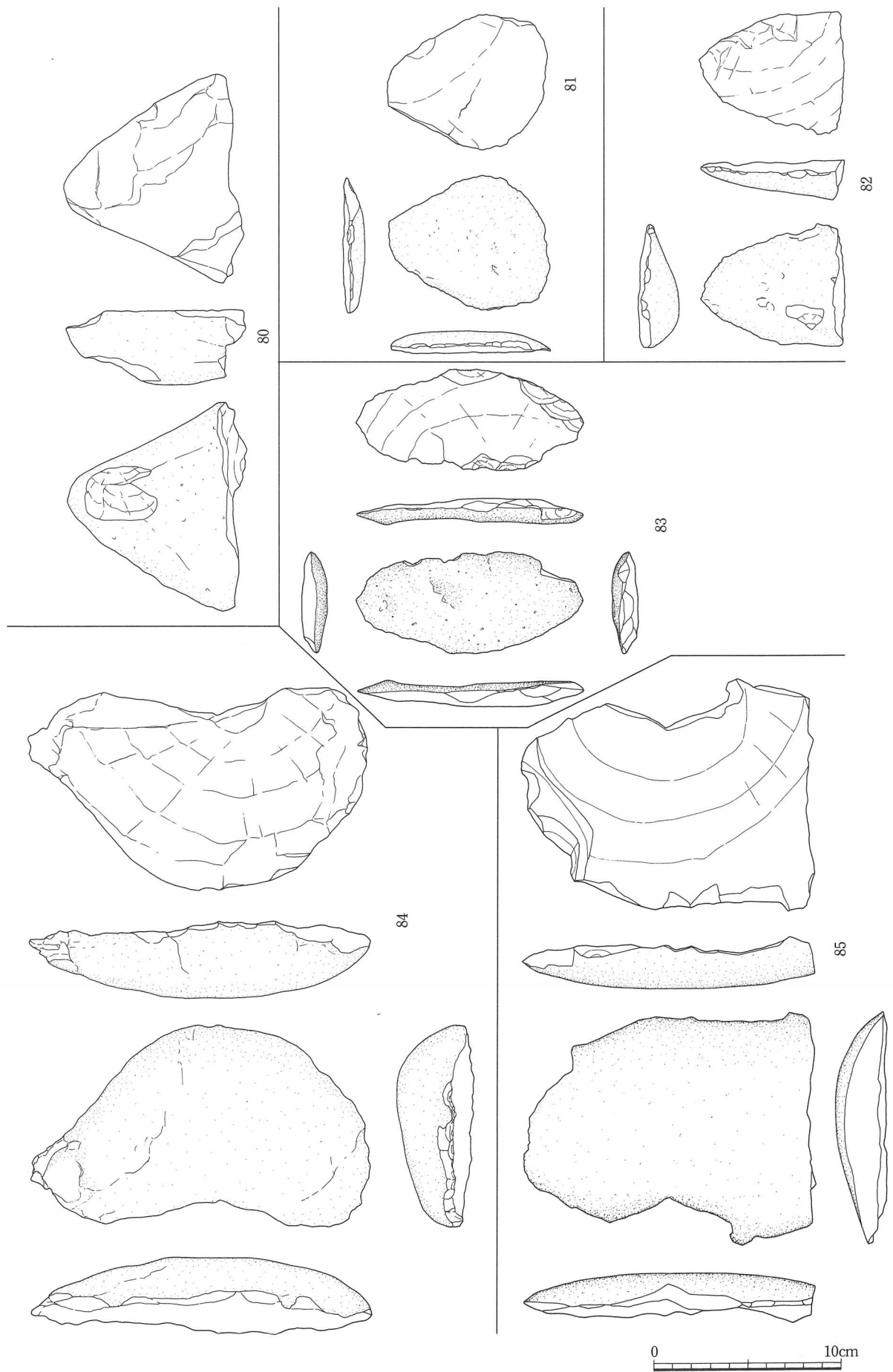
73



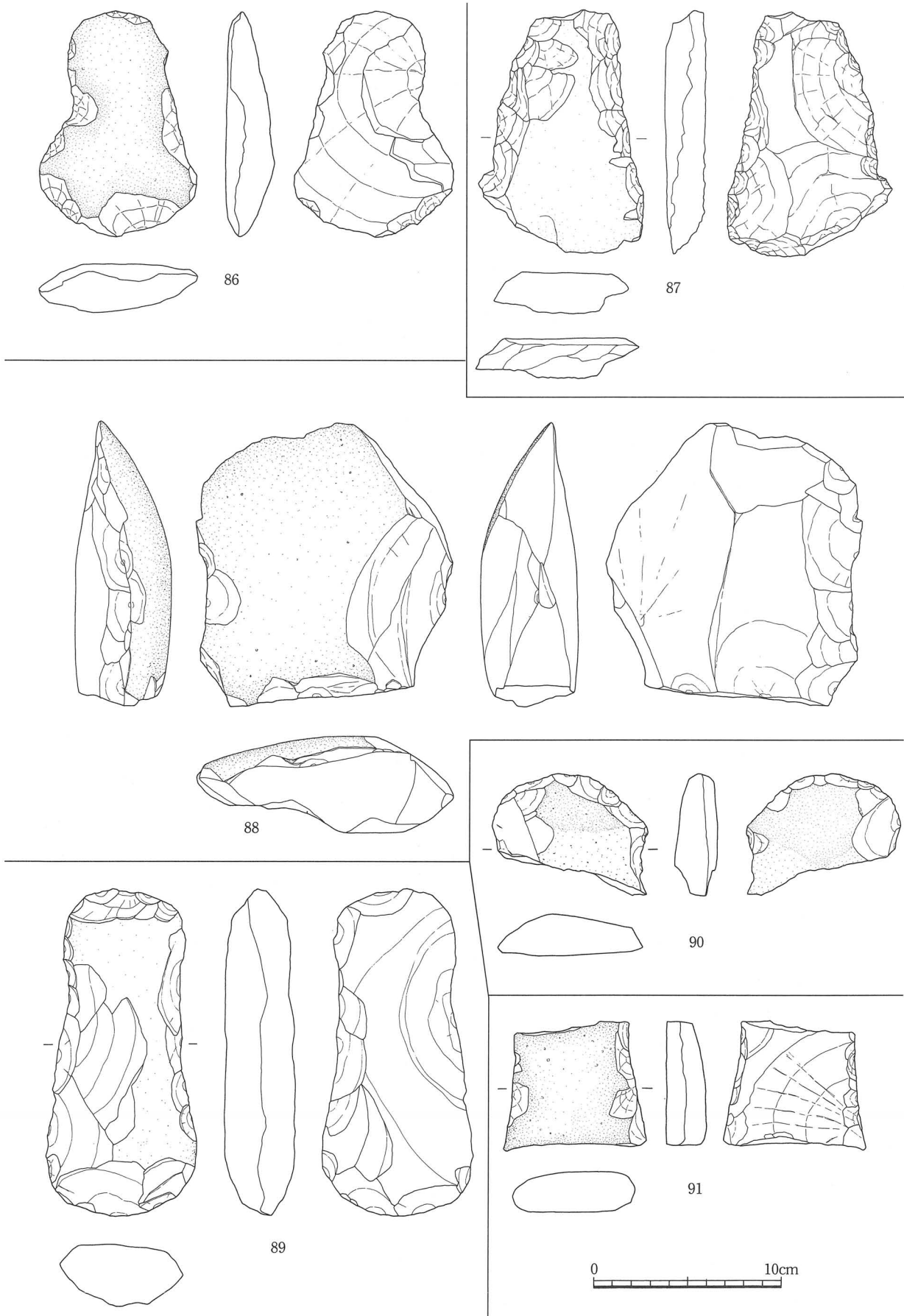
第53図 石製品実測図 (S=1/3) 剥片



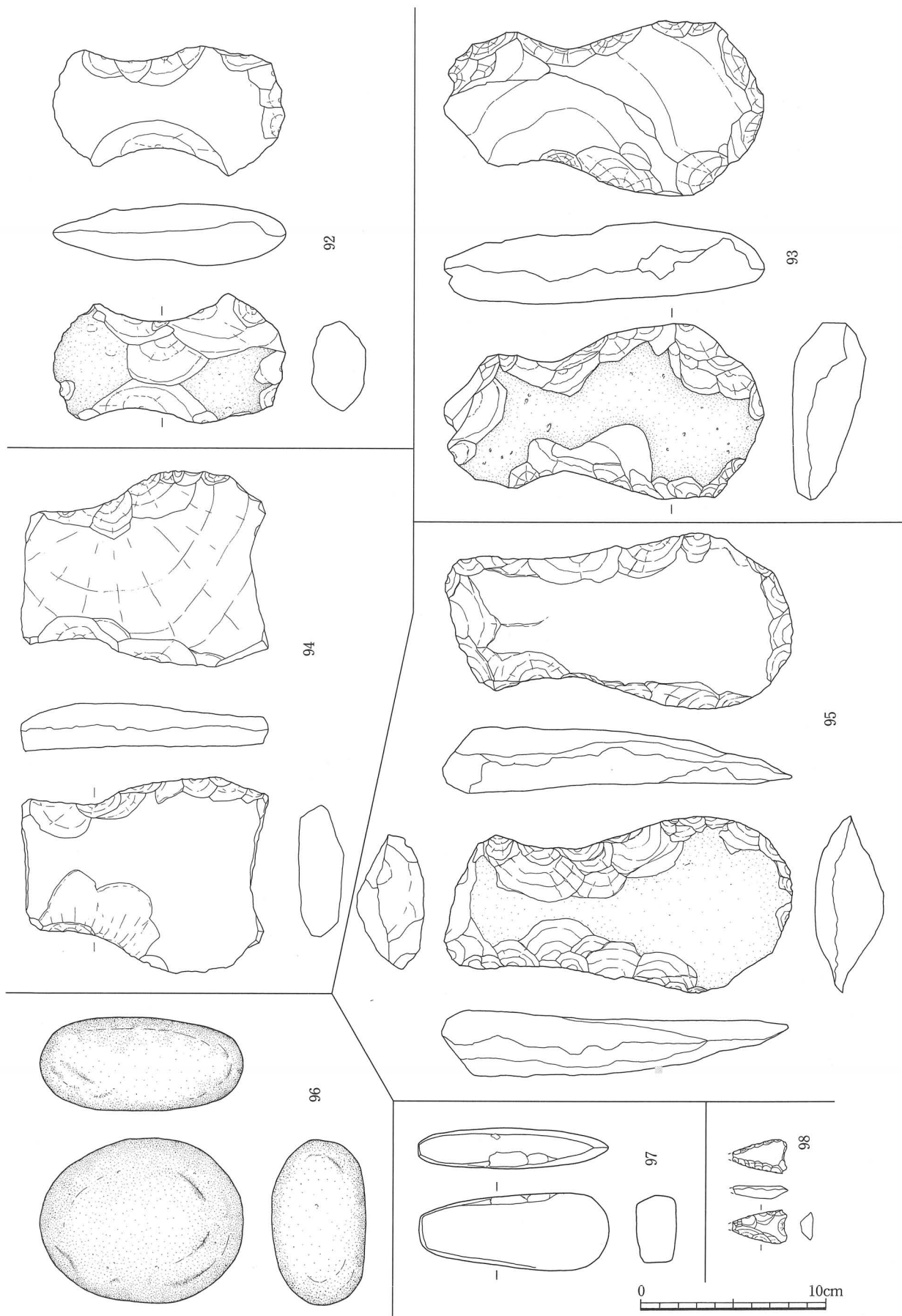
第54図 石製品実測図 (S=1/3) 剥片



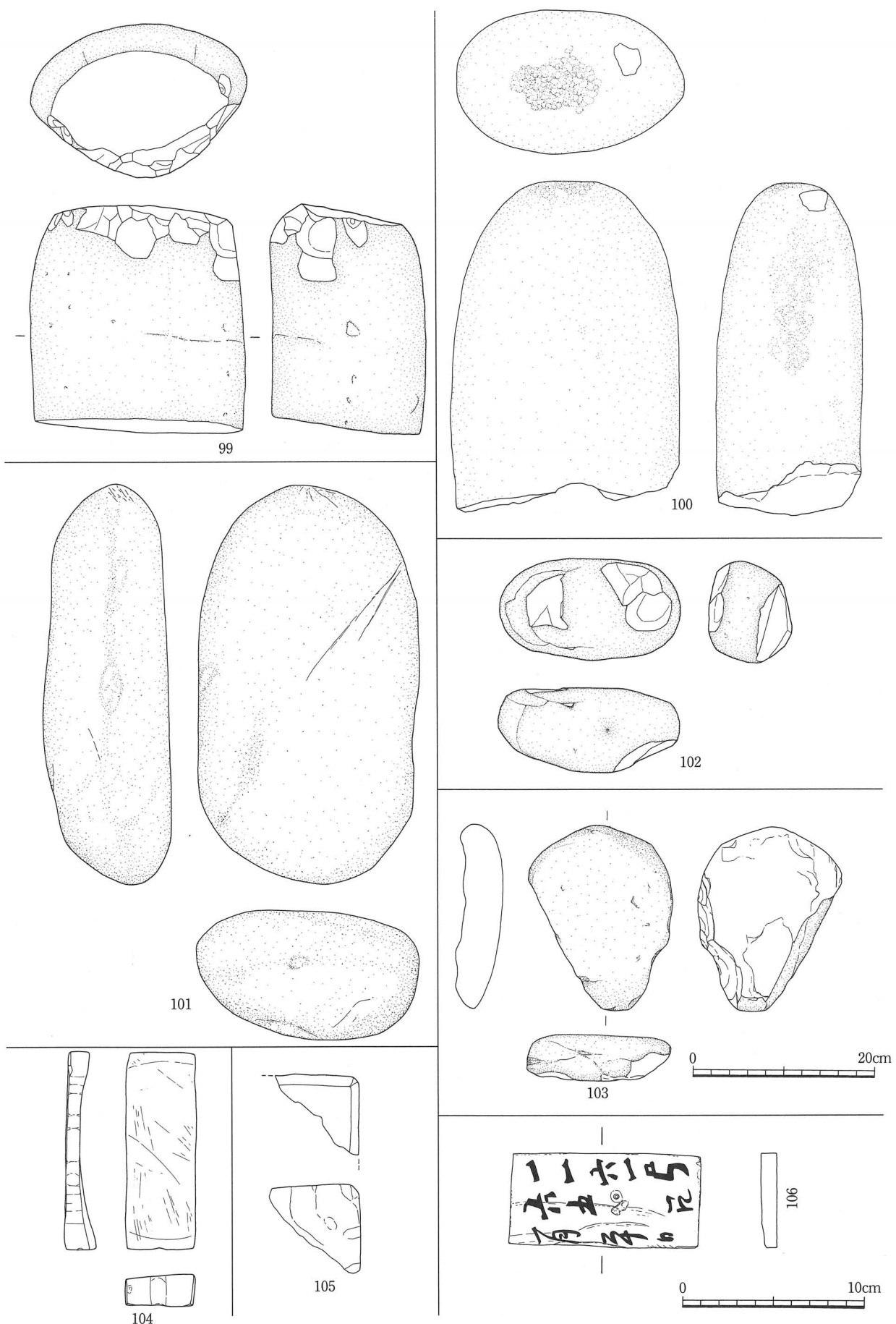
第55図 石製品実測図 (S=1/3) 剥片



第56图 石製品実測図 (S=1/3) 打製石斧



第57図 石製品実測図 (92~98 S=1/3)、92~95 (打製石斧)、96 (磨石)、97 (磨製石斧)、98 (石鏃)



第58図 石製品、木製品 実測図 (99~101 104~106 S=1/3) (102~103 S=1/6)
 99~102 (カマド袖石)、103 (土台石)、104 (砥石)、105 (不明)、106 (木札)

第6章 小 結

縄文時代

縄文時代では石礫原で母岩を打撃して石器の素材を作っている。母岩や剥片などはA区の石礫原1と2の間の鞍部に集中する。しかし、母岩等の出土状態から石器製作工程における具体的な作業場所を特定することは難しい。また、この鞍部が集落への石器の供給口となる搬出路という可能性もあるが、母岩や剥片の出土状態には一貫性はなく、いわゆる石礫原の上から自然に転がったような感じを与えており、今一度検討が必要である。なお、図示はしていないが、縄文晩期の土器小片が包含層で数点確認しており、当該時期にあてたいと思う。

古墳時代

古墳前期の土器がA区包含層から20点近く出土した。(実測点数は5点、第38図102~106)明確な遺構は見つかっておらず、周辺でも当該期の遺跡は確認していないため、流れ込みによるものと推したい。

奈良・平安時代

出土した土器から各建物の年代観を推定し(田嶋 1988)、1989年度県埋蔵文化財保存協会による調査で確認された主要建物と対応し、改めて遺構の変遷を検討してみる。なお、第61図の遺構変遷図における図中番号は単独数字が本調査、頭に89の付く数字が1989年度調査とする。以下、2カ年かけた調査の概要を説明する。

8世紀前～半ば

竪穴住居跡A区S I 1とB-3区S I 7、89-1、89-2、89-4、89-11、89-12、89-13と北西-南東ライン幅約4.2mの道路状遺構である。掘立柱建物跡は確認していない。

8世紀後半

竪穴住居跡B-1区S I 4、B-3区S I 5、S I 6、E区S I 9と89-3、89-5、89-6、掘立柱建物跡B-1区S B 3、B-3区S B 4(89-S B 1)、S B 6、S B 7と89-S B 3、89-S B 4、89-S B 7が当該時期にあてはまる。道路状遺構は方向に変更がないが、道幅は2.8mに縮小する。

9世紀前半

竪穴住居跡A区S I 2、B-1区S I 3、89-8、89-10及び掘立柱建物跡B-1区S B 1、S B 2、S B 5(89-S B 2)、C区S B 8、89-S B 5、89-S B 6、89-S B 8、そしてS B 5や89-S B 6の南端を横切るS D 74があてはまる。

9世紀後半

竪穴住居跡C区S I 8と89-14がある。1989年度調査では89-14は9世紀前半に位置づけているが、覆土から9世紀後半の埴が出土しており、また、C区S I 8と近接することから当該期まで下ると推

定した。

調査区の東端と西端には竪穴と掘立柱建物の集中箇所があり、北方と南方には竪穴住居が数棟存在する。南方にある竪穴は集中しているが、北方にある竪穴は散在している。

8世紀前半は西群と南群に竪穴住居がそれぞれ3～4棟つくられている。竪穴は全般的に一辺4～5mの大型のものが多く、掘立柱建物は確認していない。1989年度の県埋文協会調査からは両側に側溝をもった道路状遺構が見つかり、北西—南東方向に向かって走る。

8世紀後半には西群に竪穴2棟と掘立柱建物5棟、東群に掘立柱建物2棟を確認し、南北に竪穴が2・3棟ずつ散在する。掘立柱建物の主軸は真北からやや東に振れる。道路状遺構は4.2mから2.8mに道幅を縮小しながらも向きは変わらずに併存する。

9世紀前半は西群で竪穴2棟、掘立柱建物3棟、東群で掘立柱建物4棟を確認し、北方に竪穴2棟が存在する。道路状遺構はなくなり、西群の建物脇を通る東西溝が走る。竪穴は規模の小さいものが目立ち、据え付きカマドがなくなる。掘立柱建物の主軸は真北から西に大きく振れ、8世紀後半とは全く方向が変わる。

9世紀後半は西群に建物がなくなり、東群に竪穴が2棟存在するのみである。竪穴は9世紀前半と同じく規模が小さい。

古代の粟田遺跡は8世紀前半から9世紀後半にかけて営みをもつ集落遺跡で、1989年度県埋文協会が調査した成果と基本的には変わらない。

集落は竪穴と掘立柱建物2・3棟ずつ建っており、いわゆる散居村の構造をしている。8世紀段階までは小村と小村の間に道路が通る。また、石礫原を除いた集落や道路の周りには畑地が広がり、その畑地の一角には番小屋的な竪穴が建っていたと思われる。

中世以降

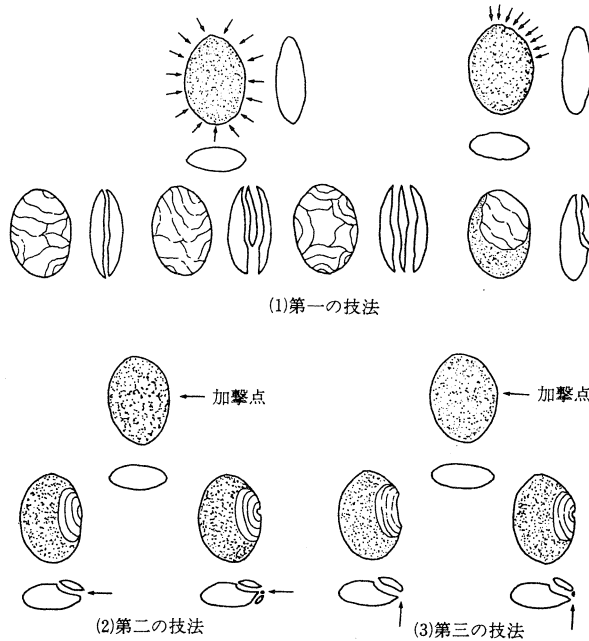
中世以降は目立った遺構は見えない。遺物は図示していないが、遺構検出面より上の層から中世後半の瀬戸の天目茶碗や瓶の破片などが少量見つかった。土層断面の観察より中世からは耕作地になったと考えられる。ただし、石礫原の上の土層は現耕作土しか確認していないため、この時期でも石礫原が広がった風景を見せている。中・近世までは現在のように集落や河川以外全面に水田が広がるような風景ではなく、耕作地の中に荒地など田畑には適さない土地が多く散在していたと推察される。

(註)

(1) 富奥農業協同組合 『富奥郷土史』 1975年

(2) (社)石川県埋蔵文化財保存協会 『栗田遺跡発掘調査報告書』 1991年

母岩の打撃による剥離技法は下記図を参照した。



第59図 打製石斧素材剥離方法模式図

(3) 山本直人 「石川県における打製石斧について」 『石川考古学研究会々誌第28号』

石川考古学研究会 1985年

刀部の分類については下記のとおりである。

A類—中心線から刀部が線対称となるもの。

B類—中心線から線対称とならず、偏刀となるもの。

A・B類から更にa～d類の4類に細分する。

A a類—刀縁が丸いもの

B a類—偏刀で刀縁が丸いもの

A b類—刀縁がゆるく外湾するもの

B b類—偏刀で刀縁がゆるく外湾するもの

A c類—刀縁が直線的なもの

B c類—偏刀で刀縁が直線的なもの

A d類—刀縁がV字状を呈するもの

B d類—偏刀で刀縁がV字状を呈するもの

	a	b	c	d
A				
B				

第60図 打製石斧形態分類図

(4) 田嶋明人 「古代土器編年軸の設定」 『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年

第7章 粟田遺跡の花粉学的研究に基づく環境解析

藤 則雄（金沢大学地球科学研究室教授）

1. はじめに

石川郡野々市町粟田地域において、津田駒工業株式会社が工業用地の策定に当たり、本地区内の埋蔵文化財調査に係わって遺物包含層当時の環境、なかんずく古植生・古気候・古微地形の解明・復元が眉火の課題となるに及び、花粉学的視点からの研究が必要となり、野々市町教育委員会から藤則雄に依頼があった。

被依頼者藤は、平成2年度夏季に現地で考古学者立会いのもと、必要な分析試料の採集を実施し、金沢大学地球科学教室において花粉分析を行った。その後、平成3年1～3月において、これ等試料の花粉学的視点からの解析・復元を試みた。

ここにその結果の概要を報告する。

2. 試料

本依頼課題の解析・復元のために平成2年7月24日に、野々市町粟田遺跡において試料9点を採集した。

花粉分析のために供用された試料の層準、地層の特徴等は第63～65図のとおりである。

採集試料9点の内訳を見ると、Profile I からは6点、Profile II からは1点、Profile III からは2点である。そして、Profile I については、考古学担当者によると、第63図に示すように、土層の堆積状態及び包含される考古遺物の観点から縄文晩期の砂礫層を基盤として、その上位に、シルト～粘土～土を主とする遺物包含層が累積し、これら上位層は土質的に5層に細分される。現地表からの深度約75cm～100～150cmに埋積されている暗黒色～暗黒褐色土層は、奈良～平安時代の遺物を包含している。

以上の様に本地区での土層断面のうち遺物の包含によって時代が特定されるのは前述の縄文晩期と奈良～平安期の2層準のみであるが、最上位の水田耕土は、勿論、最近における耕土であるので、一応現在とすれば、これ等の土層は3つの時代の間ということ以外の推定はできえない。

各採集試料の採集層準（土層の種類と地表からの深度）は次に訳すとおりである。

Profile III からの試料

Sample No.1	深度 94cm	縄文晩期礫層中の土	
Sample No.2	深度 95cm	奈良～平安期直後（?）	暗青灰色土層

Profile I からの試料

Sample No.3	深度 10cm	現水田耕土	
Sample No.4	深度 30cm	奈良～平安期後～現在以前	暗灰色土層
Sample No.5	深度 50cm	奈良～平安期直後（?）	暗青灰色土層
Sample No.6	深度 87cm	奈良～平安期	暗黒色土層
Sample No.7	深度160cm	縄文晩期後～奈良～平安期前	褐色シルト質粘土層
Sample No.8	深度165cm	基盤層	含シルト薄層砂礫層

Profile II からの試料

Sample No.9	深度164cm		褐色シルト質砂層
-------------	---------	--	----------

3. 花粉分析

I 花粉分析の処理方法

花粉分析のために金沢大学地球科学教室において開封し、汚染されていない試料の内部より10gを選別採取して、次のような機械的処理と薬品処理を行った。

- (1) 500cc三角フラスコ中に蒸留水100ccとともに試料約10gを入れる。
- (2) 試料がある程度粉碎された後、10%NaOH溶液を50cc加え、上述の振盪機にて約60分間連続振盪、その後、約2日間放置。
- (3) 溶液を1,000ccビーカーに移した後、500～800ccの蒸留水を加えて、初めの2日間は12時間、次の2日間は6時間、そして、次の3日間は4時間、それぞれ放置した後に傾斜法にて上澄液を流し、更に水を加えて溶液を中和させる。
- (4) ポリエチレン・ビーカーに移した後、溶液から可能な限り水を除いて、約50%のHFを試料の約2～3倍の量加え、約6時間放置。その後、傾斜法による水洗にて試料を中和させる。
- (5) 遠心分離器用管に溶液を入れて試料だけにする。(器を使用)
time: ゆっくりと50回。
- (6) 試料に氷醋酸を加え、沸騰するまで加熱した後常温になるまで放置し、その後溶液を除去。
- (7) 試料に無水醋酸を加えよく攪拌した後、無水醋酸の9分の1量の濃硫酸を加えて約60分間放置して、混合溶液を除去。
- (8) 氷醋酸を加えよく攪拌後加熱。液が常温になる迄放置。液を除去し水を加え、遠沈管で2回水洗(40回回転)
- (9) 時計皿法などによって花粉・孢子以外の雑物を可能な限り除去。遠心分離用管1本にまとめる。

処理後の試料はグリセリンとともに小型ガラス管にて保存し、検鏡時に小型スポイトにて攪拌された試料液から1滴取り出して、プレパラートを作成し、Leitz透過ノマルスキー式微分干渉顕微鏡で無作為的に同定。木本類花粉の同定総数が1,000個に達するまで鑑定。

これ等木本類花粉間の百分率、及び草本類を含めた花粉間の百分率をそれぞれ算定し、これ等花粉群集の構成状態を花粉ダイヤグラムに図示した。

II 分析結果と解析の要約

① Sample No.1: 深度94cm 縄文晩期礫層

本試料の花粉構成は、Pinus Diploxylon型(33%) - Cryptomeria (21%) - Fagus crenata (7%) - Lepidobalanus (7%) によって代表され、これらに次いで、Alnus (5%)、Salix (4%)、Tilia (4%)、Gramineae small型(3%) 及びOther spores (3%) が含まれている。花粉・孢子の保存状態は決してよくない。

総じて、飛翔性のPinus及びCryptomeriaと混交して湿地性のAlnusとSalixが高率包含されている。特に、冷温帯系気候の代表的樹種であるCryptomeria、Ulmus、Fagus-crenata型が含まれていることから、当時の気候がやや冷涼であったと推定される。

② Sample No.2: 深度95cm 奈良～平安期直後(?)、暗青灰色土層

本試料の花粉組成は、Pinus Diploxylon型(35%) - Cryptomeria (22%) - Salix (11%) - Alnus (9%) - Lepidobalanus (9%) - Gramineae large型(5%) によって代表され、これらの他に、

Fagus crenata型が3%含まれている。

総じて、飛翔性のPinusとCryptomeriaに混交して、湿地性のSalixとAlnusが高率である点では、Sample No.1に酷似している。

㉓ Sample No.3：深度10cm 現水田耕土

本試料の花粉構成は、Gramineae large型 (Cfr. Oryzasativa、63%) - Pinus Diploxylon型 (8%) - Lepidobalanus (7%) - Cryptomeria (5%) - Salix (5%) - Gramineae small型 (5%) によって示される花粉組成である。

㉔ Sample No.4：深度30cm 奈良～平安期後～現在以前、暗灰色土層

本試料の花粉分析は、Pinus Diploxylon型 (24%) - Gramineae large型 (18%) - Gramineae small型 (12%) - Cryptomeria (11%) - Lepidobalanus (10%) - Salix (9%) によって代表される花粉組成である。花粉の種属数が多いが、高率な種属はない。

総じて、湿地性植物のCryptomeria、Salixなど併せて約20%で、飛翔性の植物は他の層準に比較して低率である。

㉕ Sample No.5：深度50cm 奈良～平安期直後(?)、暗青灰色土層

本試料の花粉構成は、Pinus Diploxylon型 (32%) - Cryptomeria (15%) - Salix (9%) - Lepidobalanus (7%) - Gramineae large型 (6%) - Alnus (5%) - Gramineae small型 (4%) によって示される。この花粉組成はSample No.2に酷似した花粉組成である。

㉖ Sample No.6：深度87cm 奈良～平安期、暗黒色土層

本試料の花粉構成は、Pinus Diploxylon (26%) - Cryptomeria (22%) - Gramineae small型 (16%) - Lepidobalanus (11%) - Alnus (11%) - Zelkova (6%) - Salix (6%) によって代表される。

本試料でも、Cryptomeria、Alnus、及びSalixなどの湿地性植物が多く含まれており、含まれている花粉の種属数も多い。Gramineae large型は約5%と僅少であるが、この中にはOryza sativaの花粉も含まれている可能性がある。

総じて含まれている花粉の種属数多いこと、なかんずく、湿地性の木本類の他に草本性、特に水生の草本類が低率ながら含まれていることから総合的に判断すると、扇状地上で時として若干低湿な環境下にあったような条件が推定される。

㉗ Sample No.7：深度160cm 縄文晩期後～奈良～平安期前、褐色シルト質粘土層

本試料の花粉組成は、Pinus Diploxylon型 (28%) - Cryptomeria (23%) - Gramineae small型 (15%) - Alnus (13%) - Salix (9%) によって代表されるような花粉植生である。

総じて、Sample No.6に酷似の環境下での堆積物と推定されるが、若干ながらAbies 3%、Betula 2%、Ulmus 5%、及びFagus crenata 6%のように比較的冷涼な気候条件下に生育している植物が含まれていることから判断して、冷涼な気候条件であったと推定される。

㉘ Sample No.8：深度165cm 基盤層、含シルト薄層砂礫層

本試料の花粉組成は、Pinus Diploxylon型 (32%) - Cryptomeria (19%) - Alnus (17%) - Salix (15%) で代表される。

㉙ Sample No.9：深度164cm 褐色シルト質砂層

本試料の花粉組成は、Gramineae small型 (43%) - Pinus Diploxylon型 (36%) - Pleuricellae sporites (27%) で代表される。含まれている花粉・胞子の種属数も少なく、飛翔性の花粉と風化地に多い胞子が高率である。

総じて、本試料堆積当時においては周辺に植物は余り繁茂していない。むしろ裸地性またはこれに順ずるような現在の河床に似た環境条件下にあったものと推定される。

4. 古環境総括

前項で記述した各試料の分析結果を層単位で総括すると、次のようにまとめることができる。

① 基盤：含シルト薄層砂礫－縄文晩期

砂礫に富んだ部分からのシルト層では、Pinus Diploxyylon型の花粉やPleuricellae sporites型胞子が高率で、裸地的環境を示唆しているが、比較的シルト質砂～シルト質土の厚い層準は、Pinus Diploxyylon型（アカマツ）花粉の他にCryptomeria、Alnus、Salixのような湿地－水辺を示唆するような花粉がやや多く含まれている。従って、総じて手取川の支流が放射状に流れている扇状地の小凹部周辺の裸地～貧被植物地が推定される。また、気候的には若干冷涼さみと思われる。

② 褐色シルト質砂～シルト質土－縄文晩期後～奈良期前

Pinus Diploxyylon型を主体とするも、CryptomeriaやGramineaeを含んでいること、及びやや湿地性の所に生育する小木類が含まれていることから、扇状地的地勢は前の時代から引き続いているものの、時代の経過と共にAlnusやSalixを含む小木・草本を主とする植物が繁茂するようになったと推定される。

③ 暗黒褐色土層－奈良～平安期

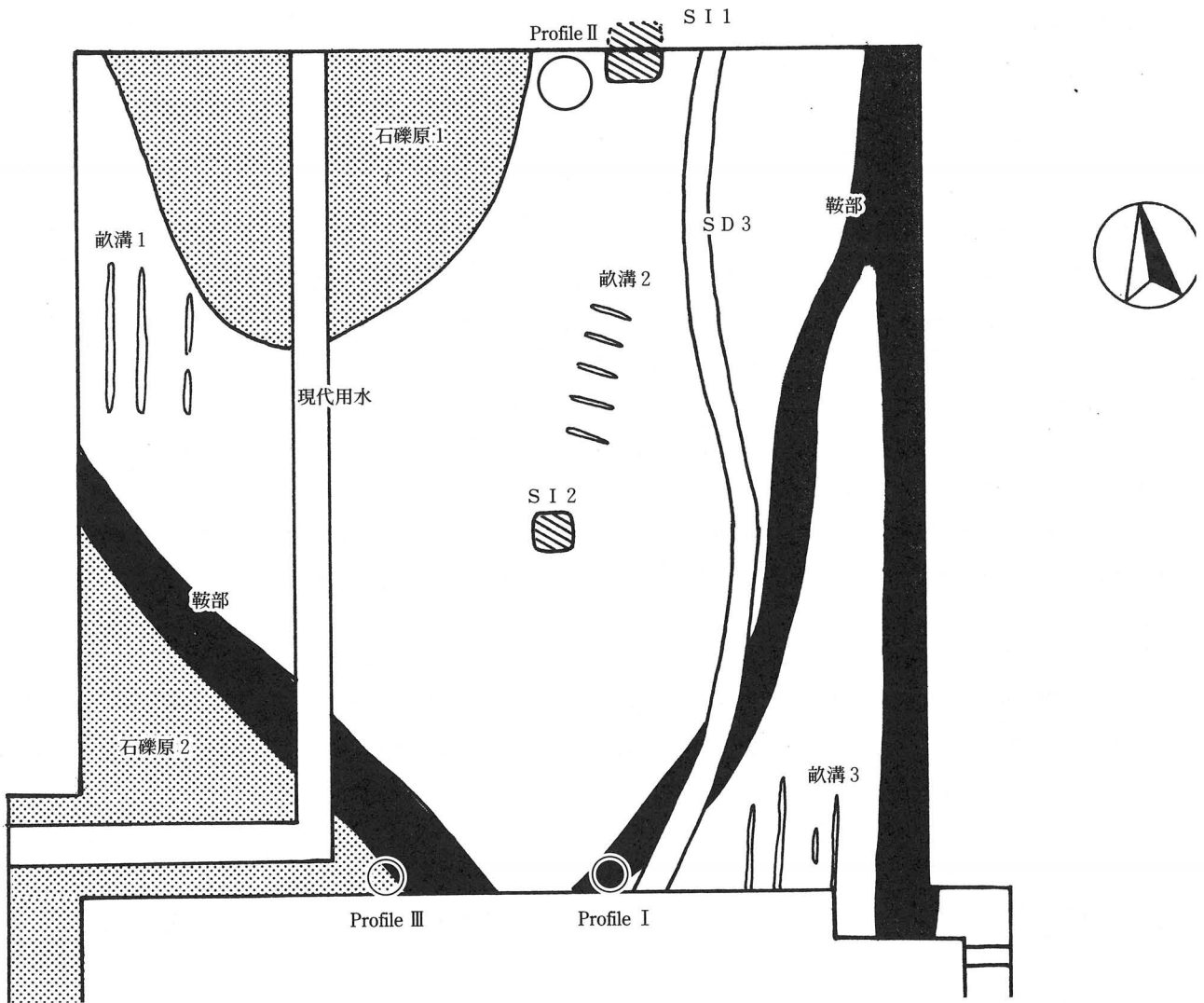
本層準の土層は、Pinus Diploxyylon型とCryptomeriaを主とするが、植生的には、Salix、Alnusを主とするタブノキ群集のうちの低湿地植生で、他にLepidobalanusやGraminea small型が生育していた。周辺にイネOryza sativaがあったことはGraminea large型の存在によって推定することが可能である。黒土層が厚いが、その割には花粉の保存がよくないことから、離水域での堆積を主とした土層と推定される。

④ 暗青灰色土層－奈良～平安期直後

タブノキ群集に属する植生で、Pinus Diploxyylon型を主とする花粉組成になっているが、Pinus Diploxyylonが飛翔性花粉であるため、SalixやAlnusを主体とし、Graminea等の草本類が扇状地に繁茂するような植生であったと推定される。

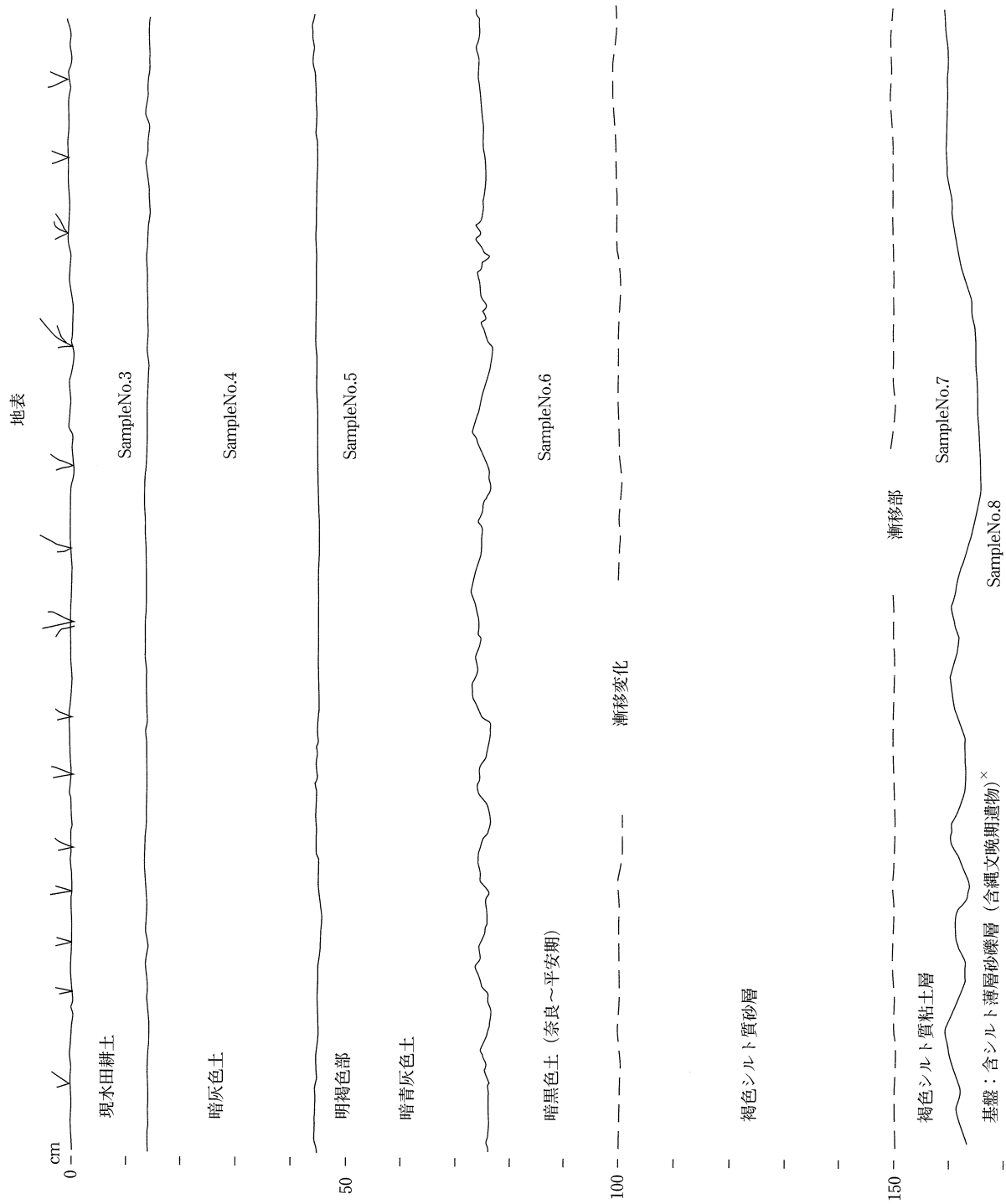
⑤ 暗灰色土層－奈良～平安期後～現在以前

タブノキ群集に属する植生ではあるが、前の時代同様に扇状地上には手取川支流よりの小分流が、遺跡周辺に流れ、その周辺一帯にはSalixやAlnusを主とし、CryptomeriaやLepidobalanusが散在するような植生であった。当時の気候は温和で、現在と同じ程であり、稲作農耕が遺跡周辺にまでせまってきたと推定される。

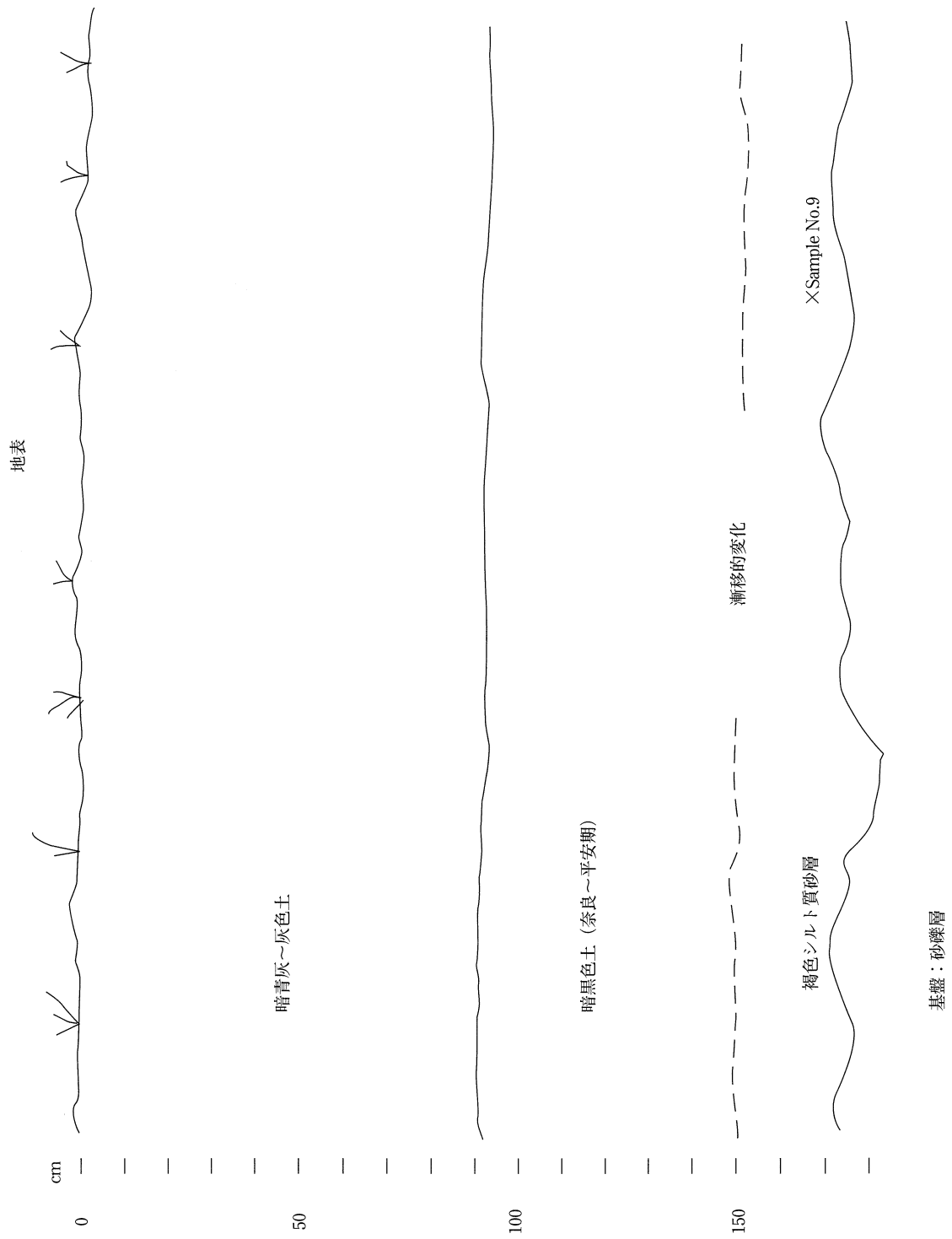


第62図 粟田遺跡花粉分析試料採取地 (A区)

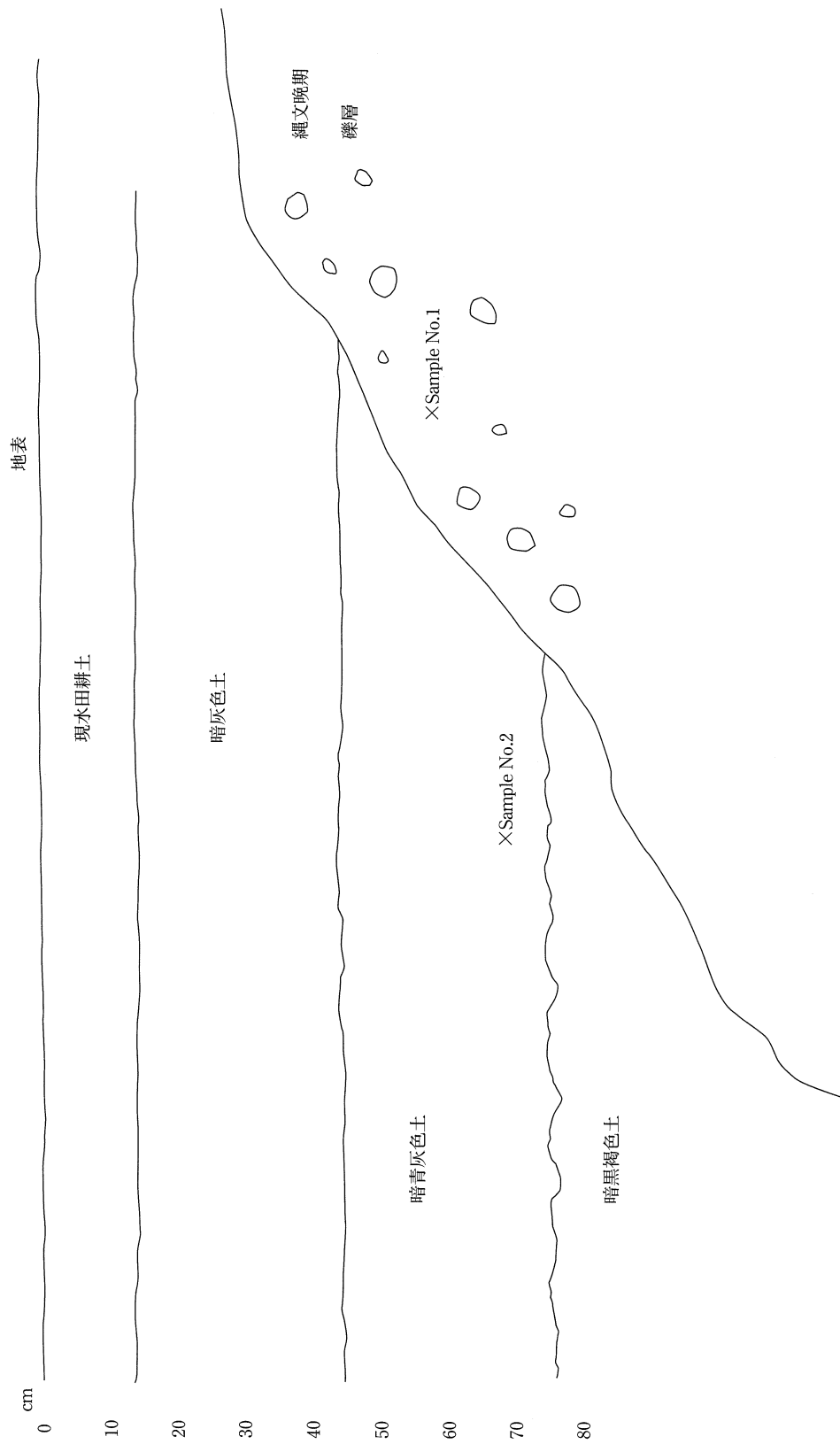
花粉孢子学名	資料 1	資料 2	資料 3	資料 4	資料 5	資料 6	資料 7	資料 8	資料 9
1 Abies	□	+		□	□	+	□		+
2 Tsuga	+			□			++		
3 Betula							□		
4 Ulmus	□				+	□	□		
5 Fagus crenate-t.	□	□		□	□	□	□		++
6 Fraxinus				□				□	
7 Cryptomeria	□	□	□	□	□	□	□	□	□
8 Castanea	□			+	+		+	+	
9 Zelkova				□	+	□	□	□	
10 Lepidobalanus	□	□	□	□	□	□	□	□	++
11 Carpinus	□	□	□	□	++	□	□	□	+
12 Pinus Diploxylon	□	□	□	□	□	□	□	□	□
13 Pterocarya	□	□		□	+				
14 Alnus	□	□	□	□	□	□	□	□	++
15 Acer				+			□		
16 Corylus				+		□			
17 Salix	□	□	□	□	□	□	□	□	++
18 Populus				+	+	+			
19 Ericaceae	+	□	□	□	+	□	+	++	
20 Juglans	+	□	□	□	□	□	++	++	
21 Machilus	□	□	□	□	□	□	□	□	
22 Tilia	□		□	□		□	□		
23 Cyclobalanopsis	□	□		□	□	□	□	+	
24 Castanopsis				□		□	□	□	
25 Cinnamomum		□	□	+	+	+	+	+	
26 Gramineae(S.)	□		□	□	□	□	□	□	□
27 Gramineae(L.)	□	□	□	□	□	□	□	□	□
28 Cyperaceae	+	+	□	+	□	□	+	++	++
29 Carduoidea	□	++		□	++	□	+	++	
30 Cichorioidea	+	+		□	+	+	+	+	+
31 Artemisia	□	□	□	□	□	□	□	+	
32 Liliaceae		+		+		+	+	++	
33 Persicaria	□	+		□	+	+	+	□	
34 Chenopodium		+				□			
35 Orchidaceae	+			+		□	+		
36 Nymphaeaceae	+	+		□		+	++	++	
37 Potamogeton		+		+		□			
38 Polypodium		+				□	+		
39 Lycopodium				□		+	+	+	
40 Osmunda				□		□			
41 Monoporisporites	□	□		□	□	□			□
42 Dicellaesporites	□	□		□	□	□	+		□
43 Mullicellaesporites		+				□	□	□	□
44 Pleuricellaesporites		□		□	□	+	+	□	□
45 Other spores	□			++	□	++	+	++	++



第63図 profile I 断面模式図



第64図 profile II 断面模式図



第65図 profile III 断面模式図

観察表 (土器・陶磁器)

報告書番号	実測番号	出土地点	器種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他 (cm)	色調	胎土	焼成	調整	産地	時期	備考
1	122	A区 S11	甕	17.8		13.3		内外 浅黄橙 浅黄橙	0.5ミリ位、多く、 2ミリ位を少し 含む	良	内 ヨコナデ ハケ 外 ヨコナデ ハケ ケズリ後ナデ(?)		8c中葉	
2	131	A区 S11	甕	28		2.2		内外 橙色 橙色	1ミリ以下の砂 粒含む	良	内外 ヨコナデ			
3	88	A区 S11	製塩土器					内外 淡黄橙色 淡黄橙色	1ミリ程度の砂 粒含む	良	内外 手づくね	能登?		
4	102	A区 S11	埴	35.5		9		内外 浅黄橙 浅黄橙	2~3ミリ位の粗 砂粒を多く含む	良	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ ハケ ケズリ		8c後	
5	14	A区 S12	坏	12.8	8.4			内外 灰白 灰白	密	良	内外 ヨコナデ	辰口	9c前	転用硯
6	16	A区 S12	坏		8.6			内外 黄灰 黄灰	密 砂粒少し含 む	良	内外 ヨコナデ		9c前	褐色粘質土
7	13	A区 S12	甕	15.5				内外 褐灰 浅黄橙	密 砂粒少し含 む	良	内外 ヨコナデ			
8	118	B-1区 S13	甕	11.4				内外 橙 にぶい赤褐	焼土塊あり 砂粒少し含む	良	内 ヨコナデ カキ目 外 ヨコナデ		9c	
9	117	B-1区 S13	甕	14.3				内外 浅黄橙 浅黄橙	焼土塊あり 砂粒含む	良	内 ヨコナデ カキ目 外 ヨコナデ		9c	
10	15	B-1区 S14	坏		7.8			内外 灰 灰	密	良	内外 ヨコナデ		8c後	褐色粘質土
11	130	B-1区 S14	甕	27		(3.6)		内外 にぶい褐色 にぶい褐色	1ミリ程度の砂 粒含む	良	内 ヨコナデ カキ目 外 ヨコナデ		8c後	カマド内
12	129	B-1区 S14	甕	32		(4)		内外 にぶい褐色 にぶい褐色	3ミリ程度の砂 粒含む	良	内 ヨコナデ カキ目 外 ヨコナデ		8c後	
13	134	B-1区 S14	甕					内外 浅黄橙 浅黄橙	0.5~1ミリ位の 砂粒を少し含む	良	内外 ハケ後カキ目		8c前	カマド内
14	83	B-3区 S15	有台坏	14.4	10.3	4.6		内外 灰色 灰色	1ミリ以下の白 色粒含む なめ らか	良	内外 ヨコナデ	末	8c後	2つに割れた状 態で出土
15	115	B-3区 S16	坏	14.4	11.9	2.9		内外 灰白 灰白	砂粒少し含む	良	内外 ヨコナデ		8c後	
16	103	B-3区 S17	甕	21		(7.7)		内外 浅黄橙 浅黄橙	1ミリ程度の砂 粒含む	良	内 ヨコナデ ハケ後 カキ目 外 ヨコナデ カキ目			
17	107	B-3区 S17	甕	22.8		3.2		内外 にぶい黄橙 にぶい黄橙	2ミリ以下の砂 粒含む	良	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ ハケ		8c前	
18	18	B-3区 S17	甕	19		(2.3)		内外 浅黄橙色 浅黄橙色	1ミリ以下の砂 粒含む	良	内外 ヨコナデ			褐色粘質土
19	139	B-3区 S17	甕	12.8				内外 淡黄橙 淡黄橙	1ミリ前後の砂 粒を中くらい含 む	良	内 ヨコナデ ハケ 外 ヨコナデ カキ目 ナデ ハケ			
20	106	B-3区 S17	甕 底部		8	(5.9)		内外 橙色 にぶい褐色		良	内 ハケ		8c後	カマド内
21	121	B-3区 S17	埴	19	10.2	4.9		内外 赤 赤	1ミリ以下の砂 粒含む	良	内 ヨコナデ 外 ケズリ後ヨコナデ		8c前	内外面 赤彩
22	141	B-3区 S17	製塩土器	約15		(3.7)		内外 にぶい黄橙 にぶい黄橙	1ミリ以下の砂 粒含む	良	内 ハケ			
23	104	C区 S18	蓋	16		(1.2)		内外 灰色 青灰	0.5~1ミリ位の 砂粒を含む	良	内 ヨコナデ 外 ナデ ヨコナデ	辰口 or 小松	9c前	焼土塊付近
24	93	C区 S18	甕	27		6.9		内外 浅黄橙 浅黄橙	微砂粒を多く含 む	良	内外 ヨコナデ		9c末	
25	9	C区 S18	甕	21.3		(6.4)		内外 にぶい橙 淡黄	1ミリ以下の砂 粒多く含む	良	内外 ヨコナデ		9c後	
26	92	C区 S18	甕	22.2		(4.8)		内外 橙色 橙色	1ミリ前後の砂 粒を多く含む	良	内外 ヨコナデ		9c後	
27	132	C区 S18	甕	(20)		(3.5)		内外 淡黄色 淡黄色	砂粒の混入は あまり見られな い	良	内外 ヨコナデ		9c後	
28	91	C区 S18	甕	12.6		5.7		内外 黄灰色 黄灰色	0.5~1ミリ位砂 粒を中くらい含 む	良	内外 ヨコナデ		9c後	
29	133	C区 S18	甕	13.8		(2.2)		内外 黄灰色 黄灰色	砂粒の混入は あまり見られな い	良	内外 ヨコナデ		9c後	
30	90	C区 S18	底部		6.8	(2.4)		内外 にぶい黄橙 にぶい黄橙	砂粒の混入をあ まり含まない	良	内外 ヨコナデ		9c	回転系切り痕?
31	135	C区 S18	底部		6	(2.5)		内外 浅黄橙 にぶい褐色	1ミリ程度の砂 粒含む	良	内外 ヨコナデ		9c	静止系切り痕
32	89	C区 S18	有台埴					内外 浅黄橙 浅黄橙	海綿骨針を含む	良	内 ミガキ 外 ヨコナデ		9c後	内黒
33	114	C区 S18	有台埴	13	6.2	2.6		内外 赤灰 橙	密	良	内 ミガキ 外 ヨコナデ	末?	9c後	茶褐色粘質土
34	112	C区 S18	埴	37.2				内外 淡赤橙 にぶい橙	焼土塊含む 粘 土に砂粒混ざる	良	内 ヨコナデ カキ目 外 ヨコナデ ケズリ		9c後	
35	111	E区 S19	有台坏	12.6	9	4		内外 灰白色 灰色	0.5ミリ位の砂 粒を中くらい含 む	良	内外 ヨコナデ	辰口	8c後	黒色粘質土
36	109	E区 S19	甕	23.8		8.3		内外 淡黄色 淡黄色	1ミリ位の砂粒 を中くらい含む	良	内外 ヨコナデ		9c前	カマド内
37	110	E区 S19	甕	23.8		(3.6)		内外 浅黄橙 浅黄橙	1~2ミリ位の砂 粒を少し含む	良	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ カキ目			カマド内
38	136	E区 S19	甕	23		(2.8)		内外 にぶい黄橙 にぶい黄橙	1ミリ程度の砂 粒含む 焼土塊 含む	良	内外 ヨコナデ			黒色粘質土
39	87	E区 S19	埴	34.6		(13)		内外 淡橙色 淡橙色	0.5~1ミリ位の 砂粒を含む	良	内 ヨコナデ ハケ 外 ヨコナデ ハケ ケズリ		8c後	カマド煙道
40	127	B-1区 SB1	坏	15.4		(4.5)		内外 灰色 灰色	微砂粒含む程度	良	内外 ヨコナデ			P-a
41	126	B-1区 SB1	蓋	14		1.2		内外 灰色 灰色	1ミリ以下の砂 粒含む	良	内外 ヨコナデ	小松	9c前	P-c
42	85	B-3区 SB4	坏	12	8	3.45		内外 灰色 灰色	2ミリ以下の砂 粒含む	良	内外 ヨコナデ	高松	8c後	P-e ヘラ記号
43	86	B-3区 SB5	壺	11		(6.6)		内外 灰色 橙色	3ミリ以下の砂 粒含む	良	内外 ヨコナデ	高松		P-f

報告書番号	実測番号	出土地点	器種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他 (cm)	色調	胎土	焼成	調整	産地	時期	備考
44	108	B-3区SB6	底部		6.2	3.2		内 外 黄橙 外 黄橙	2ミリ以下の砂粒含む	良	内 ハケ		8c後	P-g
45	84	B-3区SB7	蓋	13.2		(2.05)		内 外 灰色 外 灰色	細かい白色粒含む	良	内 ヨコナデ 外 ケズリ ヨコナデ	未	8c後	P-h
46	31	A区 SK1	坏	13.4				内 外 灰色 内 灰色	微砂粒含む程度	良	内外 ヨコナデ			
47	119	B-3区SK2	甕	18.1				内 外 橙 外 浅黄橙	赤土塊あり 砂粒少し含む	良	内外 ヨコナデ			
48	116	B-3区SK3	坏	12.5				内 外 黄灰 外 黄灰	密	良	内外 ヨコナデ	未	8c末	
49	113	B-3区SK3	蓋	17.3				内 外 灰色 外 灰色	密	良	内外 ヨコナデ	未?	8c後	褐色粘質土 第9図参照
50	120	B-3区SK4	坏	13.9				内 外 灰白 外 灰白	密	良	内外 ヨコナデ			
51	34	A区 P1	底部		9.1			内 外 淡黄橙 外 淡黄橙	1ミリ位の砂粒を少し含む	良	内 ヨコナデ 外 ケズリ		8c後	
52	33	A区 P2	坑 底部		9.8	(1.5)		内 外 淡黄色 外 淡黄色	砂粒の混入はあまり見られない	良	内外 ミガキ		8c後	内外面 赤彩 第9図参照
53	32	A区 P4	甕	20.8		(7.4)		内 外 浅黄橙 外 浅黄橙	砂粒の混入はあまり見られない	良	内 ヨコナデ カキ目 外 ヨコナデ カキ目		9c前	
54	128	B-1区 P5	高坏?	20		(1.8)		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ以下の白色粒含む	良	内外 ヨコナデ	小松	8c後	
55	19	A区 SD2	有台坏	15	7.1	6.3		内 外 灰色 外 灰色	大粒の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	高松	9c後	墨書
56	22	A区 SD2	坏	14.8		(6.3)		内 外 灰色 外 灰色	大粒の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	高松	9c後	
57	24	A区 SD2	坏	11		(3.1)		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ程度の白色粒含む	良	内外 ヨコナデ	高松	9c後	
58	21	A区 SD2	坏	12.6	7	3.65		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ程度の白色粒含む	良	内外 ヨコナデ	高松	9c後	
59	20	A区 SD2	坏	12.2	7	3		内 外 灰色 外 灰色	大粒の砂粒少し含む	良	内外 ヨコナデ	高松	9c後	墨書
60	23	A区 SD2	蓋	17.4		1.2		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ程度の白色粒含む	良	内外 ヨコナデ	辰口?	8c末	
61	65	A区 SD3	坏	16.8		(4.9)		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ			褐色砂土 グリッドB-3
62	40	A区 SD3	有台坏		7.6	3.1		内 外 灰色 外 灰色	微砂粒含む程度なめらか	良	内外 ヨコナデ			褐色砂土 グリッドC-3
63	45	A区 SD3	有台坏		8	2.3		内 外 灰色 外 灰色	1~2ミリ程度の白色粒含む	良	内外 ヨコナデ			グリッドB-3
64	66	A区 SD3	坏	12.4	9.6	2.7		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ程度の白色粒含む	良	内外 ヨコナデ			グリッドA-3
65	48	A区 SD3	坏		9.2	2.4		内 外 灰色 外 灰色	1ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ			
66	42	A区 SD3	坏		9	(1.4)		内 外 灰色 外 灰色	細かい白色粒含む 黒色粒の吹き出しあり	良	内外 ヨコナデ			グリッドC-3
67	82	A区 SD3	坏		9.4			内 外 灰白 外 灰白	砂粒少し含む	良	摩耗不明			
68	52	A区 SD3	蓋	12		2.7		内 外 灰白 外 灰白	密	良	内外 ヨコナデ			
69	41	A区 SD3	蓋	12		(1.95)		内 外 灰色 外 灰色	細かい白色粒含む	良	内外 ヨコナデ			グリッドC-3
70	98	B-3区SD3	有台坏		9	(1.3)		内 外 灰白色 外 灰白色	微砂粒を少量含む	やや不良	内 ヨコナデ 平滑 外 ヨコナデ			
71	75	B-3区SD3	有台坏		7.8	(2)		内 外 灰色 外 灰色	砂粒少ない	良	貼り付高台			貼り付高台
72	50	A区 SD3	高坏					内 外 灰白 外 灰白	砂粒少ない	やや不良	摩耗不明			橙褐砂礫土
73	57	B-2区SD3	瓶 肩部			2.3	肩部最大19.2	内 外 灰色 外 灰色	1ミリ以下の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ			灰褐砂質土
74	71	A区 SD3	瓶 底部		9.2	(4.4)		内 外 灰白色 外 灰色	微砂粒を中くらい含む	良	内外 ヨコナデ			
75	123	B-2区SD3	瓶 底部		10.5	(8.1)		内 外 灰色 外 灰色	砂粒ごくわずか	良	内外 ヨコナデ		近世以降	灰褐砂質土
76	43	A区 SD3	甕			(13.9)	胴部最大18.4	内 外 にぶい橙 外 にぶい橙	1ミリ程度の砂粒含む	良	内 カキメ タタキ 外 カキメ タタキ			グリッドB-3
77	77	A区 SD3	皿		4.9	(1.4)		内 外 オリーブ灰 外 灰赤	精良	良		唐津	17c前	褐色砂土
78	79	A区 SD3	皿		38			内 外 灰白 外 にぶい橙	砂粒少ない	良		唐津	17c前	
79	51	A区 SD3	碗		5.4			内 外 灰オリーブ 外 にぶい褐	密	良		肥前	17c	
80	67	A区 SD3	碗		4.8	(2)		素地 淡黄 釉 淡黄		良		肥前	18c初	グリッドB-2
81	69	A区 SD3	碗		3	5.2		素地 橙 釉 橙		良		肥前	18c前	グリッドB-2
82	53	A区 SD3	碗		4.4	(3.1)		内 外 明オリーブ灰 外 明オリーブ灰	精良	良	内・外面とも全体に約0.5ミリ厚さの釉 細かい貫入	肥前	18c	橙褐砂礫土
83	78	A区 SD3	土瓶		9.1			内 外 暗褐 外 明褐灰	密	良	内外 ヨコナデ		19c	
84	56	B-2区SD3	鉢	20.8		(4.7)		内 外 緑灰 外 緑灰	精良	良			19c	
85	140	A区 SD3	灰釉皿		6.8			内 外 オリーブ黄 外 淡黄	密	良	内外 ヨコナデ	瀬戸	15後~ 16前	グリッドB-3
86	54	A区 SD3	ミニチュア蓋		2.2	1.3		内 外 灰白色 外 灰白色						褐色砂土
87	76	A区 SD3	碗		10.6	3.5		内 外 白色 外 白色	精良	良		肥前	17c後~ 17c末	口縁端部に黄褐色のすじ入る
88	72	A区 SD3	碗		7.3	(5.7)		内 外 白色 外 白色				肥前	17c末	
89	64	A区 SD3	碗		3.6	(3.4)		内 外 白色 外 白色	精良	良		瀬戸 美濃	19c中	灰褐砂質土

報告書番号	実測番号	出土地点	器種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他 (cm)	色調	胎土	焼成	調整	産地	時期	備考
90	63	A区 S D 3	碗		3.5	2.5	高台 0.4	内外 白色 白色	精良	良			近代	橙褐砂礫土
91	73	A区 S D 3	碗	6.8		2.9		内外 白色 白色	精良	良				染付模様 紺色
92	68	A区 S D 3	白磁紅皿	3.9	1.6	1.45		素地 淡黄 釉 乳白色		良		肥前		B-2
93	55	A区 S D 3	仏飯器									肥前		橙褐砂礫土
94	70	A区 S D 3	蓋	12.8		(4.6)		内外 白色 白色	精良	良		肥前		模様 青灰色の濃淡
95	44	A区 S D 3	蓋	9.6c	3.4	2.6		素地 白色 釉 白色	緻密	良		B-3 中世溝粘土層	近代	灰褐粘質土
96	74	A区 S D 3	仏飯器	8.4		(2.9)		内外 灰白 灰白	精良	良		肥前	18c末	灰褐砂質土
97	81	A区 S D 3	皿	11.2				内外 灰、灰白 灰、灰白	密	良		肥前 波佐見	17c末～18c前	
98	49	A区 S D 3	皿		4.2	(2.6)		内外 白色 白色		良		肥前 波佐見	17c末～18c前	橙褐砂礫土
99	46	A区 S D 3	鉢	13		(3.5)		素地 白色 釉 白色	緻密	良			近代	橙褐砂礫土 染付青色
99	80	A区 S D 3	鉢 (底部)		6.9			内外 白色 白色	密	良			近代	橙褐砂礫土
100	124	B-3区 S D 4	甕	22.6				内外 灰色 灰色	密	良	内外 ヨコナデ	末	8c後	
101	125	B-1区 S D 5	坏		7.2			内外 灰白 灰白	密	良	摩耗不明	辰口	8c後	
102	C-1	A区 包含層	甕	18.6	6.8			内外 灰黄橙 浅黄橙	0.5～3ミリ大の砂粒含む	良	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ ハケ		古墳前	
103	C-5	A区 包含層	甕	20		(3.6)		内外 浅黄橙 浅黄橙	1ミリ程度の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ		古墳前	
104	C-3	A区 包含層	甕	14.4		(3.6)		内外 灰黄橙 灰黄橙	1ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ		古墳前	
105	C-2	A区 包含層	甕	14.6		(2.7)		内外 灰黄橙 灰黄橙	0.5ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ		古墳前	
106	C-4	A区 包含層	甕	12.2		5		内外 灰黄橙 灰黄橙	1ミリ以下の砂粒含む	良	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ		古墳前	
107	94	A区 包含層	有台坏	10.9	7.4	3.4		内外 灰白 灰白	赤色酸化粒の黒い吹き出しが見られる	良	外 ヨコナデ	辰口 or 小松	8c中葉	
108	11	A区 包含層	有台坏		6.4	(3.2)		内外 灰白 灰色	細かい砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ			
109	97	A区 包含層	有台坏		9.8	(1.4)		内外 黄灰 黄灰	0.5ミリ位の砂粒を多く混入している	良	内・外 ヨコナデ 外底 雑なヨコナデ	辰口 or 小松	8c中	
110	61	A区 包含層	坏	12.6	9.4	3.4		内外 灰色 灰色	2ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ			
111	37	A区 包含層	坏	13	9.1	2.6		内外 灰色 灰色	粒ぞろいの砂粒と中ぐらい含む	良	内・外 ヨコナデ 外底 ヘラ切り	辰口	9c前	グリッドC-4
112	138	A区 包含層	坏	12	7	3		内外 灰黄褐 灰黄褐	微砂粒含む程度	不良	内外 ヨコナデ		9c前	土師器焼成
113	62	A区 包含層	坏		8.8	(2.1)		内外 灰色 灰色	2ミリ以下の砂粒わずかに含む	良	内外 ヨコナデ			
114	8	A区 包含層	坏		8	(2)		内外 灰色 灰色	1ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ	辰口	8c後	グリッドF-7 墨書
115	35	A区 包含層	坏		8.8	(2.2)		内外 灰白 灰白	2.5ミリ位の砂粒を少し含む	良	内外 ヨコナデ	高松	8c	グリッドD-4
116	12	A区 包含層	盤	17.8	14.2	2.5		内外 灰黄 灰黄	砂粒ほとんど見られず	良	内外 ヨコナデ	辰口	9c前	グリッドE-7
117	36	A区 包含層	碗	16.8	8.2	4.8		内外 淡黄橙 淡黄橙	0.5ミリ位の砂粒を少し含む	良	内外 ミガキ		8c中	内外面 赤彩
118	38	A区 包含層	甕					内外 淡黄 淡黄	海綿骨針を含む	良	内外 カキメ タタキ		9c	グリッドC-4
119	10	A区 包含層	瓶			(11.9)		内外 灰黄 灰オリーブ	1ミリ以下の砂粒多く含む 黒色粒も含む	良	外 ヨコナデ	南加賀	8c前	グリッドE-7
120	101	B-3区 包含層	横瓶				胴部 24.2	内外 灰色 灰色	1ミリ以下の砂粒わずかに含む	良	内面 青海波 外面 タタキのあとカキメ	辰口 or 小松	8c前	グリッドB-3
121	17	B-3区 包含層	有台坏		8.8	1.5		内外 灰色 灰色	1ミリ以下の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	南加賀	8c中葉	
122	95	B-3区 包含層	有台坏		8.3	(1.4)		内外 黄灰 黄灰	赤色酸化粒の融けた黒い粒が見られた	良	内外 ヨコナデ 外底 ヨコナデ ナデ	末	8c後	転用硯
123	96	B-3区 包含層	坏	12.6	8.6	3.9		内外 灰白 灰白	砂粒の混入はあまり見られない	不良	内外 ヨコナデ 全体的に雑な調整	辰口	8c後	
124	100	B-3区 包含層	蓋	17		(2)		内外 灰色 灰色	0.5ミリ位の砂粒をわずかに含む	良	内 ヨコナデ 外 ヨコナデ ナデ	末	8c後	
125	105	B-3区 包含層	底部		6			内外 橙色 橙色	2ミリ以下の砂粒含む	良	内外 ハケ		8c初	
126	99	B-3区 包含層	底部		8	(2.3)		内外 橙色 橙色	1～2ミリ位の砂粒を含む	良	内 ヨコナデ 外 カキ目		8c後	グリッドB-3
127	2	C区 包含層	有台坏		8.6	(2.9)		内外 灰色 灰色	1ミリ以下の細かい砂粒わずかに含む	良	内外 ヨコナデ	末	8c後	
128	29	C区 包含層	有台坏		7.4	3.2		内外 灰黄 灰黄	1ミリ以下の砂粒わずかに含む	不良	内外 ヨコナデ		8c後	
129	7	C区 包含層	有台坏		7.6	(2.6)		内外 灰色 灰色	細かい砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ	高松	8c後	
130	137	C区 包含層	有台坏				高台 6.5	内外 灰色 灰色	1ミリ以下の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	辰口		
131	1	C区 包含層	坏	12.4	10.2	3.4		内外 灰色 灰色	2ミリ以下の砂粒少量含む	良	内外 ヨコナデ	高松	8c後	
132	3	C区 包含層	坏	11.8	10.3	3.8		内外 灰白 灰白	微砂粒を少し含む	良	内外 ヨコナデ	辰口 or 小松	8c後	
133	25	C区 包含層	坏	12	7.6	3		内外 灰色 灰色	1ミリ以下の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	末	9c初	

報告書番号	実測番号	出土地点	器種類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	その他 (cm)	色調	胎土	焼成	調整	産地	時期	備考
134	26	C区包含層	坏			(1.1)		内外 灰黄 内外 灰黄	1ミリ以下の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	辰口	8 c 後	
135	28	C区包含層	蓋	18		1.6		内外 灰色 内外 灰色	1ミリ程度の砂粒少し含む	良	内外 ヨコナデ	末	9 c 初	転用硯
136	27	C区包含層	蓋	12		(1.4)		内外 灰色 内外 灰色	1ミリ程度の砂粒含む	良	内外 ヨコナデ	辰口	9 c 初	
137	6	C区包含層	底部		5.6	(2.6)		内外 淡黄色 内外 淡黄色	海綿骨針少量含む	良	摩耗不明			四転糸切り痕
138	4	C区包含層	甕	20		(1.3)		内外 赤色 内外 赤色	0.5~1ミリ位の砂粒を中ぐらい含む	良	内・外 ヨコナデ		9 c 後	
139	30	C区包含層	碗		7	2.8		内外 灰黄 内外 灰黄	1ミリ以下の砂粒わずかに含む	良	内外 ミガキ			
140	5	C区包含層	瓦質鉢			(4.6)		内外 灰黄 内外 灰黄		良	内外 ヨコナデ		15後~16前	
141	59	A区表土	碗		4.4	(4.3)		内釉 赤褐 外釉 赤褐 素地 赤褐	精良	良		唐津	17 c 前	
142	58	A区表土	皿	8.4	4.4	(2)		内釉 オリーブ灰 外釉 オリーブ黄 素地 灰白	精良	良		肥前	17後~18前	
143	60	A区表土	碗		4.4	5.1		内 明オリーブ灰 外 明オリーブ灰 表地 灰色 素地 灰白色 釉 オリーブ黄	精良	良				釉はうすい
144	39	A区包含層	土瓶 or 塀		9	(1.8)			密					

() は残存する高さを表す

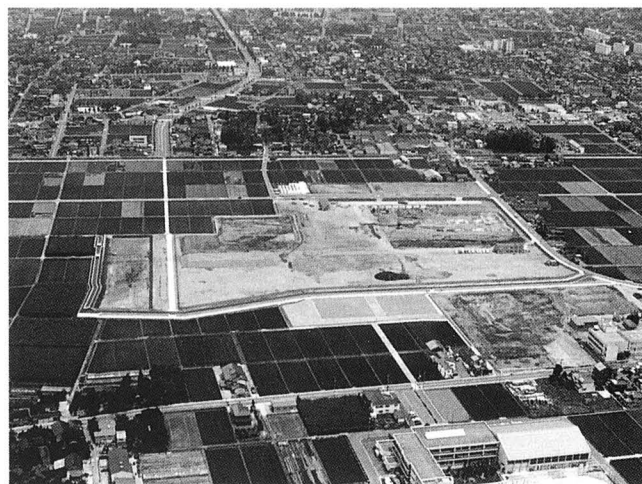
観察表 (石製品)

番号	実測番号	出土地点	器種類	法量				石質	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
1	No54	A区F-5	母岩	24.3	25.0	3.8	5600.0	火山礫凝灰岩	
2	特42	A区F-6	母岩	19.7	14.9	4.8	1678.5	安山岩	
3	特45	A区F-7	母岩	16.5	11.7	5.3	1697.4	火山礫凝灰岩	
4	特37	A区F-7	母岩	28.8	26.5	9.2		安山岩	
5	特 No36	A区E-6	母岩	22.9	22.5	9.0	4500.0	火山礫凝灰岩	
6	特 No47	A区E-6	母岩	22.3	15.1	9.8		凝灰岩	
7	特 No20	A区C-7	母岩	27.1	26.2	15.6	13600.0	火山礫凝灰岩	
8	特62	A区C-8	母岩	33.8	25.2	9.5	9000.0	凝灰岩	
9	特 No49	A区C-8	母岩	25.6	13.6	8.5	4800.0	火山礫凝灰岩	
10	No15	A区C-7	母岩	19.5	16.7	9.4	2820.0	火山礫凝灰岩	
11	特6	A区C-8	母岩	27.9	21.8	7.8	5000.0	火山礫凝灰岩	
12	No14	A区C-7	母岩	69.4	31.5	22.6	58500.0	火山礫凝灰岩	
13	特 No4	A区C-7	母岩	26.2	22.5	11.7		安山岩	
14	No41	B-3区	母岩	28.5	22.1	12.6	9000.0	火山礫凝灰岩	
15	No24	B-3区	母岩	23.0	19.8	8.4	4000.0	細粒砂岩	
16	No18	B-3区	母岩	22.9	9.9	9.8	2500.0	火山礫凝灰岩	
17	特 No61	B-3区	母岩	31.2	26.0	14.8	13500.0		
18	特 No15	C区	母岩	24.7	20.3	9.8	5000.0	火山礫凝灰岩	
19	No39	A区F-7	母岩	21.3	16.0	5.2	2229.9	安山岩	第9図参照
20	特 No5	A区F-7	母岩	30.7	19.0	11.5	7500.0	安山岩	第9図参照
21	No21	A区F-6	母岩	30.3	21.4	8.2	7400.0	凝灰岩	
22	No44	A区C-8	母岩	35.9	23.0	12.9	13200.0	火山礫凝灰岩?	
23	特40	A区C-8	母岩	23.9	14.1	6.8	3400.0	火山礫凝灰岩	43と接合
24	No16	A区C-7	母岩	23.1	17.2	8.2	3700.0	ヒン岩	
25	No19	A区C-8	母岩	27.8	21.3	15.1	10500.0		
26	特1	A区C-7	母岩	23.4	20.4	6.4	4200.0	火山礫凝灰岩	
27	特 No26	C区	母岩	28.4	27.5	14.9	14000.0	火山礫凝灰岩	
28	特 No16	B-3区	母岩	46.0	27.4	18.5	28500.0	凝灰岩	
29	No43	B-3区	母岩	20.2	15.8	5.1	1620.0	火山礫凝灰岩	
30	No17	排土	母岩	28.9	23.3	12.3	12000.0	安山岩	
31	特18	排土	母岩	21.9	21.6	9.9	4200.0	火山礫凝灰岩	
32	No14	排土	母岩	30.6	19.7	8.7	4500.0	凝灰岩	
33	No27	排土	母岩	37.5	25.4	16.0	15700.0	火山礫凝灰岩	
34	特 No38	排土	母岩	30.5	19.2	9.5	6000.0	火山礫凝灰岩	
35	No38	A区E-6	剥片	30.7	16.6	8.8	4300.0	火山礫凝灰岩	
36	特 No43	A区C-8	剥片	24.4	15.0	9.3	2411.0	凝灰岩	
37	特24	B-3区	剥片	17.1	5.6	3.9	461.5	火山礫凝灰岩	
38	特 No48	B-3区	剥片	12.5	17.5	7.3		火山礫凝灰岩	
39	特22	A区C-2	剥片	17.5	7.1	7.2	856.6	火山礫凝灰岩	
40	No39	A区C-7	剥片	22.8	9.7	7.8	1380.0	火山礫凝灰岩	
41	特59	A区C-8	剥片	18.3	8.0	9.5	1650.6	火山礫凝灰岩	
42	特23	A区C-8	剥片	16.7	13.0	6.5	1297.2	火山礫凝灰岩	
43	No55	A区C-8	剥片	15.4	9.0	5.4	631.9	火山礫凝灰岩	23と接合
44	特 No51	A区B-7	剥片	20.8	16.4	6.1	2156.0	安山岩	
45	No7	B-3区	剥片	20.2	16.8	5.2	700.0	安山岩	
46	特 No25	C区	剥片	19.0	10.1	8.0	1765.0	安山岩	
47	No12	排土	剥片	18.0	18.4	5.7	1840.4	安山岩	
48	特44	A区F-6	剥片	13.0	10.8	2.2	208.4	火山礫凝灰岩	
49	No56	A区F-7	剥片	9.5	10.4	2.5	228.4	凝灰岩	
50	No24	A区F-6	剥片	6.0	5.3	1.3	33.4	火山礫凝灰岩	
51	特57	A区F-7	剥片	5.7	3.9	2.4	25.6	火山礫凝灰岩	
52	No11	A区F-7	剥片	14.4	9.2	4.2	518.2	火山礫凝灰岩	
53	No30	A区E-5	剥片	8.2	6.6	1.6	66.1	火山礫凝灰岩	
54	No31	A区E-6	剥片	3.9	3.3	0.6	5.7	安山岩	
55	No26	A区E-6	剥片	3.0	2.0	6.0	2.9	安山岩	
56	No19	A区D-3	剥片	11.2	8.6	2.6	225.4	火山礫凝灰岩	
57	No58	A区D-7	剥片	9.2	8.5	1.7	151.0	安山岩	
58	No20	A区D-6	剥片	6.3	6.6	1.5	50.0	流紋岩	
59	No33	A区C-7	剥片	13.2	6.5	2.8	163.4	火山礫凝灰岩	
60	No32	A区C-7	剥片	10.6	6.9	2.2	122.4	凝灰岩	
61	No34	A区C-7	剥片	14.3	11.3	3.9	480.1	凝灰岩	

番号	実測番号	出土地点	器種類	法量				石質	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
62	No35	A区C-7	剥片	5.6	5.4	1.1	21.6	凝灰岩	
63	No36	A区C-8	剥片	6.5	4.0	0.7	21.4	凝灰岩	
64	No8	A区C-8	剥片	3.7	2.9	0.8	6.9		
65	No17	A区C-8	剥片	15.2	13.1	6.0	861.5	火山礫凝灰岩	
66	No29	A区C-7	剥片	10.2	6.0	1.9	124.8	火山礫凝灰岩	
67	No3	A区C-8	剥片	5.8	4.8	1.3	25.0	凝灰岩	
68	No41	A区B-7	剥片	20.9	12.8	4.5	1110.0	凝灰岩	
69	特50	A区C-7付近	剥片	12.1	5.8	2.7	224.5	火山礫凝灰岩	
70	No10	A区B-7	剥片	4.4	4.7	1.1	23.5	火山礫凝灰岩	
71	特3	A区B-7	剥片	10.0	12.5	5.0	566.8	凝灰岩	
72	No9	A区B-7	剥片	15.4	10.0	4.4	473.6		
73	特21	A区B-7	剥片	12.8	10.7	4.9	552.2	火山礫凝灰岩	
74	特8	A区B-7	剥片	20.3	13.9	3.3	704.8	安山岩	
75	No28	A区S D 3	剥片	15.6	7.5	2.7	243.1		
76	特53	A区S D 3	剥片	8.3	6.2	3.0	113.7	火山礫凝灰岩	
77	No33	B-3区S D 3	剥片	8.5	4.5	1.4	46.8	凝灰岩	
78	No37	B-1区S I 4	剥片	9.1	6.9	1.5	72.0	火山礫凝灰岩	カマド内
79	No27	E区	剥片	7.0	6.2	1.1	46.3	火山礫凝灰岩	
80	No23	B-3区	剥片	9.5	11.2	4.0	386.5	安山岩	
81	No24	B-3区	剥片	8.5	7.3	1.2	83.9	火山礫凝灰岩	
82	No25	B-3区	剥片	7.7	6.6	2.2	88.7	火山礫凝灰岩	
83	No13	B-3区	剥片	12.0	5.5	1.4	94.8	火山礫凝灰岩	
84	特 No28	B-3区	剥片	18.1	10.8	4.1	779.7	流紋岩	
85	特29	C区S I 8	剥片	15.6	12.2	2.7	500.6	火山礫凝灰岩	
86	No7	A区E-8	打製石斧	12.2	8.5	2.4	260.0	安山岩	
87	特5 2	A区C-8	打製石斧	13.3	8.8	2.2	291	火山礫凝灰岩	
88	No46	A区C-7	打製石斧	15.3	13.7	5.2	1197.1	安山岩	
89	No2	A区B-4	打製石斧	17.7	8.1	3.7	634.5	火山礫凝灰岩	
90	No35	A区D-6	打製石斧	6.6	8.4	2.3	13.1	火山礫凝灰岩	
91	No12	排土	打製石斧	6.6	7.5	1.2	180.0	凝灰岩	
92	No40	B-3区	打製石斧	12.4	7.1	3.4	313.6	火山礫凝灰岩	
93	No3	B-3区	打製石斧	17.2	9.5	4.0	699.0	火山礫凝灰岩	
94	No9	B-3区S D 3	打製石斧	13.3	15.1	2.3	420.0	火山礫凝灰岩	
95	特 No2	C区	打製石斧	18.8	9.7	3.6	664.8	火山礫凝灰岩	
96	No12	A区E-4	磨石	10.9	5.0	5.1	700.0	安山岩	
97	No1	A区B-4	磨製石斧	10.2	4.2	2.1	155.0	凝灰岩	
98	No10	A区S D 3	石鏟	3.0	1.8	0.7	3.8	輝石安山岩	
99	No11	A区S I 1	カマド袖石	12.6	11.8	8.5	1800.0	安山岩	
100	No13	B-1区S I 4	カマド袖石	18.3	12.5	8.0	2416.0	安山岩	
101	No45	E区S I 9	カマド袖石	22.0	12.2	7.1	2500.0	火山礫凝灰岩	
102	No46	E区S I 9	カマド袖石	19.8	11.3	9.3	2960.0	火山礫凝灰岩	
103	No22	B-3区S B 7	土台石	33.4	21.9	10.0	10000.0	凝灰岩	第26図柱穴 h
104	No47	A区S D 3	砥石	10.9	3.9	1.8	87.7		



調査区遠景（東南より）



調査区遠景（西より）



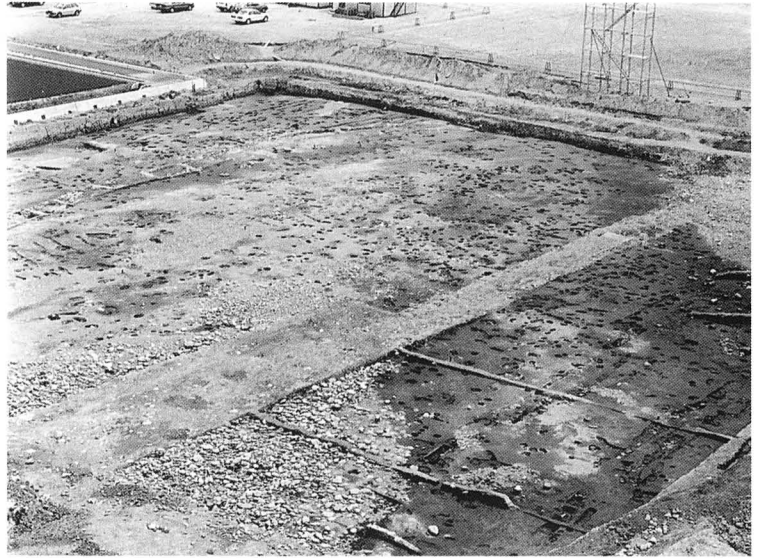
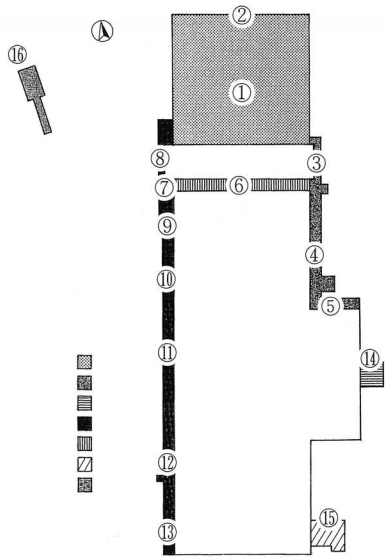
A区全景（南より）



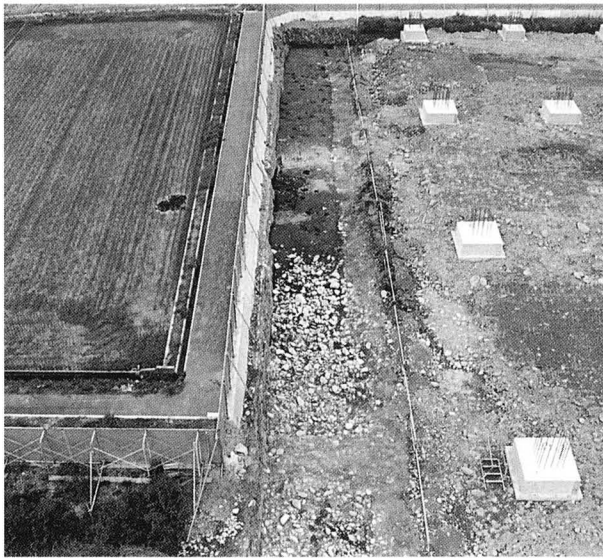
調査区遠景（北東より）



調査区遠景（北より）



① A区 (北西より)



② A区北端 (西より)



③ B-1区 (北より)



④ B-1区 (北より)



④ B-1区 (南より)

各調査区完掘 (上空)



⑤ B-1区 (東より)



⑥ B-2区 (西より)



⑦ B-2、B-3区 (西より)



⑧ B-3区 (北より)



⑨ B-3区 (北より)



⑩ B-3区 (北より)

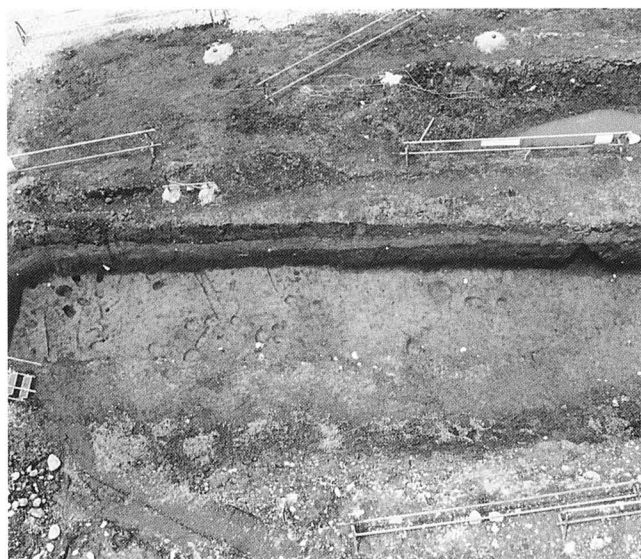
各調査区遠景



⑪ B-3区 (北より)



⑫ B-3区 (南より)



⑬ B-3区 (東より)



⑭ C区 (西より)



⑮ D区 (北より)



⑯ E区 (東南より)

各調査区遠景



① A区 (南より)



② A区北端 (西より)



③ B-1区 (北より)



④ B-1区 (北より)



⑧ B-3区 (南より)

各調査区近景



⑦ B-3区 (北より)



⑨ B-3区 (南より)



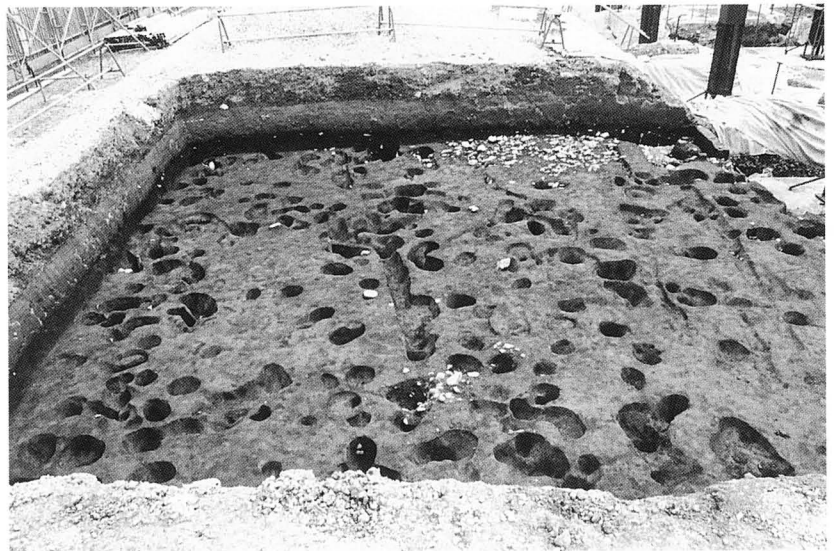
⑪ B-3区 (北より)



⑫ B-3区 (南より)



⑬ B-3区 (北より)

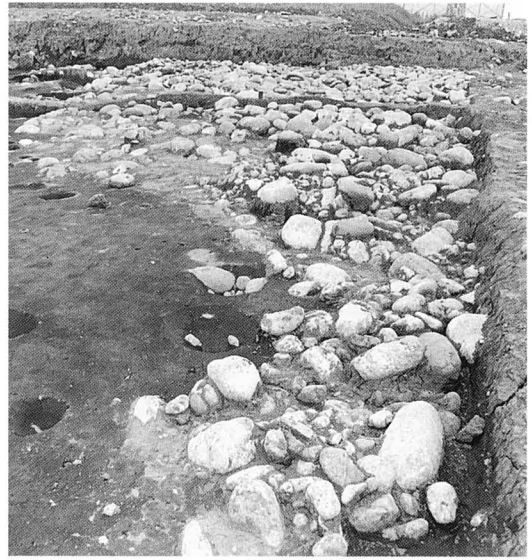


⑭ C区 (北より)

各調査区近景



① A区 石礫原1 (北西より)



① A区 石礫原1 (南より)



① A区 石礫原1 西側おちこみ (南より)



② A区 北端石礫原1 (西より)



① A区 石礫原2 母岩9出土状況



⑦ B-2区 石礫原2 (西より)



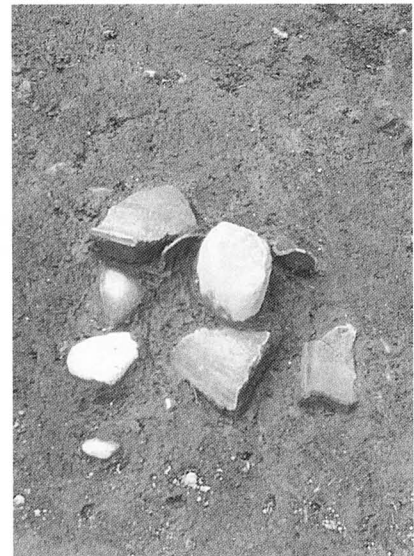
⑧ B-3区 石礫原2 (北より)



⑧ B-3区 石礫原2 (南より)



② A区 S11 (南より)



② A区 S11カマド周辺遺物



② A区 S11カマド (南より)



① A区 S12 (東より)



④ B-1区 S13 (南より)



④、⑥ B-1区 S13、B-2区全景 (東より)



④ B-1区 S14 (西より)



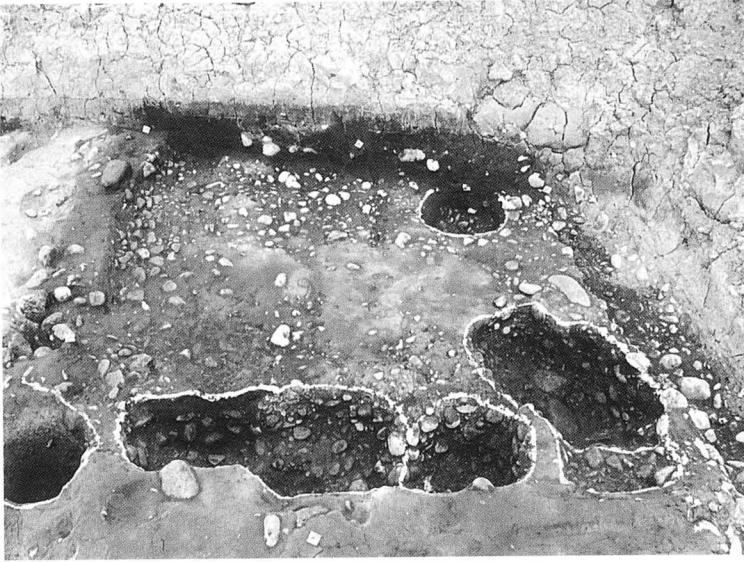
④ B-1区 S14カマド (北より)



⑩ B-3区 S15、S16検出状況 (南より)



⑩ B-3区 S15土器14出土状況



⑪ B-3区 S17 (東より)



⑪ B-3区 S17カマド (北より)



⑭ C区 S18焼土塊 (北より)



⑯ E区 S19 (北より)



⑯ E区 S19 (東より)



⑯ E区 S19カマド (北より)



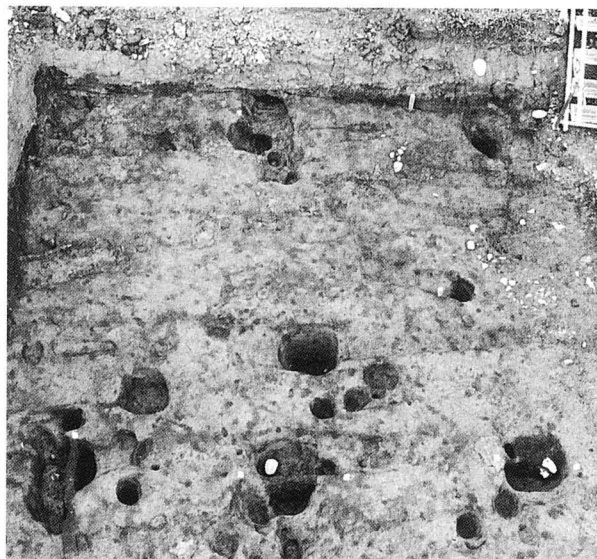
④ B-1区 SB1 (南より)



④ B-1区 SB1、SB2 (南より)



④ B-1区 SB2 (南より)



⑤ B-1区 SB3 (西より)



⑪ B-3区 SB4 (北より)



⑪ B-3区 SB4 (南より)



⑪ B-3区 SB5 (北より)



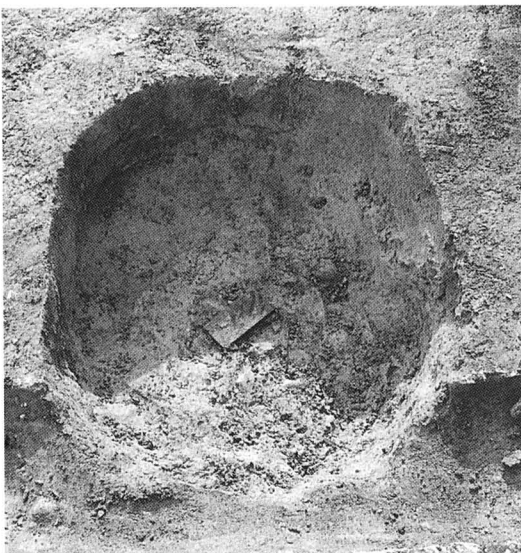
⑪ B-3区 SB5 (南より)



⑪ B-3区 SB6、SB7 (東より)



⑪ B-3区 SB6、SB7 (北より)



① A区 P3 木札出土状況 (東より)



① A区 SD3 (南より)



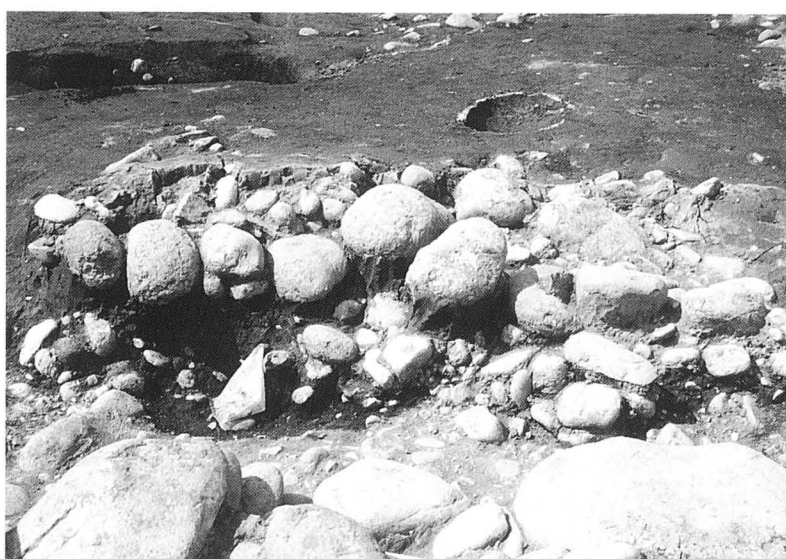
① A区 SD3 石礫等検出状況 (北より)



① A区 SD3 完掘 (南より)



⑪ B-3区 SD3 (東より)



⑪ B-3区 SD3 護岸石 (南より)



④、⑥ B-1区、B-2区
畝溝④ (東より)



⑬ E区 畝溝⑥ (東南より)



① A区 磨製石斧97出土状況



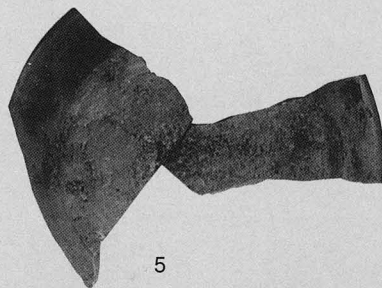
1



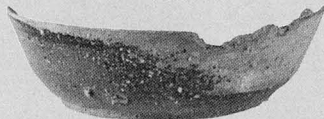
2



3



5



6



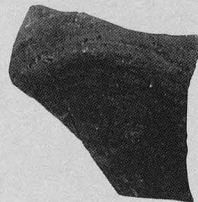
7



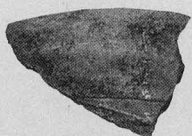
8



9



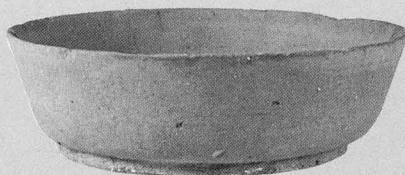
10



11



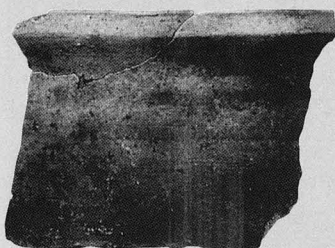
12



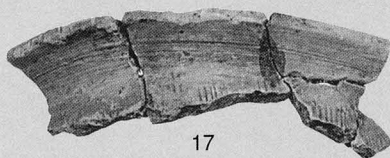
14



15



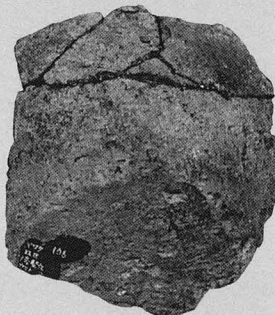
16



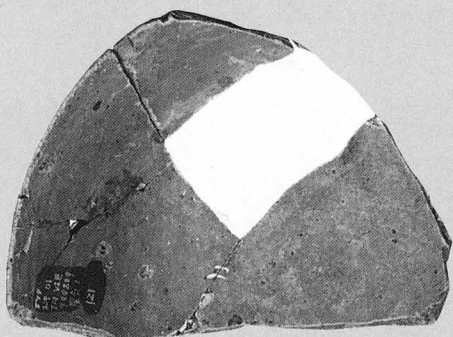
17



18



20



21 (内面)



21 (外面)



24



26



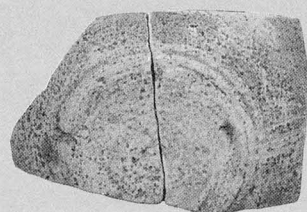
28



30

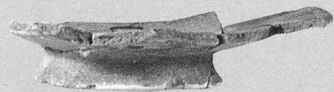


31



32

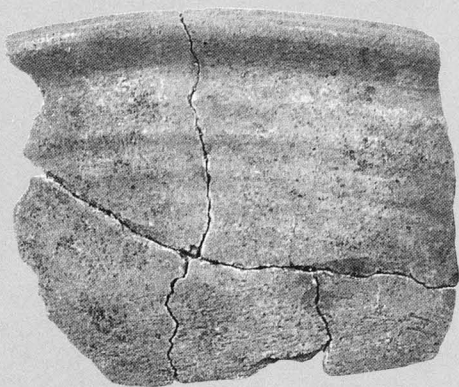
土器



33



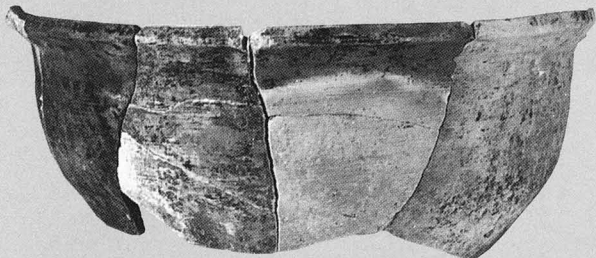
37



34



36



39



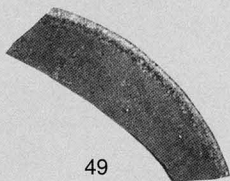
42



43



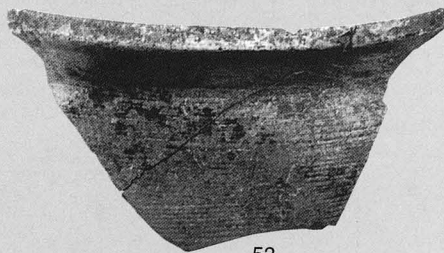
45



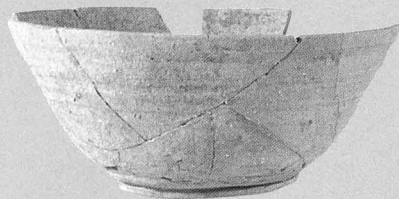
49



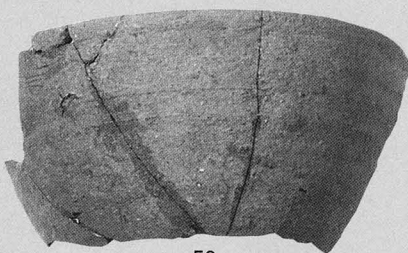
50



53



55



56



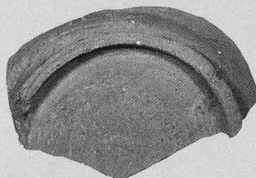
58



60



61



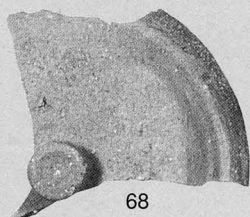
63



65



67



68



71



72



74

土器



75



77



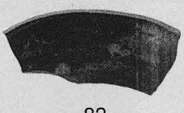
78



79



82



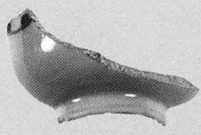
83



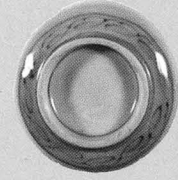
84



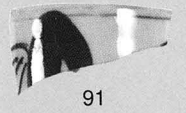
85



89



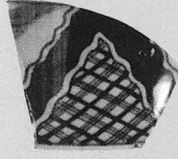
90



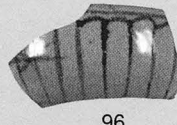
91



93



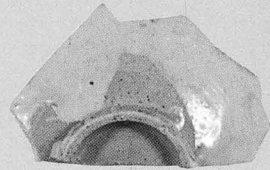
94



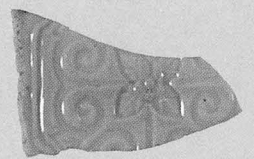
96



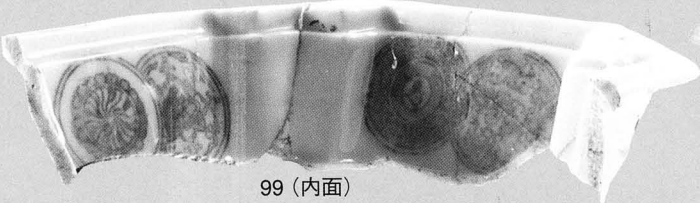
97



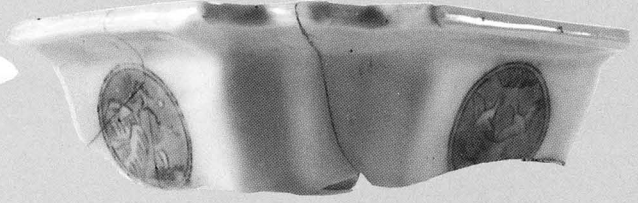
98



99 (底部)



99 (内面)



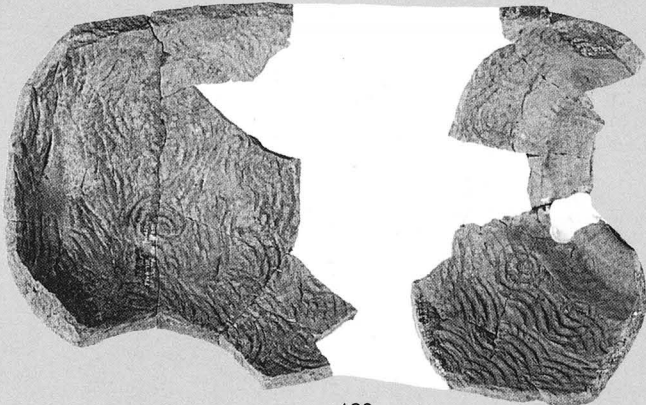
99 (外面)



101



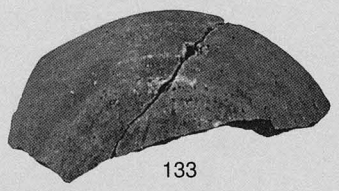
121



120



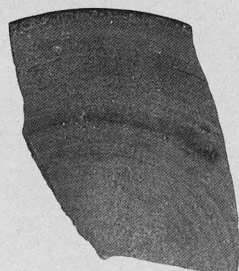
128



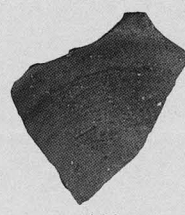
133



134



135

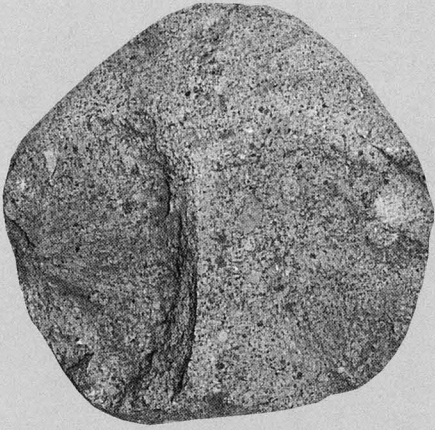


136



139

土器・陶磁器



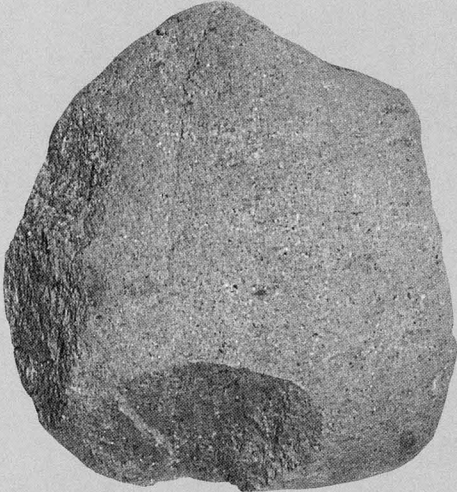
1



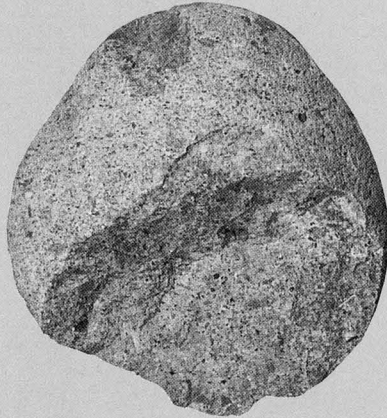
2



3



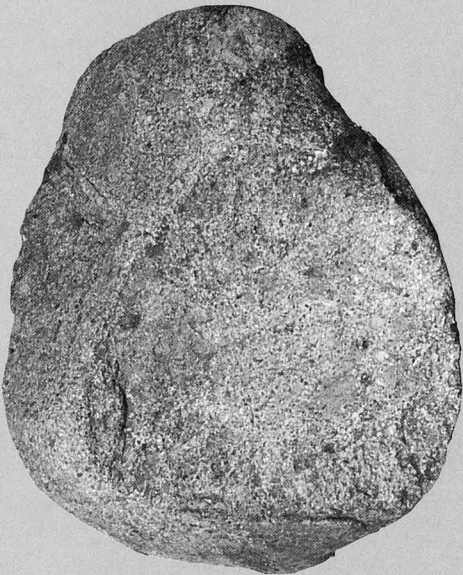
4



5



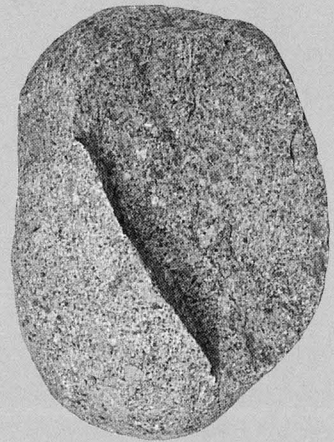
6



7

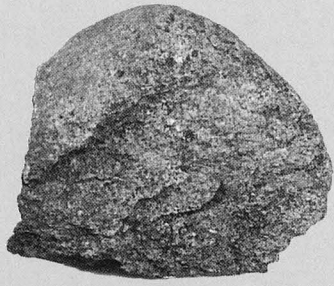


8



9

石製品



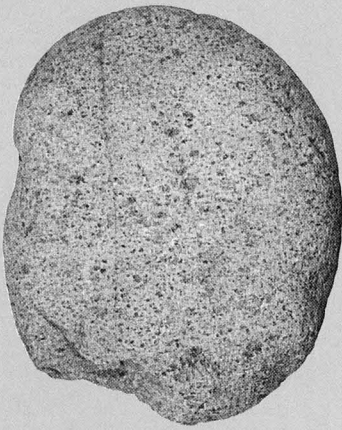
10



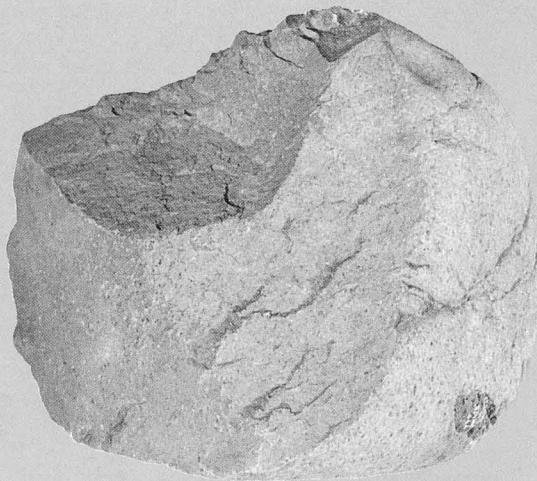
11



13



15



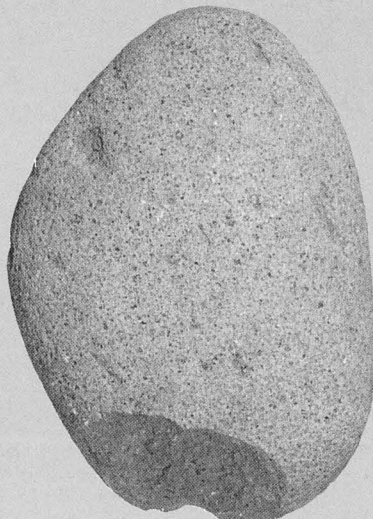
17



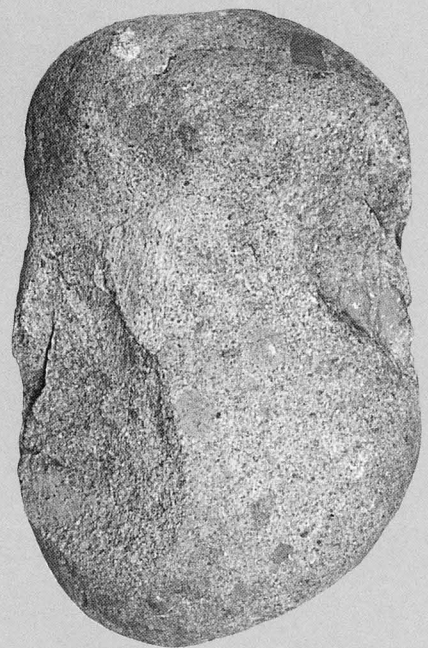
19



20



21



22

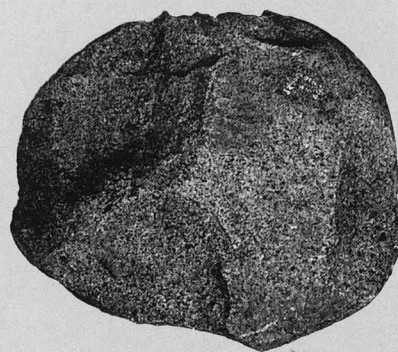
石製品



23



25



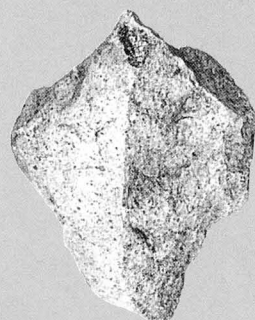
26



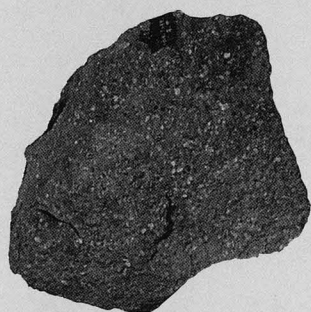
29



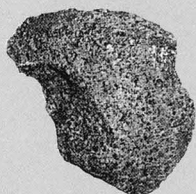
34



38



47



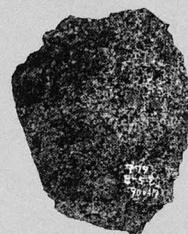
48



50



51



53



54



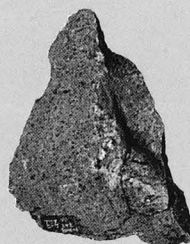
55



57



58



61



63

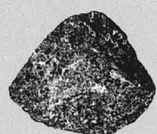


67

石製品



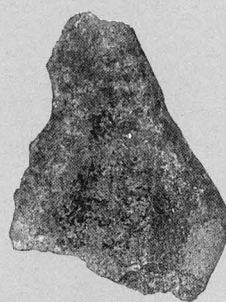
68



70



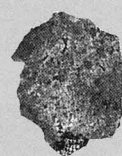
71



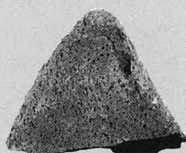
74



77



78



80



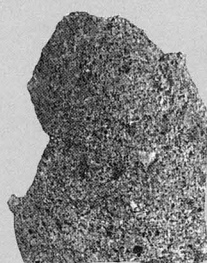
81



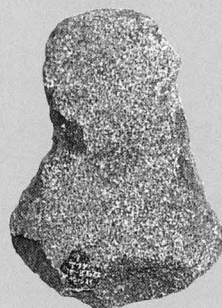
82



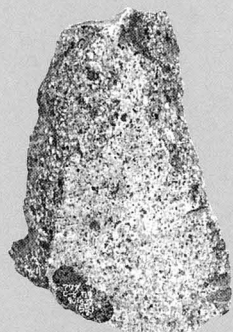
83



85



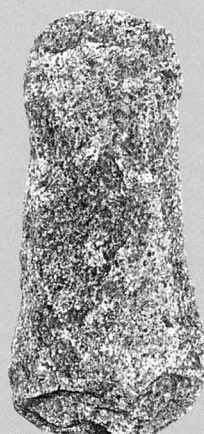
86



87



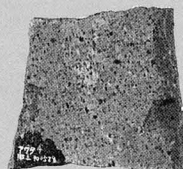
88



89



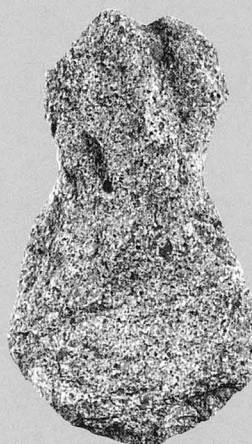
90



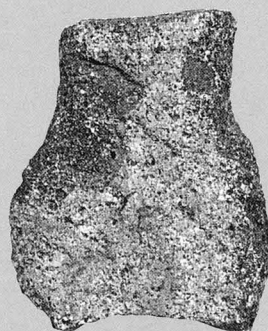
91



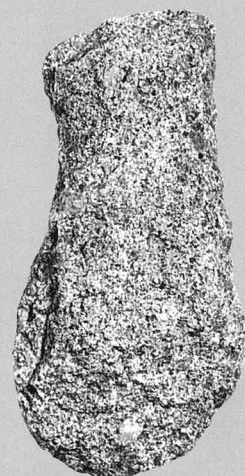
92



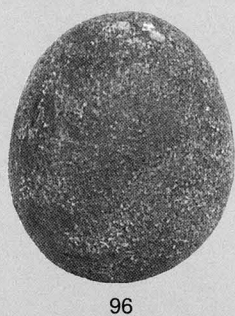
93



94



95



96



97



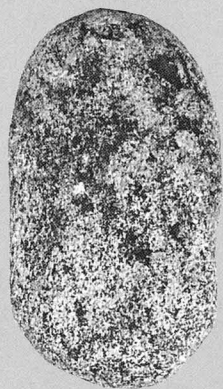
98



99



100



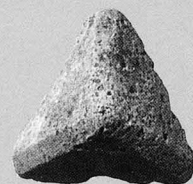
101



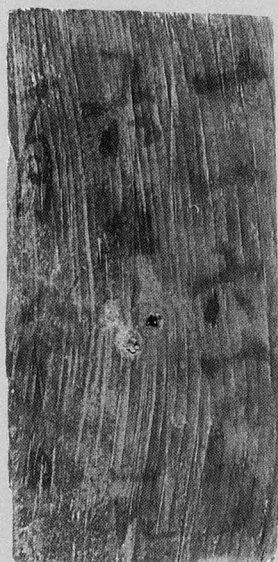
102



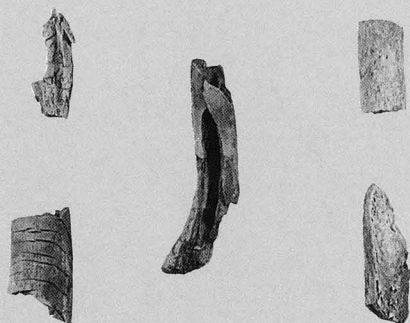
104



105



木札

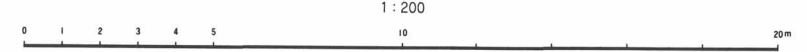


骨片 (A区SD3出土)

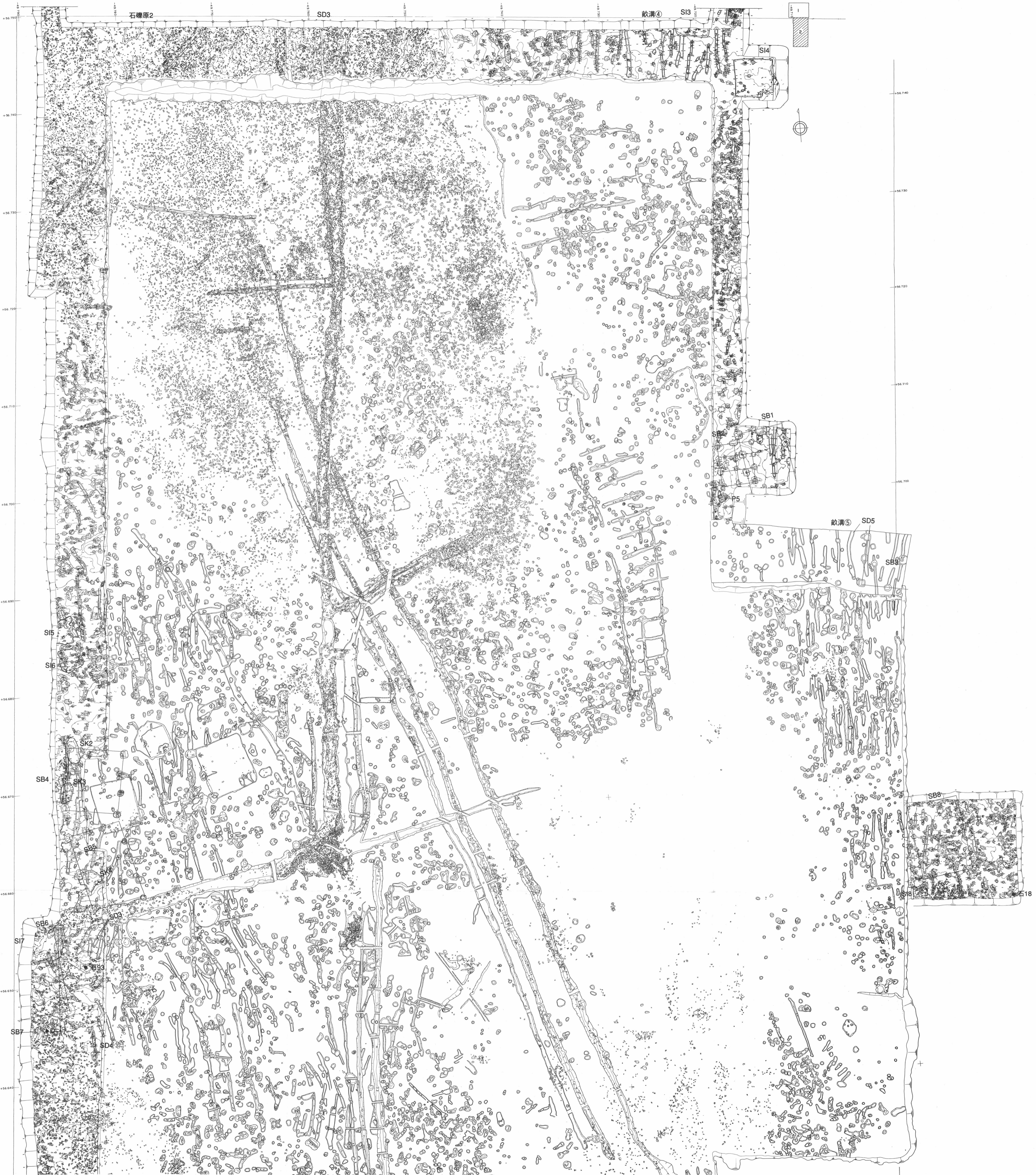
報 告 書 抄 録

ふりがな	あわだいせきだいにじほつくつちようさほうこくしょ							
書名	粟田遺跡第二次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
編著者名	田村昌宏							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1 ☎0762-46-2344							
発行年月日	1992年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° , ' "	° , ' "		m ²	
あわだ いせき 粟田遺跡	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 ののいちまち 野々市町 あわだごちようめ 粟田5丁目	17344	16008	36度 30分 30秒	136度 20分 30秒	1990.4.2 ～ 1990.10.15	6,000m ²	民間工場建設に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
粟田遺跡	石器製作場跡	縄文晩期		母岩石 剥片石 打製石斧		縄文晩期では石礫原で石斧製作場を確認。 奈良・平安期では 竪穴住居と掘立柱建物が集中して確認		
	集落跡	奈良・平安	竪穴住居 9棟 掘立柱建物 8棟 畝溝	土師器 須恵器				
		中・近世・近代	溝	陶磁器				

粟田遺跡二次調査遺構全体図No.1



栗田遺跡二次調査遺構全体図 No.2





1:200

